－文 芸－

草の丘

第 7 号

2014 年 12 月 印旛文学の会

文芸

草の丘　第七号（二〇一四年　一二月）

目次　草の丘 第七号

《詩》
ホーム、赤ん坊　中川 とら ……一
《短編》
廃屋の人形　堀本 ひろし ……三
そばにいるよ　土方 杳 ……二二
《連載》
初初しい季節（秋の抄）　中川 とら ……三六
アプとズコ（APPU & ZUKKO・第六回）　香取 淳 ……五五
青い実り（第三話・水子観音）　唐瀬 光 ……七九
《短編》
一発逆転の夢　畑中 康郎 ……一〇五
リプレイス　いんば 華子 ……一三一
《カット》　高橋 より
（中川とら・唐瀬 光のカットは著者による）

詩

ホーム

中川とら

黄線の内側に立って
電車を待つ

静かな卯の花色の空を見上げれば
すぐ　そばに
鳩が糞を落とし固まった
古い鉛色の鉄の梁

人が何人もいて
話する相手のいないホーム
ただ　だまって
電車を待つだけ

行きと帰りの間の刹那
数えきれない寡黙の
時を刻みながら
こうして　少しづつ
私が　年をとっていく

◇

赤ん坊

赤ん坊が
空を見ている
母の背中で
両手を上げて　反り返り
空を見ている

遠い遠い　さくら色の空だ

◇

廃屋の人形

堀本　ひろし

私は今年五十六になります。一応功成りとげたとでも言いましょうか。不動産業界に入って三十数年、遊んで食っていけるだけのお金が出来たものですから、自ら定年を決め込んで気ままに暮らしています。

えっ？　妻ですか、いないですよ、はじめから。二十代の中途から五十になるまで、仕事、仕事でしてね。ほっと息を抜いた時なんぞ、そりゃあ寂しいと思ったことは何度もあります。でもこれからお話する、不思議な体験をしてから、寂しいと思ったことはありません。

私は五十歳で仕事をやめています。どうせ一人身ですから、老体になってから身を退くよりも、まだ体の自由がきくうちに仕事をやめて、楽しいことをした方がよいと思いましてね。

名古屋に幼なじみがおりますので、仕事をやめてから月に一度ぐらい遊びに行き、将棋を指すのを楽しみにしております。

三年ぐらい前でしょうか。九月も終わりごろ、例によって友人の家で将棋を指していた時のことです。大抵は夕食をごちそうになって夜帰宅するのですが、その日は友人に急用が出来て、私は昼の一時に退散しました。普段は何もしていないし、友達らしい友達もおりません。仕方なしに帰宅しょうと思いました。

常滑の自宅まで車で一時間半ぐらいかかります。いつもなら、東海市、知多市の海岸沿いの工業地帯を通る産業道路、まあ、自動車専用道路ですね、そこを走って帰ります。

ところが、その日は遠まわりして、鳴海の方に車を走らせました。何もやることのない気楽さですので、大府の街で喫茶店に入りコーヒーでも飲んで、東浦の町中から半田市を抜けて帰ろうと思いたちました。仕事から身を退いて以来、東浦近辺には立ち寄っていません。懐かしい気持ちもありました。

東浦は、昔は織布屋さんの工場が建ち並んでいました。今はその跡地に分譲住宅が並んで、風景が一変しています。それでも古くからの住宅街には往時の面影が残っていました。懐かしさから、ふと七、八年前にお世話になった池内さんという、実直な方のことが心に浮かんできました。

池内さんのことが胸に迫ってくるほど懐かしいのです。土地の仲介をさせていただいたのがきっかけでしたが、娘さんの死によって、成約は出来ませんでした。その悲しい出来事が昨日のことのように、ありありと浮かんでくるのです。

可愛い娘さんでした。肌の色が抜けるように白くて、大きな瞳をしていました。凝視する眼差しに、エキゾチックな不思議な魅力があります。いつもおかっぱ頭で、赤い着物を着せた人形を抱きしめていました。

娘さんは絵理ちゃんと言いました。彼女はいつも私に挨拶をさせようと、人形の頭を前に倒そうとするのです。ですから、人形の首はぐらぐらしていて、いまにも取れそうになっていました。絵理ちゃんは当時小学校五年生でした。

池内さんご夫婦の自慢の一人娘でした。土地を買って、マイホームを建てて、行く行くは婿養子をとって……とお会いする度に将来の夢を話されるのです。

当時池内さんが住んでいた家は庭付きの借家でした。終戦後間もなく建てられたもので粗末な造りです。六帖二間に台所、後から増築したお風呂とトイレがあるだけの狭い家でしたので、一家三人がもっと広い家に住むのが夢だったのです。

絵理ちゃんが死んだ時、ご夫婦の悲嘆は目を覆うばかりでした。それを機にマイホームを諦めると言われた時は、仕事を忘れてお悔やみを申し上げるのが精一杯でした。

ハンドルを握りながらも、いろいろなことが次から次へと思い浮かんできます。あれからどうなったのだろうか、もう一度思い直してマ

イホームを購入されただろうか……。私は懐かしさに浸って車を走らせていました。どうせ帰り道の途中だから、立ち寄ってみよう、そう決心すると、車のスピードを上げました。

池内さんの家は、ＪＲ東浦駅の西側の高台にありました。高台への登り坂に加えて道は狭いし、借家や織布工場がところ狭しと並んでいます。車を停めるところがないので、東浦駅の広場に置いて歩いたものです。

私は七、八年前とは変わらぬその広場に車を停めて歩きました。踏切を越えて、今走ってきた県道を横切ります。そのまま西の方へ、だらだら坂を登ります。二十メートル程登ると、道は鍵の手に北の方に曲がります。それをさらに十メートルほど入った右手の板塀が池内さんの家です。南側に今にも崩れそうな、潜り戸があります。潜り戸の前には道祖神の祠があり、祠の東側は竹やぶが拡がっています。この風景は昔のままでした。

私は潜り戸を押して中に入りました。庭は広くて、奥に平屋の家があります。道の西側には高さが家の倍程もある屏風のような崖がそそり立っていました。庭が広い分、家の中に陽が入りますが、九月も過ぎると、昼の三時頃からは、陽は崖に遮られて暗くなってしまいます。

庭に一歩踏み込んだ時、私は言葉では表現出来ないような違和感に襲われました。何か異次元の世界に入ったような、肌の悪さを感じたのです。

庭は、かつては奥さんの手で野菜や季節の花が植えられていました。しかし、目の前に見る庭はとても荒れていました。昔なじんだきれいな庭の光景と異なっていたせいだったのでしょう。私はそのまま庭を突き進んで家の前に立ちました。玄関の引き戸に手をかけました。戦後間もなく建てられた家ですから、窓の木枠も杉板のよろい壁も粗末なものです。

玄関の引き戸は片引きで、立て付けが悪く、開けるには少々戸を持ち上げ気味にしなければなりません。家は当時そのままです。玄関の引き戸を開けて声をかけました。応答がありません。二度、三度大きな声をかけました。狭い家ですので家中に響くはずです。誰もいないのかなと思いましたが、土間には靴やつっかけがあります。空き家ではないことは確かです。留守かな、と私は失望して引き戸を閉めようとしました。

「はい……」と奥から子供の声がします。襖を開いて見たことのない

女の子が顔を出しました。可愛らしい顔立ちです。寂しい表情をしています。池内さんは引っ越しされたのかなと思いましたが「あの……池内さんのお宅？」と尋ねました。

「そうです」

彼女は言葉少なめに言います。

「あなた、お嬢さん？」

私は絵理ちゃんのことを思い浮かべて問いました。彼女はコクリと頷きます。

「お父さんか、お母さん、いる？」

「いませんが、すぐに帰ってきます」

「そう、私ね、昔池内さんにお世話になった者ですが、こちらの方へ立ち寄ったものですから……、待たしてもらっていいかな」

私の営業なれした図々しさに、彼女はまじまじと私を見つめます。私は絵理ちゃんと比較しました。背丈や年は当時の彼女と同じくらいでしょうか。目が大きく鼻筋がとおり、受け口の唇の可愛らしさ、肌の白さがよく似ています。

でも、絵理ちゃんの相手を睨むようなきつい表情はありません。目はどことなく焦点が定まらず、とろんとした感じです。顔全体の寂しさの中に抱きしめてやりたいような親しみが感じられます。

彼女はにこりと笑いました。輝くような柔和な笑いに誘われるように、「上がっていいかな」と言って、私は靴を脱ぎました。

彼女はすぐに西隣りの六帖の和室に私を招き入れました。部屋は当時のままで、粗末な床の間と押し入れがあるだけです。南側の掃き出し窓から見える庭の景色が違うだけです。

昔に還ったように懐かしいのです。

「今、お茶をいれますから」

彼女は私の感慨を断ち切るように言うと、台所に消えました。

私はその後ろ姿を見送りながら、池内さんにこんな子がいただろうか、そんな事を思いながら外の景色をみました。腕時計を見ると三時半です。窓の明かりが薄暗くなっています。私は立ち上がって蛍光灯の明かりをつけます。

同時に女の子がお茶を持ってきました。私の前に湯のみ茶碗をおくと、床の間を背にして、私と対座します。

私はお茶を飲みながら、所在なさに、「お父さん、帰ってくるの、何時頃？」と言い含めるように問いました。

「すぐ帰ると思います」

無造作に投げ返すような返事です。

「そう」
私は会話の流れの手づるを失って「お嬢ちゃん、おいくつ？」と訊いて、池内さんが帰ってくるまで時間を潰そうとしました。
「十歳です」
「そうすると小学校五年生？」
彼女は答えません。
仕方なしに、「お名前は？」と諭すように問います。
「綾といいます」
「あや？」
一瞬、私は幼いころに死別した妹を思い出しました。
「もう、七、八年になるかなあ、綾ちゃんと同じくらいの娘さんがいたけど……」
「死にました」
「失礼なことをきくけど、綾ちゃん、池内さんの子？」
「違います。わたし池内さんの弟の子です。ここにもらわれて三年になります」
「そう、池内さん、かわいがってくれる？」
「はい」
十歳の女の子なのに、打てば響くように答えます。いつしか私は魅入られたように、好きな食べ物は、おもちゃは好きか、本は読むか、と色々な事を尋ねました。
綾ちゃんは、寂しい表情のなかに、ときおり笑うと、とろんとした大きな眼が光り、顔が輝くのです。私はその表情に吸い寄せられるように話しかけました。
私は問いかけが尽きると、今度は池内さんとの出会いなどを、熱を込めて語ります。綾ちゃんは寂しそうな眼を私に向けて、私の話を一生懸命聞こうとします。
その気持がひしひしと伝わってきます。相手が十歳の子供だということも忘れて私は心の中のわだかまりを吐き出して語り続けます。
窓の外はすでに闇となっています。私は池内さんの事も忘れて、その場の雰囲気にどっぷりと浸かっていました。まるで何十年ぶりかに再会した恋人同士のような気分で。
私が我に還る一瞬を迎えたのは、絵理ちゃんがいつも抱きしめていた人形のことに触れた時でした。女の子の眼がギラリと光るのを、見逃しませんでした。
「おや？」
私は目ざとく彼女の表情が変わるのを見ました。人形に興味がある

のかな……私は不審な眼で見ましたがそれも一瞬のことです。もとのとろんとした眼と、柔和な表情にもどった綾ちゃんを見ながら、絵理ちゃんを思い浮かべていました。彼女は抜けるような白い肌と長い髪の毛が印象的です。その上、人を突き刺すような深い眼差しが、ぞくっとする印象を与えて、厳しい表情になります。それでもふっくらとした頬とまるみのある唇が顔全体に優しさを与えています。近寄りがたい中にも親しみが感じられるのです。

絵理ちゃんは人形を抱きしめ、いたぶりながら、時々、猫が獲物を狙うような眼をするのです。その表情に、私は男として胸がときめきました。彼女を抱きしめたい衝動に駆られたものです。

彼女はいつも人形を肌身から離しません。人形は首がぐらぐらで、いつ胴体から離れてもおかしくありませんでした。おかっぱ頭の人形はみていてかわいそうなほど乱暴に扱われていました。

彼女は好き嫌いの起伏が激しくて、自分の気に入らぬことがあると、人形を思い切り投げつけるのです。

私が訪問すると「絵里ちゃん、お客様ですよ。ごあいさつなさい」と池内さんの奥さんが言います。彼女は自分が頭を下げる代わりに、人形の頭を思い切り下げて、上目つかいで私を見ます。その眼の動きが、綾ちゃんのぎらりと光った眼とそっくりなのです。この子は絵里ちゃんの生まれ変わりではないか、そう思いながら、彼女を見ていました。私が絵理ちゃんを好きになったように、彼女も好きになっていきました。

綾ちゃんは紺の洋服を着ていました。髪を後ろに束ねただけの地味なスタイルでしたが、抜けるような肌の白さと、透き通るような大きな瞳、そして含み笑いをしているような唇に、私は見入っていました。彼女は正座をしたまま、いつまでも私を見ています。自分から声を発するのでもなく、私の質問に簡潔に答えたり、私の語るところをじっと聞き入っているだけです。

彼女の姿は、天井の蛍光灯の光で浮きあがって見えます。紺色の服が肌の白さを一層際立たせています。私は語る言葉もなくなりました。彼女に魅入られていますと、この世ならぬ幻影の世界に引きずり込まれて行きます。陶酔的な雰囲気にのめり込んでいきそうです。

そのようにはなるまいと現実の自分に立ち戻ります。

「お父さん達、遅いですね」

女の子はにこりと笑ってうなずきます。私も仕方なく笑い返します。私は池内さんが帰宅されるまで、この場を動けませんでした。部屋は明るいとはいえ、しんしんと空気が張り詰めています。身動きすら出

来ないような、硬い雰囲気が漂っています。

彼女は正座したまま、身動(みじろ)ぎ一つしません。私は持ち合わせた言葉のすべてを語り尽くして心は空っぽでした。その私の中へ、女の子の白い影が入り込んでくるのです。綾ちゃんを抱きしめたい気持ちを必死で抑えました。

「綾ちゃん、前に、どこかで会ったことない？」

突然私の口から、自分でも思いがけない言葉が出てきます。私の口が勝手に動いて、喋りだしたのです。私は思わずどぎまぎして彼女を見ました。

綾ちゃんは私の言葉を待っていたかのように、寂しげな顔に、唇を一文字に結びました。それが一層寂しく見えるのです。彼女は人形のように、こくりとうなずきました。

私は必死になって思い出そうとしました。もちろん、池内さんのこの家で会ったことはありません。どこであったのだろうか、と思い巡らしますが、一向に思い出せません。私は商売柄、気が長い方です。色々質問して彼女の気持ちを探ろうとしました。

彼女はすがるような眼で私を見るだけです。私は少し苛立ってきました。「綾ちゃん！」と私は咎めるように言います。彼女は悲しそうな眼を私に向けましたが、何を思ったのか、後ろに束ねた髪のゴムバンドを解きました。長い髪がさらさらと肩にかかります。

次に両足を前に投げ出すと、力なく両手をぶらんとさせて畳につけました。そして頭を首のところから、ガックリ前に倒したのです。

「あっ！」

私は喉の奥で声をあげました。全身に戦慄が走りました。恐ろしさのあまり立ち上がろうとしました。しかし、全身が金縛りにあったようで動きません。そのくせ、体は瘧(おこり)にあったように、ブルブル震え出すのです。

私の眼は首をたらした女の子に釘づけになったままです。長い髪が畳にたれています。それがゆらゆらと揺れているようです。眼の錯覚でしょうか、いえ、そうではありませんでした。彼女はゆっくりと顔を上げていたのです。白い顔が私に向けられました。私は恐怖のあまり、目の先が暗くなっていきました。気が遠くなっていきます。

……ほら、お客さんにあいさつしにゃきゃ、こうするのよ……

絵理ちゃんがお人形の首を乱暴に前に倒します。

……絵理ちゃん、お人形さんをそんなにしちゃ、かわいそうでしょ

う……

お母さんのたしなめる声。

……いいのよ、これで……

気を失う一瞬、私の脳裏に浮かんだ光景は、絵理ちゃんになぶられて、痛々しいほどに傷ついた人形でした。

私は暗闇にいました。闇……何という暗さでしょう。物の動く気配が全く感じられません。光の届かない深い地の中に浮いているような感じです。自分の肉体感覚さえ感じられず、ただここに自分がいるという意識しかありません。

死んだのだろうか……。不安な存在感だけが生々しいのです。鮮明な夢を見ているような感じでした。

やがて、一点の光が闇の中にあらわれました。それが大きくなっていきます。野球ボールほどの大きさになると、そのなかに、おかっぱ頭の人形が映しだされました。人形の顔がだんだん大きくなります。人の背たけほどになって、私の方に顔を向けます。

大型テレビでも見ているようだと思った時、画面が一変しました。

遠くに海が見えます。長々とした堤防と、その内側の港町の家々の屋根が連なって見えます。先ほどテレビを見ているようだといいましたが、訂正しなければなりません。何故ならその情景の中に、私自身の肉体感覚が生きていました。風の冷たさ、潮の匂いなどがはっきりと感じられるのです。その景色のなかに、私がいるのです。と言っても今の私ではありません。その風景の中に子供の私が立っているのです。

ああ……。私は懐かしい声を上げました。それは声になりません。私には一生忘れることのない思い出深い光景だったのです。

私は小学校五年生で、つぎはぎだらけの服を着ていました。私はあふれる涙を拭いもせず、寒風の吹きすさぶ西風になぶられて、いつまでも立ち尽くしていました。

子供の私が、私の側に立っているのです。思い出の光景そのままに……。私は幼い私に声をかけました。私の声が、児童の私に聞こえる筈はありません。手で触れることも出来ません。

私はこの光景の中に存在しながら、ただの傍観者でしかありません。それでも私の古い記憶の中から、ほとばしるような激情が溢れてくるのです。それに呼応するかのように、幼い私の胸が嗚咽するのです。

小さな私は松の樹に身を寄せて、眼下の港町や荒れ狂う海を見下ろしていました。風は松の梢を吹きちぎろうとしています。その度に枝は切り裂くような悲鳴をあげます。

三つ年下の妹が亡くなりました。私の人生で最も悲嘆な日でした。それも感受性の強い子供の時に味わった悲運でした。その死は両親が死んだ時よりも大きな衝撃でした。

私は妹を可愛がりました。朝起きる時から夜寝るまで、私達はいつも一緒でした。私の家は貧しくて、両親は朝五時に起き出して、夕方七時まで働きづめです。そのため、私は物心ついたときから妹の面倒を見ていました。

朝起きると、着替えさせ、朝飯をたべさせて、一緒に学校へ行きます。妹が入学する前は、私の授業が終わるまで待っていたり、先生方が私の立場を理解してくれていましたので、職員室や宿直室のおじさんの部屋で遊んでいました。当時は給食がありませんでした。私が作った麦のおにぎりを食べて、学校から帰ると、母から言いつかった夕食のおかずを買ったりします。夕食は八時頃、一家団欒ですが、朝が早い両親は九時頃には寝てしまいます。その後、私と妹が風呂に入ります。粗末な五右衛門風呂でしたが、湯船に浸かっている時が、私達には一番の楽しみでした。

この時ほど、つるべ井戸から水を汲み出して風呂桶に入れる苦しみを忘れるときはありません。それから就寝の十一時まで、学校の宿題をやります。

妹は肌が白くて、ぽっちゃりとして、可愛い子でした。少しでも嫌なことがあると辛抱が出来ない性格で、わんわん泣き出して私の胸に飛び込んできます。

私は飴を与えたりして、泣き止むまであやしたりします。妹は飴を口のなかに頬張りながら、涙に濡れた大きな眼で私を見上げます。にこりと笑って私に抱きついてきます。私は妹が大好きでしたので片時も離したことはありません。

彼女は七つの時に風邪をこじらせて死にました。もともと体が弱く、季節の変わり目には、よく熱を出して寝こみました。そんなとき、私は友人から担任の先生へお願いして学校を休んで看病に努めました。普段なら三、四日、長くても一週間ぐらいで治ります。妹の年中行事のようなものでした。私も両親もそれ程心配はしていなかったのです。

ところが、この時は様子がおかしかったのです。二、三日高熱がでて、後は熱が下がるのを待つ筈でした。

四日たち五日が過ぎても熱は下がりません。妹は赤い顔であえぎながら息をしています。さすがの両親も、二、三日仕事の手を休めて医者を呼んだりしました。医者の見立てですと、肺炎を併発していて大

変危険な状態だったそうです。一応薬の手当はしてくれましたが、看病の甲斐もなく、苦しい吐息の中で両親や私の呼びながら、短い一生を終えたのです。

……お兄ちゃん、助けて……。

その喘ぎ声を今でも忘れることは出来ません。私は泣きました。妹は私の宝でした。

彼女の葬式が終わりました。心のなかにぽっかりと穴が開いた感じです。虚しく寒々とした空気が吹きつのってくるのです。私は生きる張りをなくしました。毎日泣いたのを、昨日のことのように覚えています。彼女の形見の、手のひらの乗りそうなほどの五月人形を、大切にもっていました。家が貧しいので、満足なものは何も買ってもらえません。その人形もゴミ捨て場から拾ってきて、手直しをして妹に与えたものです。妹は喜んで大事にしていたのです。

――今こうして話をしていましてもあの時のあの光景が心に浮かんできます。何もなくても、私と彼女は幸せでした。心が一つに溶け合っていました。寒い夜など、せんべい布団しかありませんでしたので、寒がり屋の妹を抱いて温めて寝たのも、まるで昨日の事のようです――

眼下の荒々しい海と寒風吹きすさぶ町の屋根を見下ろす丘の上に、私は立っていました。懐かしい光景でした。その時の私は戸惑っていました。現在の自分と、悲嘆のどん底にあった十歳の私がオーバーラップしていました。私は子供の私の心の中に、今の自分を没入したい衝動に駆られました。

もう一度あの時の自分に還りたい。妹にあいたい、今の自分を無にしてしまいたい。私は松の幹に寄りかかって立ちすくむ幼い私の中に入り込もうとしました。

その瞬間、私の気持ちを拒絶するかのように、情景が一変しました。同じ常滑の町中の、大きな屋敷の庭に私がいました。屋敷の前庭で、私と同年輩の涼子が、私から取り上げた妹の形見の五月人形を焚き火の中に投げ入れようとしています。そばで十三歳になった私が無念そうに眺めています。この光景は無残で苦々しいものでした。

妹が死んで三年たった後に、仕事上の事故がもとで両親がなくなりました。私はおじの家に引き取られましたが、おじ夫婦や、一人娘の涼子が好きになれませんでした。私の父は金がない時、たった一人のおじを頼りにしていました。

おじは不動産の売買や仲介をしていて、大変羽振りがよく、当時、常滑で一番の不動産屋でした。私が不動産業界に入ったのも、おじの影響がありました。

父がお金を借りるにしても、快く貸してくれたことは一度もありません。私どもがおじの家を訪問しても、座敷に上げてもらった事もありません。いつも台所の土間で用件をきいて、蝿でも追い払うかのように追い返します。たった一人の血のつながった兄弟でありながら、おじは私達を冷たい眼で見るのです。貧しくて、商売の才覚もなく、朝から晩まで体を動かすしか能のない父を軽蔑していました。自分の身内にこんなのがいるのが汚点だと言わんばかりで、おじは決して人前で父と話をしたことはありません。

おじが私を引き取るのは世間体を気にしての事でした。心の底で私を疎んじていることぐらいわかっていました。自分一人で生きていけたらと何度思ったかしれません。子供の私が自立できるわけもなく、おじの家で生活するしか、方法がなかったのです。

住まいとしてあてがわれたのは、主屋の北にある二坪ほどの物置小屋でした。天井が低く窓も小さく、夏など蒸し風呂に入っているようでした。

学校から帰ると、風呂の水を入れたり、屋敷の掃除をしたり、買い物や風呂焚き、その他雑用をやらされます。別段苦労と思ったことはないのですが、おじ夫婦は私を親戚の子供として扱った事もなく、小遣いをくれる訳でもありません。三度、三度の食事と学校の教材費など最小限のお金をくれるだけです。私は新聞配達をして小遣いを稼ぎました。

涼子は金持ちの家を鼻にかけて、高慢ちきでした。自分が注目の的でなければ気の済まない性格で、いつもスター気取りでした。美しい女の子でしたので、おじ夫婦の自慢の種でした。

目の前の光景は、忘れもしないほど屈辱に満ちたものでした。私が大切にしていた人形を、涼子はめざとくみつけて、私から取り上げたのです。これみよがしに、遊びに来ていた同級生に見せびらかしながら、私を嘲笑しました。

男の子が、女の子の人形をもっていたのですから、笑うのが当然です。涼子は蔑みの顔をして、ぶるぶる震えて、蒼白な顔をして突っ立つ私を見下していたのです。

こんな貧相なのが、この屋敷にいるなんて……、彼女の眼がそういっているのが痛いほど判るのです。私は彼女を睨みつけていたのです。その時の私の顔はすさまじいものだったのでしょう。涼子の顔から軽蔑の色が消えて、怯えるような、そのくせ挑んでいるようなこわばった表情に変わっていました。

何よ、その眼つきは！　涼子は鬼のような憎々しい笑いをしました。

すぐに顔が引きつり、泣き出しそうな表情に変わります。今にも人形を焚き火の中に投げ入れようとしていたのです。

――殴ってしまえ――。私はもう一人の自分に叫びます。そこに突っ立つ私は、俯いたまま耐え忍んでいます。その時の気持ちを、私はよくわかっていたのです。涼子に手出しすることなど、自殺行為に等しかったのです。しかし私はけしかけるように叫びました。

――殴れ――。無論声にはなりません。が、私の心底からの気持ちが通じたのか、私は顔を上げてきっと涼子を睨みつけて、一歩近づき、人形を取り上げようとしました。人形は、私の手が触れる前に焚き火の中に投げ捨てられたのです。私は涼子の手を思い切り叩きました。それが私にできる精一杯の抵抗だったのです。

涼子は大げさな悲鳴を上げます。いかにも芝居じみていました。それだけに涼子への憎しみが募ります。私はおじからひどく叱られました。居候のくせに、ここにおいてやるだけでも有難いと思え、ここが嫌なら出て行け、と罵声が浴びせられます。冷たい仕打ちに、私はあらためておじを憎みました。

中学を卒業すると、私は名古屋に行きました。亡き父の友人の知り合いで、小さな不動産屋に、見習いとして住みこんだのです。おじの使い走りをしていたおかげで、多少は不動産の知識はありました。私はおやじさん（不動産屋さんの社長をこう呼んでいました）に重宝がられました。おじを見返してやりたい気持ちで、必死になって働いたのです。不動産の免許を取るために、夜間高校にも通いました。

幸い、おやじさんは私をかわいがってくれました。おやじさんと私だけの店でしたので、儲かった時などは若い私に身に余るほどの給料をくれました。私は人一倍働いて、せっせと貯金をしました。後継のないおやじさんは、私を我が子のように色々なことを教えてくれたのです。私が二五歳の時に、おやじさんが亡くなり、わたしにその全財産を残してくれました。それから五十歳で身を引くまで、私は無我夢中で働いて、故郷の生家の土地を買い取り、新築して今日に至っています。

おじの家を飛び出してから、私は一度もおじの家に立ち寄ったことはなく、葉書一枚出したこともないのです。

涼子が二十歳の春を迎えた年に亡くなったことを知っても、私はお通夜にさえも行きませんでした。

おじも不動産屋、私も不動産屋ですから、おじの動向は同業者の間から漏れ聞こえてきます。おじの武士的な昔気質の商法とでもいいましょうか、うちの店の門をくぐって来たから売ってやる式の商法は、

高度成長期から成熟期に入りつつある時代に対応できなくなっていました。沢山の不動産屋が輩出する時代に入っていたのです。

競争時代に入ってからは、おじは大きな負債を抱えて、涼子が死んで七、八年後に倒産しました。おじは私に資金の援助を求めてきましたが、私は返事をしませんでした。

後年おじの屋敷は取り壊されて、常滑の大手タイルメーカーの寮に変わりました。おじ夫婦はまだ生きていますが、昔日の面影はなく、うらぶれて長屋の一角でひっそりと暮らしています。私は会ったこともなく、会うつもりもありません。

涼子が焚き火の中に人形を投げ入れる時、私は、子供の私を励ましながら、その場に居合わせました。私は思わず手を出して人形を取り出そうとしましたが、どうすることも出来ませんでした。ただ立ちすくんで俯く私をみて、嘲笑する涼子を激しく憎んだのです。

もし人形が焼かれずに今でも持っていたら、あるいは私の人生は変わっていたかもしれません。人形を失ったことで妹のことは忘れようと思ったのです。私はおじへの憎しみで一杯でした。そのために、妹の事は努めて思い出すまいとしました。

私は涼子の手をひっぱたきながら、為す術もなく立ちすくむ子供の私に入り込んで、涼子への恨みをその場で晴らそうとしたのです。

突然、それを拒絶するかのように場面が一変します。

涼子が寝ています。熱にうかされて、赤い顔で、あえぎあえぎの息の下、見るも哀れなほど衰弱しています。彼女の部屋の中の光景であることは一見してわかります。

おじの家にいた頃、私は涼子の部屋や屋敷中の部屋の掃除をやらされていたのです。涼子はぬいぐるみや人形が好きで、十帖の部屋一杯に棚を設けて、外国から取り寄せた人形と一緒に所せましと並べていました。

私の眼はテレビ画面でも見るように、涼子の部屋に見入っています。涼子の寝顔や部屋のカラフルな壁紙やぬいぐるみをぐるりと見渡します。画面が涼子の頭の方、南の窓に面した棚まで動きました。そして、あのおかっぱ頭の人形が大写しになったのです。

私は驚きのあまり声を上げるところでした。もっと驚いたのは、人形が私をじっと見ているのです。その眼の表情が誰かに似ている、そう思った時、人形の眼から大粒の涙がこぼれました。私の驚きは、人形が涙を流すという奇怪な現象よりも、その眼の表情が、死んだ妹の泣いた時の顔にあまりにもよく似ていることでした。

――綾！　――

私は叫びました。今この腕に抱きしめたい、妹のぬくもりをもう一度この腕の中に味わいたい。私は欲情にも似た激情にとらわれて、胸の内が熱くなりました。

その瞬間、私の眼は涼子の頭の後ろを眺めていました。涼子の部屋にいて、人形の眼を通して眺めていたのです。

彼女は自分の部屋を掃除したことがありません。横のものを縦にすることもなく、人形やぬいぐるみは散らかし放題でした。

私はこれでも女かと思いながら掃除したものです。その軽蔑の気持ちから、学校では涼子を無視していました。ただ綺麗なだけの身勝手でいつも自分が注目の的にならなければ済まない涼子を、私は憎んでいたのです。

彼女はわざと部屋を散らかしておいて、私に後片付けをさせてうさを晴らしていたのでしょう。ですが私は掃除などなんとも思ってはいません。散らかって汚れたぬいぐるみを綺麗にして棚に戻したり、髪の乱れた人形の髪を梳いてやったりしたものです。

特にこのおかっぱ頭の人形は綺麗でした。心を込めて髪を梳いたり着物の汚れを落としたりしました。ひな人形が焼かれた後はこの人形に心をこめてきれいにしました。この時ばかりは妹のことを思い出して孤独を慰めていたのです。

この人形を池内さんの家で見た時は、昔の面影は全くありませんでした。首も取れそうで、赤い着物も紫色に変色していました。とても同一の人形とは思えません。それにこのたぐいの人形は世間にざらにあるので、同じ人形とは思えなかったのです。

人形の眼を通して、私は涼子の部屋を見渡していたのです。でも、これは私の意志ではありませんでした。人形の中の何かの意志の力が私を引きこむようにして見渡しているのです。私は傍観者でした。

部屋の中を一通り見渡すと、人形は涼子の乱れた髪を見つめました。憎い、殺しても飽きたらない女です。私は憎悪に燃えていました。殺してやりたい！

私の気持ちに呼応するかのように、突如、人形が動き出します。その時の私の驚きは想像するにあまりあるものでした。涼子の頭部が目の前に大きく開けました。人形の眼が頭部から顔へと移ります。あえぎあえぎの涼子。その赤い顔が私の前にさらされた時、私は驚きと憎しみの気持ちが交差しました。

涼子の荒い息遣いが聞こえます。むくれた赤い顔の熱も感じられま

す。私は熱病にうなされた妹の顔を思い出しました。この女もこれで死ね！　私は残酷な気持ちで涼子を眺めていたのです。

涼子の顔が顔面に大きく拡がっています。人形は涼子の胸に乗りかかっているようでした。私が憎悪の念を送ると、涼子の息遣いも荒くなっていきます。

私は涼子を凝視し続けます。やがて涼子の顔から脂汗が滲んできます。荒い息遣いは少しずつか細くなってきます。血の気が失せて、赤い顔が白くなってきました。

……死んだ……。涼子の息の根が止まった時、顔前の光景が一瞬のうちに消え去りました。闇となり、私は宙の中に放り出されたような不安な気持ちにおそわれたのです。まるで墓場の中に押し込まれているような、なんともいいようにない苦しさが心のうちに沸き上がってくるのでした。

――私が涼子を殺したのか？　――

これは現実ではない。涼子は私が名古屋にいた時に死んだのだ。私は自責の念から逃れるように自問自答しますが、涼子の死に顔がありと浮かんでくるのです。それを振り切ろうと思えばおもうほど、寂寞とした気持ちに襲われるのです。涼子には悪いことをした。私は砂を噛むような思いで涼子への憐憫の情を抱きました。涼子の死後、多くの人形やぬいぐるみは古物商や知人の子どもたちに引き取られたと聞いています。

私は闇の中で、涼子への自責の念にかられましたが、時が経つにつれてその気持もおさまってきました。そして、急に眼の前がひらけました。私の暗い気持ちを吹き飛ばすかのように、眼の眩むような青い空がひろがっているのです。

涼子への感傷は砕け散りました。この青い空も私の記憶に鮮明に残っているものです。池内さんのところに通うようになって、約八ヶ月後、不動屋さんからの紹介の土地を、池内さんに見せにいった時のものでした。池内さんご夫婦と人形を抱いた絵理ちゃんが同乗しました。お見せした土地は区画整理地内の南向きの優良宅地です。今までお見せした中では最良の物件でした。

私は商売というよりも、絵理ちゃんに会うのが楽しみで土地を見せていましたので、断られても気にもとめなかったのです。この日、他の土地も見せたりして、ドライブを楽しみました。夕方、池内さんを自宅まで送りながら、今日見せた土地がいかに安くて良いかを説明しました。

池内さんはいつも乗り気で真剣に考えてくださる方です。真面目な

方で、冷やかしで見に行くような人ではありません。マイホームを手に入れたい、その情熱は私にもよくわかります。土地が気に入り、いついつに手付金を入れますという話まで行きますが、土壇場になって、申し訳無さそうに、断りの電話が入ります。そんなことの繰り返しでした。絵理ちゃんがいなければ、とっくの昔に縁を切っていました。今回も多分ダメだろうと思っていたのです。

それから数日後、池内さんから連絡が入りました。手付金を入れたいという話です。この時は今度こそ本物だろうと思ったのです。私はほっとしましたが、これでもう絵理ちゃんと会えないかと思うと寂しい気持ちになりました。

私の心の推移を見守るかのように場面が池内さんの部屋に一変しました。私が手付金について話をしています。テレビの画面をみているような、客観的な捉え方です。私の目の前で、池内さんご夫婦は、卓袱台に広げられた契約書を見ています。手付金を出して、私の説明に聞き入っているのです。

画面は絵理ちゃんを大写しにしています。人形を弄びながら、大きな目をしっかりと私に向けています。人形の首を、ぐいっと横向きにして、まるで人形に向かって、お前はこちらを向かなくてもいいんだと言わんばかりの仕草です。彼女の手が人形から離れました。人形のねじれた首が、彼女の胸の中でくるりと回転して、池内さんの方を向きました。その眼が、ぎらりと光ると、池内さんを厳しい眼で見たのです。

「やっぱし、この土地も駄目ですわ……」

突然、池内さんは人が変わったように言うと、卓袱台の上の手付金をそそくさと収めてしまいました。私は呆然と池内さんを眺めるばかりです。

この場面の出来事を私はよく覚えています。遊び半分と心得ていた筈の私も、このときばかりは、「一体どういうつもりですか」声を荒らげたのです。池内さんは首をたれたまま一言も発しません。私は絵理ちゃんを見ました。

――怒らないで――。哀願するような眼差しに、私はハッとしました。作り笑いをしながら、その場の雰囲気を和らげるようにつとめました。帰り際、池内さんは深々と頭を下げながら、本当に申し訳ない、また他にありましたらと言われました。

私は絵理ちゃんに会いさえすればそれでいいんだと、自分を納得させながら帰りました。それから絵理ちゃんが亡くなるまでの約四ヶ月間、二、三の物件をお見せしましたが、はかばかしい話もないままに

終わりました。

場面が変わります。絵理ちゃんが熱にうなされて寝ています。涼子と同じような場面です。彼女の枕元に人形がありました。肩まである髪は乱れ、石膏の白い顔は汚れて物悲しい目鼻立ちをしています。赤い着物も日焼けして色あせていました。

季節は秋です。午後四時頃ともなれば、部屋は薄暗く、一人暮らしの絵理ちゃんは、薄闇に押し包まれるように、荒い息遣いをしています。池内さんは共稼ぎで、夕方六時頃でないと帰ってきません。

彼女は汗びっしょりです。桃色に染まった顔にへばりついた髪の毛が生生しく、エロチックにさえ見えます。かわいそうな絵理ちゃん。この場面の中に入って、抱きしめてやりたい衝動にかられて、私はこの場面に見入っていたのです。

私の衝動は苛立ちに変わりました。何故中へ入れないのか、できることなら中へ入って、絵理ちゃんの心に没入して、私の魂と引き換えに、救ってやりたい。私は渇愛にも似た恋を、この時はっきりと感じたのです。

私の心を無視するように、画面は絵理ちゃんの苦痛の表情を、大写しにしていました。まるで私が苦しむのを楽しんでいるかのようです。私は眼をそむけることが出来ません。彼女への愛が私の苛立ちを一層強くします。枕元に横たわる人形に怒りの声を上げたのです。

突然、人形がぴょこんと立ちました。その眼は私を見ています。私は救いを求める眼差しを人形に向けました。

その時、私の脳裡に鮮やかな思い出が浮かび上がります。それがそのままオーバーラップして、寝姿の絵理ちゃんと人形をいじめる絵理ちゃんが二重写しとなりました。

――お客さんにきちんとあいさつしなきゃ、駄目じゃないの――

――絵理ちゃん、お人形さんをそんなに乱暴にしちゃ駄目でしょう――

――いいのよ、この人形、お客さんの方ばかりみてる。あたし、この人形大きらい！ ――

――絵理ちゃん今度おじさんが、いいもの買ってあげるからね――

――ほら、人形のお馬鹿さん、お客さんが、あたしにいいものを買ってくれるって、あんたには何もないのよ――

……人形は絵理ちゃんにさんざんなぶられています。首の取れそうな人形は、髪を振り乱して、哀れな、そして無念そうな表情をしています……

私は複雑な気持ちになりました。ふと気が付くと、画面は立ち上がった人形と寝姿の絵理ちゃんだけになります。

人形が動き出しました。絵理ちゃんの顔のそばまで来ると、ぱたりと倒れて絵理ちゃんの顔にうつ伏せになったのです。私は凍りついたような気持ちで、この光景を眺めました。

――絵理ちゃんが殺される――

私の予感は的中しました。衰弱が激しくて身動きできないのか、絵理ちゃんの荒い息遣いは静かになります。絵理ちゃんが死ぬと、人形は顔から振り落とされるようにして、絵理ちゃんの枕元に転がりおちました。

仰向けになった人形は私を見ていました。今にも泣き出しそうな、救いを求めている妹の顔でした。

――ああ、綾！　――

私は声の限り叫びました。

画面が消えました。再び暗闇の中に包み込まれました。心は悲しみでいっぱいでした。妹の顔と絵理ちゃんの顔が入り乱れて錯綜するのです。やがて私の意識は朦朧としていきました。そして、眠りにつくときの気だるさに襲われました。

私は身の凍るような寒さで、眼を覚ましました。ぱっと跳ね起きると、朝の光が霧をたちこもらせながら、破れたガラス窓から射し込んでいました。慌てて周囲を見渡します。壁土は崩れおちて、襖は破れ放題です。畳がぼろぼろの廃屋の中に私は寝ていたのです。朝日の暖かさに少しは救われましたが、身の毛のよだつ光景に、愕然としました。体の節々が痛くて、しばらくは立ち上がることが出来ません。眼の前に、薄汚れた人形が転がっています。

人形の髪は抜け落ちて、赤い着物はぼろぼろになっています。眼はうつろでしたが、小さな唇と豊かな頬が、幸せそうな親しみのある表情をしていました。

私の心には、おぞましさや恐ろしさは消えていました。

……綾　……

私は人形を拾い上げて、胸の中にしっかりと抱きしめます。安らかな気持ちが体中に広がっていき、私の中の欠けていた部分が、今しっかりと嵌め込まれたような充足感がありました。

家の外に出ると屋根の瓦は一部が崩れ落ちて、杉板が剥がれていました。荒壁の竹小舞が、あばら骨のようです。庭のすすきはのび放題で、幽霊屋敷のようでした。私は道路に出ると、この家の事を近所の人に尋ねました。

娘さんが死んで間もなく池内さんは何処かへ引っ越しされたとか、その後大家さんは借り手を捜したそうですが、どういう訳か借りてもなく、そのまま放置されたそうです。

私は人形を持ち帰りました。髪の毛や着物を新しく手直しして、ぐらぐらの首も全部直しました。

最後に一言。あの廃屋ですが、あれからすぐに打ち壊されて、新しい家が建ったそうです。

〈了〉

☆☆☆ 会員募集のお知らせ ☆☆☆

『印旛文学の会』では、新進気鋭の同人を募集しています。本会に加入して自作の詩や小説を投稿できる方なら、老若男女、地域、経験の有無を問いません。初心者で希望される方には、メール等を用いて懇切丁寧にアドバイスも致します。

お気軽にご連絡ください（ホームページ下段のメールアドレスからアクセスしてください）

『印旛文学の会』会員と連絡先

いんば 華子（はなこ） 印西市
bulldog_dolla_mon@hotmail.com

香取（かとり） 淳（じゅん） 印西市
katorijun27@gmail.com

唐瀬（からせ） 光（こう） 船橋市
effect_fact_mouth_karase@yahoo.co.jp

中川（なかがわ） とら 印西市
nakagawatora1@gmail.com

畑中（はたなか） 康郎（やすろう） 印西市
ktakasug@am.em-net.ne.jp

土方（ひじかた） 杳（よう） 市原市
nykkmgs@moon.email.ne.jp

堀川（ほりかわ） ひろし 常滑市（愛知県）
qqsn7969n@utopia.ocn.ne.jp

高橋（たかはし） より（イラスト） 印西市
junko328p@softbank.ne.jp

そばにいるよ

土方　杏

室町小学校は、市山市の中心にある大畠駅からまっすぐ伸びた神社通りの先にある大畠神社の登り口にあった。室町小学校の裏手からは高台となっているために大畠駅から神社の方は山に囲まれた盆地のように見えるのだ。

だから、室町小に通う生徒は、駅から離れた高台に住む大畠集落と駅に近い平地の室町団地に暮らしている。省吾の家は小学校の前にある室町公園が見える場所にあった。

彼は休み時間に、二階の窓際の席から校庭を眺めるのが好きだ。校庭にある大きな銀杏の木と心の中でいつも話をしていた。

七日前も同じように校庭の銀杏の木に、相談したいことがあった。それは、尚志と言う男に学校帰りに声を掛けられたことをお父さんとお母さんにいうべきかどうかだった。

ところが銀杏の木のそばには、見慣れない二人が立っていたので、彼はびっくりしていた。二人のうち、一人は小学生らしい少女で、もう一人は暑そうに長袖の黒っぽいTシャツを着ている女の人のようだ。二人の顔は省吾には、遠すぎてよく見えない。彼が少女達をもっと見ようとすると、突然少女がガラスの階段を駆け上がってくるように二階の窓際にいる自分の前に近づいた。少女は、透き通るような白い肌

とすべてを見透かす黒い瞳をしていた。服装は光に反射して眩しくてよく見えないのに、顔だけがはっきり見えたので思わず、声を出してしまった。デブの孝ことデブタカが、

「省吾、どうしたの？」

「いや、別に……きれいな蝶蝶がいたと勘違いしただけだよ」

「蝶蝶、省吾が蝶蝶だって」というデブタカのからかっている様子に彼は真面目な話をする気を失った。さらに、唐突に彼の頭の中に誰かが話し掛けてきた。

「私は十六夜と書いていざよいという名前なの、あなたの名前は、省吾でしょ、いつも銀杏の木にいろいろなことをしゃべっているよね。今度は私に相談してみない」

彼が驚いて見回していると、

「私は神様の使いだから、あなたの名前も知っているの」

十六夜はウィンクして、もと居た銀杏の木の所にいた。女の人が去ると、彼女は身体が高く舞い上がりそのまま消えた。翌日も、同じ時刻に同じ場所で、二人はやってきて話し込んでいた。十六夜は、彼にもう近寄ってくることはなかったが、昨日と同じように消えた。

その翌日には、二人は現れなかった。省吾は何故かがっかりしていた。彼は、自分が何故がっかりしているのかわからなかった。銀杏の木に訊いてみた。

――十六夜は、あの女の人と何を話しているんだろう？ 神様の使いってどういうことかな？ 僕の悩みも十六夜なら解決できるのかな？

十六夜のほっそりとした姿は、同じクラスの子にはない雰囲気を醸し出していて、省吾は胸がドキドキして顔も赤くなっていた。だから、普段はデブタカに打ち明けることなのに、彼女のことは秘密にしていた。

次の日は、十六夜たちは同じように何かを話して別れていった。それっきり二人は、銀杏の木の下には来なかった。

その二日後、省吾は十六夜と会っていた女の人を初めて間近に見た。それは、アジサイが咲き誇っていた日の午後のことだった。いつものように、省吾がデブタカを待っていると突然激しい雨が降ってきた。公園にいた子供たちの大半は家に向かって走って帰って行った。だから、公園の前にあるつぶれたスーパーの軒下に雨宿りをしている子供は数人だった。彼は、デブタカが早く来ないことにいらついて公園ばかりを見つめていた。

雨が、どんどん激しくなり、ザアーザアーという音を立てていた。公園の遊具は、霞んでわずかに見えるだけで、奥にある公園の中の小

さな山も見えない。それで十六夜が近くにいることに気付かず、省吾はびっくりした。

不可思議なことに、彼女は雨の降る中に優雅に浮いていた。そこだけ雨が降っていないように見えた。

空が少し明るくなったので、雨は間もなく止むだろうという大人たちの大声が上から聞こえてくる。その言葉通り、黒い雲は去っていった。すっかり雨が上がると、省吾は公園に急いで戻った。十六夜は既にいなくなっていた。彼女がいたところから公園の小山までは全体に見通せるし、雨が小降りになった時も十六夜はいたはずなのに、いつの間にか消えてしまった。彼女はやはり神の使いだから不思議な力があるかも知れないと彼は信じた。

やっとやってきたデブタカは、動きが遅いせいか傘をさして来たのに肩のあたりはずぶ濡れになっている。彼は公園の小山の後ろの方からやって来たので彼女の姿を見たかも知れないと思い、省吾は緊張して聞いた。

「孝、雨の中、誰かとすれ違わなかった？」

「省吾、さっきあんなに雨が降っていたのに歩いている人なんているわけないじゃん！」

とデブタカは、じゃんのところを強めに言って自分の正しさを強調した。

「ふーんそうか」

と省吾の眉間がぴくぴくした。確かに省吾は、十六夜を見たのだから……。

おまけにデブタカは、自分が遅れてきたくせに、「早く、コンビニ行こうよ」などと言うので省吾は怒っていた。デブタカの方を見ようともしない。省吾がそうなると、デブタカは彼の機嫌を直そうと必死になった。

「遅れて来てごめんよ。出掛けに母ちゃんに見つかって勉強しろって説教されてさ……」

手を合わせ、拝むような仕草をして彼の方にすり寄ってきた。それでも、省吾が動かないと「誰かってどんな奴なの？」と猫なで声で質問してくる。

「僕達と同じ年くらいの女の子が、さっき雨のなか公園に立っていたんだ。変だろ？」

デブタカの瞳は大きく開かれ、一瞬何かを言おうとして言葉を飲み込んだが、我慢できずに目をつぶって、

「省吾、マジで言ってるの、さっきはすごい雨だよ」

さらに公園の地面を指すと、
「こんなにぬかるむほど雨が降ったのに女の子が立っているわけないよ。どんなドッキリを僕に仕掛けるの？」
と余計なことを聞いてきた。彼は仕方なくデブタカの右腕を取ると、
「コンビニいこう！」と言って、腕をつかんだまま歩き出した。
省吾が公園を出た時、何気なく振り返ったら、十六夜が先ほど自分たちがいた場所に立っている。びっくりした彼は、やはり彼女は何か力を持っていると確信した。
省吾は早く公園に戻って、もう一度十六夜のことを確かめたかったので、急いでコンビニでお菓子を選んだ。デブタカと話がかみ合わないまま公園に戻ると、デブタカのおっかさんが待っていた。
おっかさんは、息子を見つけると、
「宿題終わっていないでしょ、孝」
と大声で言うとデブタカの大きな右耳をぐいとつかみ、嫌がる息子を連れて行った。
「省吾君、ごめんね」という言葉を残して。
雨は止んでいた、公園にはもう子供はいなくなっている。女子高校生達が近くの稲荷高校の制服姿のまま公園のベンチに座って話し込んでいた。省吾は、一人に見覚えがあった。銀杏の木の下にいた女の人だった。近くで見る彼女は、制服がぶかぶかで痩せているという限度を超えていた。大きなマスクで口元を隠しているせいか何を話しているのか聞き取れない。もう一人のまんまるい子が、ナツキちゃんと呼んでいた。彼女はナツキという名前のようだ。銀杏の木の下にいた子と再会すると思っていなかったので、彼は動揺していた。ナツキの声はよく聞き取れないけれど、まんまるい子は、必死に聞き取ろうとしているようだ。一度だけ、ナツキがまりちゃんと呼んでいるのが聞こえた。まんまるい子はまりという名前のようだ。
まりは、部活バックの中からシュークリームを出して、
「ナツキ、シュークリーム好きだよね」
と勧めたが、ナツキは受け取らなかった。まりがそっと、彼女の手のひらにシュークリームを載せた。
「ナツキちゃんのつらい気持ちに気付かなくてごめんね」
と言うと、省吾には、ぼそぼそしゃべっていて聞き取れなかったが、ナツキはうなずきながら泣いていた。彼は、顔を背けて聞いていないふりをした。高校生が座っているのは真ん中のベンチなので、彼は右端のベンチ座ることにした。ベンチは、二人掛けになっていて三つ並んでいる。室町公園は盆踊り大会の会場になる大きな公園なので、芝生の広場の部分と遊具のある部分に分かれていて、芝生広場にベンチ

があった。ベンチからは公園の小山が見えた。小山は小学校からの視線を遮っていた。

二人の話はどんどん深刻になり、最初は、省吾のことを気にしていたまりが、余裕がなくなり、彼のことを気にしなくなった。だが、ナツキは彼が気になるのか、まりにも背を向けて左手のベンチの方を向き、「まりちゃん私はもう部活には戻りたくないの、だから会いに来ないで下さい」と言った。まりは、はっきりとした口調で、「ナツキちゃん、私たちは部活仲間じゃなくて友達だよ、ナツキちゃんが部活辞めても仲良くしたいんだよ。ナツキちゃんいいでしょ」

彼女はまりの言葉にうつむいて肩を震わせていた。二人は声を出して泣いていたらしい。やがて気持ちがすっきりしたのか、二人は立ち上がり帰るところだった。

「ナツキちゃん、今日は私の話を聞いてくれてありがとう」

と言うとまりはナツキの手を握り締めた。

「それから、ナツキちゃん、制服で会いに来てくれたということは学校に来る決心をしてくれたんだね。私はうれしい。学校で会おうね」

まりは、もう一度ナツキの手を握った。彼女はもう泣いていなかった。顔色も良くなって来ていた。ふと気付くと左手のベンチに、いつの間にか十六夜が座っていた。まりは、彼女に気付いていなかったが、ナツキは十六夜を見てびっくりしていた。ナツキは、よろよろと立ち上がり、まりにもたれかかるようにして、ちょこんと彼女に頭をさげて去って行った。ベンチをはさんで彼と十六夜は向き合った。

彼女は、先程女子高生の座ったベンチに移動すると、やわらかな声で、

「こんにちは省吾君、私の事が省吾気になるみたいね」と言った。

「省吾君は、家族に言えない悩みを抱えている。さっきのナツキちゃんのようにね」と言うとさらに、彼の隣に座った。

「私は、今日ナツキちゃんに問題を解決するためにこの公園に来るように誘ったの。省吾君も銀杏の木の下にいる私たちを何度も見たでしょう。ナツキちゃんはいじめに遭って拒食症になったの、生きていることも辛い状況だったの。まりちゃんと会えば、ナツキちゃんは救われるって、私にはわかっていたんだけど、なかなかナツキちゃんがまりちゃんに会おうとしなかったの。苦労したわ」

彼には大きな悩みがあったが、こんな変な奴に打ち明けることが怖かった。彼が黙ると、

「省吾君を助けることができるのは私だけ。省吾君が答えないなら、私が省吾君の問題をしゃべりましょうか？」

と言い出して、くすくす笑った。彼は胸の奥につかえていることを誰かに打ち明けたかったけれど出来なかった。近くに来た十六夜に彼は、思わず身を引いた。

「……僕の話を聞いてくれるの？」とものすごく大きな声が出た。

「びっくりした。もう少し小さな声で話してちょうだい。省吾君耳が聞こえなくなるかと思った」

省吾は三度うなずいて下を向き、

「僕の悩みを聞いてくれるの？」と聞こえるかどうかの声で言った。

「はい、大丈夫よ。まかせて」とさらりと答えた。

自信たっぷりな態度に彼はもう迷わなかった。

大きく息を吸い込んで省吾は十六夜に、

「僕のお父さんは、尚志って名前なんだって、一週間前に僕を訪ねて来た人がいたんだ。でも、僕には育ててくれる親が別にいて、僕は尚志さんに会いたくなかったんだ」

十六夜は省吾の肩に手を置いてくれた。彼は、一瞬ビクッとしたが、話は続けた。

「今、僕を育ててくれているのは、尚志さんのお兄さんで勇次と言う名前なんだ。お兄さんの奥さんは、小百合と言う名前なんだ。普通は、おじさんおばさんと言うらしいけど、僕はお父さんとお母さんって呼んでいるよ。今でも僕のお父さんは勇次父さんだし、お母さんは、小百合母さんなんだ」

「今のお父さん達のことが好きなの？」

「う、うん。僕が小一の時に養子だよとお父さんが話してくれた時に、尚志は、借金取りから逃げていて、本当のお母さんは病気で死んだんだって、お父さんとお母さんは省吾のことを大好きだから僕を養子にしたんだよって、正直に教えてくれた」

「仲がいいんだね」

省吾は自分でも意識せずに、にっこり笑った。

「もちろん、お父さんは僕の話をよく聞いていろんなことを教えてくれるし、お母さんは、おいしい料理を作ってくれるしお手伝いをすると喜んでくれるよ。だから、僕を捨てた尚志って人が僕を迎えに来たと言ってもうれしくない。それに、尚志さんは悪い人の顔してた」

彼はいつもの緊張している感じではなく子供らしい表情で話を続けた。

「悪い人の顔って？　何？」

「ドラマで必ず最後にやっつけられる悪い人と同じ顔をしてた」

十六夜は、「なかなかいい目をしているよ」と頷きながら言うと、

「ドラマの中の悪い人ってわかりやすい。尚志さんはそれで何が省吾君にそんな感じを持たせたんだと思う？」
「周りをすごく気にしていたから。お父さんとお母さんに黙って明後日までに、荷造りをしておけって言うんだ。僕は、お父さん達に黙って出ていけないよって言ったら、お前のお父さんは俺だって言ったんだよ。その時にすごくこわい顔で僕を睨んでいた。お父さんは僕を叱るとき怖い顔するけど、全然違うんだ。僕は尚志さんのことを何も覚えていないし、会いたいと思ったことはないよ」
　彼女は急に、怖い顔をした。省吾は、十六夜は子供のように見えるけど、子供ではないことに気づいた。
「省吾君、ひとつだけいい方法があるよ。危険だし、お父さんやお母さんに心配を掛けることになる。けれど、省吾君が私の言ったことを実行すればずっとお父さん達と暮らせるし、二度と尚志さんが訪ねてこない。どうする？」
「やるよ、僕、お父さんもお母さんも大好きだから、がんばる」
「じゃあ、これから計画を話すよ」
「うん」
「まずは、尚志さんが連絡をしてきたら、言う通りにするふりをして、待ち合わせ場所を聞き出すの」
　省吾はびっくりして不安になった。彼女は尚志さんの仲間ではと疑った。十六夜は、省吾の表情に敏感に反応して、
「大丈夫よ、場所を聞き出したら、本当に行く必要はないから。そして、聞き出した場所を自分の部屋のドアの内側の目立つ位置に貼っておいてね。いい？」
　よくはわからないけれど彼はうなずいた。
「明後日の十五日の日にお母さんとわざと喧嘩をして、荷物を持ったまま出掛けるの」
「何で？」
「お母さんがあなたを探す様に仕向けるの。でも、お母さん一人で行かせるのは危険だから、お父さんと待ち合わせるようにするために、お父さんには十五日にあなたが待ち合わせ場所を電話してね。絶対に忘れないで。誰も危険な目にあわせないために必要なことなの。それからあなたは、室町公園に隠れているのよ。どんな事があっても本当のお父さんには見つかっちゃだめ。もし、待ち合わせ場所が室町公園だったら、大畠神社に隠れて、わかった」
　十六夜は、彼の肩をなでた。彼は、うなずいた。
「僕が君の言う通りにしたらどうなるの？」
「おそらく尚志さんは、ひどい目に遭うわ、自業自得ね」

「自業自得？」
「自分でした悪い事が自分に返ってくるってこと。気にしないの」
「もし、僕が家に隠れていたら、尚志さんはどうするの？」
「省吾君をさらって……、お父さんたちからお金を出させると思う」
「ひどい」
　彼はうつむいて十六夜の言う事を心の中で繰り返した。彼はゆっくり顔を上げると大きくうなずいて、
「それからどうすればいい？」
「とにかく荷物をまとめて持って出るふりをして、お母さんには尚志さんと暮らすと言って。お母さんが必死で探す様に仕向けるの」
「とても大変なことだね」
「そうよ、大変。普通の子供にはやり遂げることは出来ない。けど、あなたは出来るから安心してね」
　十六夜が大きく頷いてそう言うと、彼にも自信が湧いてきた。彼女は、そこまで言うと、十六夜は景色に溶けるように消えていった。
　翌日の夕方、家でテレビを見ていたら、家の電話が鳴った。お母さんはいなかったので省吾は大きく何度も深呼吸をすると、受話器を取って、
「もしもし」
と言うと少しかぶせるように
「大塚さんのお宅ですか？」
と緊張した尚志の声がした。
「はい、どなたですか？」
「お前省吾だろ？　お父さんだよ」
「お父さん？」
「そうだよ、お前の父親、尚志だよ。準備は出来たか？」
「うん」
「そうか、じゃあメモしてくれ」
「うん……。ちょっと待ってて」
　彼は、メモを準備した。
「準備したよ」
「そうか、じゃあ書いてくれ。駅前の公園に明日十五日の一九時に来てくれ」
「駅前の公園？」
「駅前の郵便局から裏道に入ったところにある公園だ」
「僕、わからないよ」
「来ればわかるさ」
「公園の名前は何ていうの？」

「知らないよ、来たらわかるさ」
「……わかりました、公園の名前は僕が調べます」
「そうか、省吾賢いんだな」
電話の声が、イライラしているようだった。電話を切ると、急いで彼は自分の部屋に戻り、パソコンを立ち上げて公園の名前を調べた。公園の名前は、大畠駅前第一公園となっていた。省吾は十六夜に言われたように、Ａ４の紙に大きく大畠駅前第一公園、十九時と書いた。準備完了だ。たったひとりで大人に立ち向かうと思うと、彼は不安で心がざわざわした。
翌日学校では、省吾は終日ボーッとしていて三回も先生に注意をされてしまった。デブタカが心配そうに自分を見ているのを感じたが、何も話さなかった。学校帰りにデブタカに、
「省吾、一緒に帰ろうよ。いつものところに行こうよ」
と誘われたけれど、
「だめだよ。今日はお使い頼まれているから」
と断った。それ以上呼び止められたくなかったので、デブタカが追い付けないように彼は走って帰った。
省吾が家に帰ると、玄関の横にあるお母さんの自転車がなかった、出かけているようだ。彼はランドセルを部屋に入れると財布と鍵を持ってバタバタ出掛けた。駅前に向かう道もわざと遠回りして、お母さんに会わないようにして、お店でボストンバックを買った。それから彼は、自転車を飛ばして家に帰った。まだ、玄関の前にはお母さんの自転車がなかった。玄関を開け、階段を駆け上がり自分の部屋のドアを開けると、急いで鍵を掛けた。あまり急ぎすぎて、部屋の鍵を壊しそうになった。バックをベッドの上に投げ出して、何を入れるべきか考えた。本当に家出をする気などさらさらないから何を入れたらいいのか悩んでいると、玄関が開く音がした。
「省吾　帰っているの？」
お母さんの声だ。省吾はバックを急いでベッドの下に隠してから、
「そうだよ」と答えた。
「おやつ買ったから、降りて来て」
「はい」
省吾はカバンがベッドの下からはみ出していないか確認してから、ドアをきっちり閉めて自分の部屋から出た。ゆっくり階段を下りた。
省吾は、階段わきのリビングの扉を開けて、リビング奥のキッチンにいるお母さんとは目を合わさないように注意して、おやつを見ながら、
「ただいま」

とわざと言い、テーブルの上のおやつをつかむとキッチンを出た。
「おかえり、省吾　下で食べていかないの？」
疑問符だらけのお母さんを残して、彼はリビングを出ると、バスルームに回りバスタオルとタオルとおやつを抱えて部屋に戻った。そのまま内側から鍵を掛け、仕舞っていたバッグを引き出し、持ってきたバスタオルとタオルをバッグに突っ込みチャックを閉めた。そして今度は、バッグを机の下の奥に突っ込んだ。
その日の夕食には、お父さんも帰って来た。明日がいよいよ実行の日だと思うと、省吾は食欲が湧かなかったけど、無理していつもどおりご飯をおかわりした。お父さんとお母さんと別れたくない一心で、十六夜と約束したけれど、彼は気持ちが揺れていた。食事が終ると、いつも観ていた番組があるのに、
「ごちそうさま、宿題が終わっていないから部屋に行くね」
と言うと、階段を駆け上がった。お父さんが、
「省吾の奴、今日は変だな」という声が聞こえた。彼は、部屋の鍵を掛けると、ため息と涙が出た。
省吾は、運命の十五日の朝は目覚まし時計より先に目が覚めてしまった。朝の支度をしながら、彼は悩んでいた。お母さんと喧嘩したことなどないのだ。けれど、十六夜の言われたように喧嘩して家を飛び出さないと、絶対に大変なことになることはわかっている。それがむずかしいのだ。お母さんは、穏やかな性格で、声を荒げて怒ったり、干渉してきたりしない性格なので、なにをきっかけにすればケンカできるのか、何も思い浮かばないのだ。
朝食を食べる時もいつもより無口になり、玄関まで見送ってくれるお母さんの、
「いってらっしゃい」
の声にも、
「…いってきます」
と小さな声で答えただけで、出掛けてしまった。
省吾が学校に着くと、デブタカがいつも通りににじり寄って来て、
「昨日は、何であんなに早く帰ったんだよ？　約束してただろう」
と言って来た。デブタカとの約束なんて、彼のひっ迫した状況では、何も思い出せない。仕方なく、
「僕が、孝と約束したっけ？」
と答えると、彼は突然機嫌が悪くなった。
「ひどいよ。下敷きを一緒に買いに行こうって約束忘れたの？　今日は行けるよね？」

お母さんは彼が駅の反対側に行くのだけは許可が必要だった。そうだ、これだ。と思いついた。
「わかった孝。羽田文具に買いに行こう」
「えっ、羽田文具って駅の反対側だよ。行ったら省吾、お母さんに怒られるんじゃない？　いいの？」
「いいんだ、黙っていればわからないよ」
デブタカは、もう聞き返しはしなかったけれど、
「じゃあ、家帰ったら室町公園で待ち合わせしよう」
と言って自分の席に着いてからも彼の背中をじっと見ていた。休み時間の度に、デブタカが同じことを聞いてきたが、彼は意見を変えなかった。
帰りの挨拶がすむと、省吾は学校を飛び出して家に向かった。……家に帰ると、お母さんの「お帰り、省吾」という声に答えそうになるのをこらえて、大きな音を立てて二階の自分の部屋に上がるとランドセルを置き、財布を持って家を出た。彼が自転車に乗って出掛けようとしたら、お母さんが飛び出して来た。
「省吾どうしたの？　ただいまも云わずにお出かけする何て、どうかしたの？」
「別に、急いでるんだ。友達と約束したから」
「省吾どこに行くの？」
「羽田文具だよ」
というと自転車を漕ぎ出した。彼は背中でお母さんの気配を感じたが、知らぬ振りをした。
室町公園に着くと、めずらしくデブタカが来ていた。彼を見つけると、走り寄って来た。
「省吾、遅いじゃん」と得意げに言って来た。
いつも自分が言われていることが言ってみたかったのだろう。彼が相手にせずに、公園を出ようとしたら慌てて付いてきた。羽田文具に行く前に、大畠駅前第一公園の場所を確認したかったが、彼に不審に思われても困るから、彼は帰りにデブタカを撒くことにした。
省吾は羽田文具での買い物が終ると、彼を先に行かせて、後から付いて行く振りをして、郵便局のところの脇道で曲がった。デブタカは気付かずにどんどん走って行った。彼は、脇道に入ると、公園を探した。大きなアパートが二、三軒あり公園らしい空地は見えない。道をどんどん進むと、急に室町公園の半分くらいの公園があった。ブランコや鉄棒もなく、小さな祠の上に大きな一本の木が覆いかぶさるように生えていることくらいで、滑り台とベンチが一つある誰も遊んでいない寂しい公園だった。

――この公園じゃ、隠れるところないな。
と省吾は考えた。元の道に引き返し、郵便局のところから室町公園に向かうと途中で、彼が待っていてくれた。
「省吾、何でついて来てくれなかったんだよ」
「買い忘れた物があって途中で引き返したんだ。ごめん」
「そうなんだ」
デブタカは、それ以上彼を責めなかった。
省吾が、家に帰ると、お母さんはリビングにいなかった。玄関で、小さな声で、
「ただいま」
と言っても誰も返事がない。彼は二階の自分部屋に戻ると、ドアの内側に貼っていた紙が見当たらないことに気づいた。あわてて階段を駆け下りてキッチンに行くと、お母さんは、夕食の材料も投げ出して出掛けた様子だった。
――どうしよう。
お母さんにばれちゃった。とにかく家を出よう。省吾は焦った。ボストンバックを部屋に取りに戻って、台所にあった果物とお菓子をバックに詰め込み携帯を持って家を出た。自転車は倉庫の裏に隠して自分が帰ってきたことが分からないようにした。けれど、約束の時間まで二時間以上もある。時間をつぶそうにもコンビニでも目立ってしまうだろう。取りあえず夕食を食べることにした。考ええがまとまらないまま、スーパーで夕食代りにラーメンを食べると、心細くなって涙が出そうになった。時計を見ると十七時四十分。飲み物を買うと、親子連れにくっついてスーパーを出た。
室町公園まで急いで行こうとした時同じクラスの子を見かけて咄嗟に隠れた。室町公園まで戻るうちに、また学校の友達や知り合いの誰かに出会うかもしれない。彼は迷った末に駅の近くの森岡小学校に隠れることにした。携帯の時刻は、十八時十五分になっていた。心配するお母さんの顔が浮かんだ。お父さんの携帯に電話を掛けた。呼び出し音が二回鳴ったところで、お父さんの緊張した声がした。
「もしもし省吾か、どうしたんだ」
「お父さん、今どこにいるの？」
「大畠駅前第一公園だ」
「お父さん、お母さんと一緒？」
「ああ、一緒だ」
「よかった」
「どういうことだ」

「あのね、尚志さんがその公園に現れるから、僕のことは諦めるように説得して」
「尚志が、お前を迎えにきたのか」
「うん、だけど僕はお父さんやお母さんと暮らしたい。尚志さんはわかってくれそうにないから、尚志さんと一緒に家出をしたふりをしたの。ごめんなさい」
お父さんの声が急にうれしそうに、
「そうか、そうか、省吾はお父さん達と暮らしたいんだな」
「そうだよ、僕は尚志さんとは、絶対暮らしたくないんだ」
「わかった。尚志には、私から説得しよう」
「お父さん、気をつけて借金取りの人も一緒かも知れないから、警察を呼んだ方がいいかもしれないよ」
「お前はそんな心配しなくていいから、家に帰っていなさい」
「駄目だよ、尚志さんの仲間が家に来るかも知れないから、僕はお父さんからの連絡を待っているから」
「わかった」
お父さんは電話を切った。
お父さんは、お母さんに省吾が家出をしたのではないことを言うと、お母さんは、ほっとしていた。お父さん達は、公園には隠れる場所がないので、少し離れたアパートの入口の植え込みの陰に隠れて尚志を待った。その時、尚志がガラの悪い男二人と公園に現れた。省吾の姿が見えないと尚志と男たちは揉めているようだった。男たち二人が大声で怒鳴っていた。お父さんは、弟の尚志を助けようかと思ったが、二人の男が、
「子供を人質にお前の兄さん達から金をふんだくるってのは、全然うまくいってないじゃないか」
と怒っているのを聞いて、即警察に電話した。警察にも事情を話すと、騒ぎが大きくなった頃に大勢の警官が現れて尚志たち三人を連れて行ってくれた。一方、お父さんの電話を切ってから、省吾はお父さん達の様子がわからないので、不安になって校庭をうろうろしていた。すると、突然闇の中から十六夜が現れた。彼は彼女と分からずに声を上げそうになって自分で口を押さえた。
「私よ」
の声に聞きおぼえがあったので、
「十六夜なの？」
「うん、そう」
「よかった、独りぼっちで心細くて、お父さん達は今どうなっているの？」

「一緒に見てみる？」
「え、見られるの？　見たい」
「わかった。待っててね」
と言うと彼女は、大きなハンカチを広げて夜空に投げた。夜空に大きく広がったハンカチは映画のようなものが映し出された。彼が見ていると、突然画面にお父さんとお母さんが出て来て公園のそばの植え込み隠れていた。十六夜が指を鳴らすと今度は、カメラのアングルが変わるように、尚志と悪い二人組が、大勢の警察官に取り囲まれて捕まる様子が映し出された。
「映画みたいだね」
と彼がつぶやくと、
「これは現実なの。公園にある祠を覗いているのよ」
と言うと、彼は十六夜に背中を押された。
あっと声を上げる間もなく彼は祠の中にいた。もちろん人が入れるほど大きな祠ではないけれど、彼は、「省吾に電話するよ」と言うお父さんの声をはっきり聞いた。
彼の携帯が鳴ると、元いた学校に省吾は戻っていた。彼もすぐに電話に出た。
「省吾、もう家に帰っても大丈夫だ。迎えに行くからどこにいるのか、教えてくれ」
「駅の近くの森岡小学校にいるよ。校門の陰に隠れているから迎えに来て」
電話が切れると、背後に気配を感じて彼が振り返ると彼女が言った。
「私の役目は終わったの。これからは、省吾君に会うことはないわ。でも、あなたには見えなくても私は、ずっとそばにいるよ」
彼が、「ありがとう」と言うと、十六夜は闇の中に消えていった。
〈完〉

初初（ういうい）しい季節

― 秋の抄 ―

中川　とら

朝、母が仕事に行く前に、

「雨模様だから、必ず傘をもっていきなさい。」

と言った。なのにいつものごとく家を出る時には、すっかり忘れていた。

案の定、給食が終わった頃から雨は降り出し、やがてほん降りになった。六時間目が終わると、傘を持ったお母さん達があわただしく出入りして、にわかに昇降口はごったがえしている。

授業が終わり、図書室で借りた本を抱え人垣をかきわけ、私は校庭に飛び出した。雨は、容赦なく降りかかってくる。後ろから、

「朝子ちゃーん　入ってくー」

桃ちゃんの声がした。

「いーっ　急ぐからー」

泥水のはねを思い切り上げながら、「自業自得」と言う母の言葉を思い出しながら走った。

雨の日、庭に面した硝子戸をいっぱいに開け、仰向けになって本を読むのが好きだった。短調な雨音は生活の音を消してゆく。腕が痛くなると、腹這いになり、しっとり濡れた庭を眺め又本を読む。正面に枝ぶりのしっかりした柿の木があって、葉隠れに少し色づき始めた柿

の実を、捜して数えたりもした。そうして、庭がうす墨色になりはじめ、いよいよページの字が見えにくくなってきた頃、私は母に言いつけられた用事を思いだし、あわてて現実にもどる。

三十坪ほどの庭なのに、様々な木や花が所狭しと繁っていた。戦後、父があちこちで買ったり戴いたりし植え付けたものが、増え続けたのだ。とりたてて手入れをしないものだから、陽を捜して枝は伸び放題になっていく。

松、紅葉、黄楊、南天、八つ手、椿、紫陽花、草木瓜、見栄えのよいものも多かったが、父は特に実のなる木が好きで、桃、柿、石榴、枇杷、無花果、ぐみ、がそれぞれの季節にそれぞれの色の花を咲かせ、実をつけた。

野鳥が糞を落として、根付いたものもあったらしい。名も知らぬ野草は、木々の根本や、庭の隅に上手に居場所を見つけ趣をもっておさまっていた。おのずと虫も多く、春はあぶら虫、夏は毛虫に悩まされ、虫の嫌いな母は夏の収穫が終わり秋になると、桃の木を切ってほしいと父にせがんだ。

私はこの庭が好きで、唯一、庭掃除だけを進んでした。芽吹きの時もいいが、秋は又格別で、夏の間の病葉や散り始めた葉を掃き集めながら聞く音は、何とも気持ちがいい。きれいになっていく土の新しい湿った色も、私の脳裏に焼き付いてはなれない。

茅蜩が聞こえなくなり、赤とんぼがスイスイと飛びかい、物干しにやんまが止まる。希に、黒揚羽が迷い込んで来たが、美しく大きな羽をゆっくり動かして舞う姿は、ひときわ神秘的で、見つけた時は（どうか　行かないで　そのままここに居て）と思わず祈った。

父の自慢の紅葉は、三本に枝分かれした木姿の上品なものだった。紅葉するとそれはそれは美しく、道行く人が垣根越しに、よく眺めていたのを思いだす。

雨が降ると、パラパラとやさしく葉をたたく音がし、風が吹くと、カサカサ、サワサワと葉ずれの音が聞こえる。どんな天候にも庭は反応して、味わいのある音を奏で、その時その時の景色を見せてくれた。

家のすぐ傍に中川が流れ、周辺に大きな製紙工場やゴム工場、インク工場があった。父は、近くのゴム工場に自転車で通い働いていた。仕事は大抵定時で終わり、いつも日の暮れかかる頃に帰って来た。それから私がするのと同じように、縁側の硝子戸をいっぱいに開け、煙草に火を付け一服し、その日の新聞を読むのが日課だった。

昭和三十六年は確か、四十三歳の若いケネディがアメリカ大統領に就任した年だ。その前は、六十年安保があった。日米安全保障条約の

採決で、国会周辺はデモする人々で騒然としていた。警官隊と全学連が衝突し、東大生の樺美智子さんが亡くなった。岸首相が暴漢に刺され、浅沼社会党委員長が右翼少年に刺殺された。新しい首相に池田勇人氏が就任し、政府は所得倍増、高度経済成長政策を発表した。繁栄と混沌の時代の始まりの頃だ。都内は、東京オリンピックに向け急スピードで道路が整備され始め、カラーテレビの放送も開始されたけれど、幸か不幸か我が家には白黒テレビもなかった。長閑な野面の下町も、田ん圃が減り宅地がボツボツ増えてきたけれど、畑はまだたっぷりあり、雨の日にぐちゃぐちゃになる野道が残っていた。

それでも、少しづつ少しづつ生活や自然が変わっていくのを、子供心に感じ、私の中で得も言えぬ何かが寂しさとなって影を落とし初めていた。

父は若い頃から喘息持ちで、本人も望む通り幸いに戦地に行かなかった。戦時中は軍需関係の仕事に付き、生活は恵まれていたらしいが、戦後、職を失い事業を興した。しかしうまくいかず、その後、職を転々とし、借金だけが膨らみ残った。もともと根っからの平和主義者というか、争いの嫌いな人で、大きな声で母や私達子供を叱ったり、ましてや手を上げた事など一度もない。

「まあ　まあ」とか「そろ　そろ」とか「仲良く」とか「そのうち」とかが口癖で、究極は、「生命さえ　忘れて来なければいいんだよ」だった。

決して楽ではない生活を、十歳近く年下で共に担った母は、そう言う父が不満でよく癇癪をおこした。

「そのうちそのうちと言う人に限って、その日が来たためしはないでしょう。」

「今日できない人間が、どうして明日できるという確証がありますか。」

「そうやって、伸ばし伸ばしでこうなったんじゃありませんか。」

立て板に水の如く、まくしたてる。

そうなるときまって父は、「お母さんの言うことは、間違いではない。」

「用足しを、思い出した。」

そそくさと外へ出て行った。が、そうは言っても二人は基本的に仲が良く、支え合っていた。

私は、父の曖昧なところが好きで、楽だった。父に言われると、（今できないけど、必ずやるよ）という気持ちになり、母に言われると、（やるものか。）と思うのだ。

雨が降る日は、不思議とそういう喧噪が沈静されて、きまって本を読みたくなった。

その日も、そうだった。しかし字が見えにくくなって、本を閉じた時、玄関を開ける音がした。

「朝子っ！　いるんでしょっ？」

慌てて玄関に行くと、雨に肩を濡らした母が、両手に重そうな買物袋をさげ、苛立って立っていた。

「どうして、靴を揃えて脱げないの！　いつも言っているでしょう！後から入って来る人の事を考えなさいって！あんた、今日、傘はどうしたの？　お母さんが、あれほど言ったでしょ！　持って行きなさいよって、桃ちゃんのお母さんが、朝子ちゃん、傘もささず走って帰って行ったって言っていたわよ！」

「忘れました……」

「忘れたんじゃなくて、はなから人の話を聞く気がないんでしょ！」

お勝手に買物袋を置くと、説教は更に続いた。

「朝子、あんたは女の子でしょ？　自分の顔を鏡で見たことある？ざんばら髪して、毎日、陽が落ちるまで遊んで、雨の日は傘もささずはね上げて、ひっくり返って本ばかり読んでお母さんが頼んでおいた事は、何ひとつやらない。いつも人が話しかけても、上の空よね！　三文文士じゃあるまいし。お米だって、まだ研いでないでしょ！　来年は中学生でしょ！　いったい親は、どういう育て方をしているかと、お母さんが笑われるんですよ！」

「はい……」

「お母さんが働いているんだから、少しでも手伝おう、助けよう、という気になれないの？」

「……」

顔を上げると、いつの間にか母の後ろに、仕事から帰って来た父が立っていた。そしてその後に、びしょ濡れになった兄がいた。しきりに私に、「謝っちゃえ」と、手で合図をしている。

外はもう、真暗だ。

「窓という窓も開けっぱなし、家の内は湿気るし、だいいち、人が入ってきたらどうするの！」

「ごめんなさい。」

「朝子は、傘を持って行かなかったのか。」

父が、母の隣に来て言った。

兄は硝子戸を閉め、流しで米を研ぎ始めた。

「反省してるんだろう？　もういいから、ご飯の支度を手伝いなさい。」

「……はい。」

私が立ち上がった時、母が再び口を開こうとした。が、父はそれを遮って言った。

「いいか、いつまでもそういう事を続けていると、お前は『夜鷹』と同じだ。」
そして、奥の部屋へ入ってしまった。
ポカンとしている私に母は、声を落として言った。
『『夜鷹』というのは、夜鳴く鳥のこと。昔は、夜になると外に莫蓙を敷いて、男の人を待つ女の人のことを言ったの。」
「……」
「譬えが悪いけど、分かるわね。」
「……」
説教は終わった。
その夜、私はどう晩ご飯を食べたか、覚えていない。床につくと、掛け蒲団をすっぽりかぶって、父や母に分からないように声を殺して泣いた。
今までに感じたことのない悲しみが、つき上げて来て体が熱くなり、涙とよだれで枕はぐしょぐしょになった。
秋の日、庭に降る雨は、時にザーザーと木々を洗い、時にシトシトと草花を濡らした。
お勝手の戸口に人の気配がしたので見ると、可愛いい赤まんまが、二、三本くるくると回っている。
「桃ちゃんでしょう？」
米を研ぐ手を止めて、私は隠れている人に声をかけた。
「ばあー」
「やっぱりネ。」
私達は、顔を見合わせ笑った。桃ちゃんの腕には、黒くて目がパッチリしたダッコちゃん人形が、しがみついている。
「遊べる？　……少しだけ。」
ちょっと遠慮気味に、桃ちゃんが言った。
「うん。これが終わったらね。」
私は水道の蛇口を勢いよく回し、お釜に水を注いだ。『夜鷹』の一件以来、米研ぎは忘れなくなった。
「朝子ちゃん、偉いね。お手伝いして。」
裏口は、藪蚊がいっぱいいる。桃ちゃんは、すねをボリボリかきながら、つくり笑いをしている。お世辞、とおもったので、
「そんな事ないよ。お母さんが働いているから。」
軽くかわし、ちょっと力を入れてお釜を持ち上げた。
「終わった！　行こう！」
急いで玄関へ回り、裏口から庭先へ戻った桃ちゃんと表へ出た。

秋が深まると、日の暮れは早い。空が夕陽で真赤になったら辺りは刻々と暗くなる。私達は急いだ。

「公園ね！」

「うん！」

「今なら　すいてるよ」

「走ろう！」

家を出た右突き当たりが川で、その土手づたいに公園はあった。背の高い楓の木と八重桜が二本、柵伝いにゆずりは、れんぎょう、山吹が植えてあった。広々としているとは言えないが、一通りの遊具が揃っていて、近所の子供達がここで遊んだ。

公園は思った通り、しんとして誰もいない。

「ぶらんこ！」

一目散に走り寄り、土手に向かって腰をおろし目いっぱい後ろに下がった。

夕日が、中川の向こうに沈みかかって眩しい。少し冷たくなってきた秋の風を体いっぱいに受け、思い切りぶらんこをこぐ。ぶらんこは風を切る時、川のにおいがし、後ろに下がる時、ほんのり自分のにおいがした。そうして揺れる度、古くなったそれは、キーイ、キーイと錆び付いて物悲しい音をたてる。

立ち上がると、土手の下に夕日を受けた川面がある。川べりの葦原はかすかに風に揺れ、芒の穂が銀色に光っている。茜色の空がおいでおいでをしているようで、このまま吸い込まれて行ってしまいたくなる。

風を感じて揺れる心地よさに、私達は時々鉄の吊りをしっかり握り、からだを思い切りそり返してから、だらりと力を抜いた。髪の毛が地面につき、さらさらと砂をはらう。

何て気持ちがいいのだろう。風のにおい、土のにおい、そして空の色。桃ちゃんと私は、夕暮れの刹那を、キーイ、キーイとどこまでも高い秋の空を見ながら、だまって揺れていた。

桃ちゃんとは同い年で、小さい時からよく遊んだ。クラスは別だし特に気が合うという程ではなかったけれど、幼なじみとは不思議なもので、親同志が知り合いという安心感や、子供なりの信頼感があって、仲良しだった。

一人っ子で、家は私の家の斜め裏にあった。庭に建て増しをして仕事場をつくり、おじさんとおばさんがそこでバッグの製造をしていた。近年景気がよく、合成皮を扱うようになってから下請けの注文は増え、毎日忙しく働いていた。

二人共、おしゃべりで元気がよく、心優しい人達だった。おばさん

は子供の頃耳を患い、片方の耳の聞こえが悪く、「えっ？」とか「なに？」とか聞き返しながらいつも大きな声で話す。時々その声が、外まで聞こえてきた。が、久しく聞こえないと母は、「最近声が聞こえないけど、具合でもわるいのかしら。」と心配したりした。

この辺りでは一番にテレビを購入し、「オリンピックの時は、カラーにするよ。」が、おじさんの口癖だ。仕事場には電話もあり、たまに拝借することもあった。広い台所には、真白な新しい冷蔵庫と洗濯機も置いてあった。

私の家とは生活ぶりが大部違っていたが、そういう事は互いの中であまり影響はなかった。

おじさんはよく、「何たってさ、お兄ちゃんも朝子ちゃんも赤ん坊の時から知ってるんだからさ。と得意気に話し、その心は何年たっても変わらないものだった。下町ならではの人情もあり、私達家族は、本当によくお世話になった。おばさんは珍しい物があれば、

「これはとても美味しいからね。」

紙に包んで私の手の中にしっかり握らせ、持たせてくれたり、「お風呂に入って行きな。」「テレビを見においで。」と、よく声をかけてくれた。

洋画が好きで、お気に入りの男優がいるらしく、夜遅く始まる西部劇をかかさず見ていた。私は時々土曜の晩、「お母さんには、おばさんからお願いしてあげるから」というおばさんに甘えて、お邪魔しテレビを見せてもらった。

桃ちゃんはいつも色々なお菓子を持っていた。よく私の前に「ベェー」と舌を出し、「何だと思う？」と聞く。

「チョコレート」「あんず飴」「イチゴベッコウ」「ニッキだ！」

私は、口の中からかすかに臭ってくるにおいと舌の色を見、あてる。たまに、「……うーん、何それ？　分かんない。　変な臭いがするよ。」

すると、彼女は舌の下からそれを取り出し、「そう？」としげしげ眺める。

私はおかしくて、お腹をかかえて笑った。

今と違って昔は、鮮やかな着色をした駄菓子が、やたら多かった。

ある時、彼女は私をじっと見て、

「あのさーあ、朝子ちゃん　あれになった？」と言った。

「あれ？　……あぁ　まだよ。桃ちゃんは？」

「まだ。とし子ちゃんやゆりちゃんはもうなったって！」

「ゆりちゃんは、胸大きいものネ」

「そういう人は早いのかな？」

「分かんないけど、この間、学校で女子だけ呼ばれて話があったでしょう。」
「うん、男の子達ったらさわいじゃって、先生におこられた。ばかみたいだね。」
「ねー」
それ以来、私達は時々真顔で互いの生理の始まりを尋ね合った。そうして、大人になるその日を、甘くさびしく気にしていた。
いつかその日が来たらもう、ぶらんこを二人乗りすることも、土手の桜の木から飛び降りることも、あんずの飴で舌を真赤に染めることも、できなくなるかも知れないと思いながら。
「帰ろう」
どちらからともなく、私達はぶらんこから降りた。中川の向こうに、夕日がしっかりと沈んだ。

農家の高山さん家には、古くて大きな納屋があり、その隅に一頭の年老いた赤茶の牛がつながれていた。昔、農作業に活躍した牛らしいが、耕運機の時代になり出番がなくなった。日中のんびりと日向ぼっこし、たまにおじさんが夕方、農道を歩かせているのを見かける以外、いつも納屋の隣におとなしくじっとしているだけだった。めったに啼く事もないので、最近はみんなに忘れられかけている。
私はこの牛が好きで「長次郎」と名前をつけて、学校の帰り、時々寄り道して見に行くことがあった。特に元気がでない日や、嫌な事があった時は、何故か「長次郎」に会いたくなる。不思議と気が晴れるのだ。
名前の由来は簡単で、近所に「次郎君」という男の子がいた。
「長男なのに、次郎ちゃんなんだよね。」
余所のおばちゃん達は言っていたが、おばさんが息子を呼ぶ時、それはそれは愛しそうに「次郎ちゃん、次郎ちゃん」と声が裏がえる。
それが私の耳について、ある日、牛に向かって「次郎！」と呼びかけてしまった。
でも子どもながらにこれは失礼だと思い、長を付け「長次郎」となった訳だ。
それともう一つ、おばさんはとても立派な腰をしていた。肉付きよく、高い腰はピンと横に張ってまるで体格のいい外国人のミセスのようだった。後ろ姿に出会うと思わず、「似てる！」と思ったからかもしれない。
それにしても、高山さん家の垣根は竿を固く組み、そこに槙の葉が隙間なく茂っていて容易に内を覗けないようになっている。唯一、地

面に近い所が根本のため葉の茂りが少なく、顔半分ぐらいの隙間ができていた。
そこで、ランドセルを降ろし膝をつき、腹ばい寸前に頭を下げて内を覗き込む。それしかない。牛は大概、お尻をこちらに向け立っているか、座っているかだった。
「長次郎　長次郎」少しして又、「長次郎　長次郎」と呼びかける。牛は動かない。やや苦しい姿勢だが、今度は声を低くし、
「モーウ　モーウ」と啼き真似した。それでも、長次郎はうんでもなければふんでもない。暫く眺め、辛くて立ち上がり背伸びして深呼吸してから、もう一度繰り返す。
そのうち「少しでもいいから　私に応えて」という気持ちが込み上げてくる。そこで、思いを入れ語りかけるように、
「モーウ」と私はひと啼きした。
するとどうだろう、長次郎の大きなお尻に垂れ下がった尻尾が、気怠そうに左右に一回大きく振れた。
「分かったよ。もうお帰り。」
私にはそう思える。
「ありがと　長次郎　さようなら」
小さくつぶやいて、ランドセルを背負う。毎回、それだけの事だけれど、回を重ねるうちこの事は、「私だけの大切な秘密」になり、確かに私は長次郎に優しく癒されるのだった。
いつだったか、隣のおばさんに現場を見られた。
「朝子ちゃんでしょう？　まぁまぁ、お尻が丸見えだよ！」
慌ててスカートの裾をひっぱって隠し、照れ笑いで誤魔化した。
たまに家で「モーウ」の練習をしていると母が、
「そんなことをして、もし牛が怒って向かって来たらどうするの！危ない事だからいい加減にしなさいよ。」
「はい」
「全く、何をするのか分からない所があるわよ、朝子ちゃんは。普通あんた位の年でそんな事をする女の子はいないでしょう。」
「本当に、襲って来るかしら？」
「そう思うんだったら　止めなさいよ。」
止める気は、なかった。

その日も私は、長次郎に会って帰ろうと決めていた。何とも憂うつな気分が頭に重くのしかかって、母の嫌う溜め息を何回もつきながら歩いた。
中休み、校庭でなわとびをして教室に戻ろうと上履きを履いた時だ

った。下駄箱の陰から誰かが私の前にすーと来て立った。明るい校庭から薄暗い場所に来て、すぐに誰だか分からなかったけれど、同じクラスの鈴木君だった。

「吉野」

鈴木君は、思い切ったような、期待するような何とも言えない表情をして私を見つめている。突然の事に、何だろうと返事もせずじっと顔を見かえした。

こうして鈴木君と間近に向かい合うのは、本当に久しぶりだ。何か懐かしい感じがした。

鈴木君とは四年生の時いっしょの席になって以来、家は離れていたけれどずっと仲良しだった。彼は勉強が好きで、物知りで、自分が知った新しい知識を、どういう訳か目を輝かせよく私に話してくれた。私は、「ふーん」「そして?」「本当に?」と聞き役専門だったが、その知識の多さに「小学生なのにすごいなー」と感心し、時に感動すらしたものだった。

たまに、私がノートの端に落書きしたり、詩を書いたりするのを見つけると、今度は逆に、

「ふーん、うまいなあ　うまいよ!」

そう言って、喜ばせてくれたりもした。そして私達は意味もなくよく笑った。

そんな風だから、仲が良すぎるとレッテルを貼り冷やかすクラスメートがいたが、鈴木君は、

「仲良しで　悪い?」

むきになって言い返し、その度、

「なぁー」と私に同意を求めた。私は別にどうでもよかった。

六年生になって、金子君が転校してきてから気が付くと、何故か私達はあまり話をしなくなっていたのだ。

「吉野　喧嘩したの?」

「えっ　私?　誰と?」

「……金子と……森と……」

「……?」

「最近、いっしょにいないじゃないか。喧嘩したのかと思って」

「喧嘩してないわよ。」

「そう」

鈴木君は拍子抜けしたような顔をして、だまって階段を上がっていった。私は訳が分からず、鈴木君の元気のない背中を見上げていた。

教室で、鈴木君の様子は変だった。隣の子に背を向け、机を枕に、教科書を持ち上げては落とし、持ち上げては落とし、時々それが床に

落ちると足で引き寄せて拾い上げ、又繰り返す。今までに見た事のない、生気のない寂しそうな鈴木君の姿だ。私は気になって、窓際の自分の席から廊下側の鈴木君を、友達の頭を幾つも避けて捜した。

同じ側の前列には森君と金子君がいる。彼等は輪ゴムを指にからめ、あてっこをして遊んでいる。時々、肩を揺らして笑う金子君の痩せた背中が見えた。

鈴木君は、私が彼等と仲よくするのをいやがっているのだろうか。喧嘩することを期待しているのだろうか。人の心は計りかねる。けれど、分からない気持ちが説明のしようのない感情に変わっていくのを私は感じていた。

学校を出た頃にはそれが重く自分の中に広がって、長次郎に会いたいと思ったのだ。

その日の高山さんの垣根は綺麗に剪定されていて、立った位置から葉の隙き間越しに中を覗くことができた。

ところが、いつもの場所に長次郎はいなかった。納屋の中にいる様子もない。おじさんが連れて歩くことだって最近はあまりないのだから、となると、長次郎はいったいどうしたんだろう。別の場所にいるのかしら。垣根伝いを歩いて覗いたけれど、やっぱり長次郎はない。急に体が重くなって、晴れない心を抱えたまま私は家に帰った。

気になると、どうしてもその人を見つけてしまうものらしい。次の日、下校する校庭で鈴木君の後ろ姿に出会った。ランドセルの蓋のベルトが締まっていないので、パタパタだらし無く音をたてながら私の前を歩いている。後ろに私がいることは気が付いていないのだろう。

私はとなりどうしだった時、終業のホームルームが始まると、机にランドセルを置き、しっかりベルトを締め、最後に机の中を忘れ物がないか覗き込んでいた几帳面な鈴木君を思い出していた。

声をかける気持ちもなくぼんやり歩いていると、男の子が二人鈴木君に駆け寄って来て、両側から耳元にひそひそとうす笑いしながら何か耳打ちし始めた。時々、後ろにいる私を振り返っている。けれど鈴木君は振り返らない。そのうち一人が私に、

「くせー奴」と何回か言った。

私は目を合わせず黙って歩き校門を出た。

そして、この日も長次郎はいなかった。

運動会が近づいた。練習もそろそろ終盤に入り、例年仕上げは六年生のフォークダンスと決まっている。澄んだ空の下、広い校庭でひんやり冷たい秋風に吹かれながら同級生と向かい合い、手と手を取り合

う。恥ずかしかったり、嫌がったりしながらパートナーは順々に代わる。聴き慣れた楽曲に思い思いのステップを踏みながら、二百人の子供達の踊りの行進は進んでいく。にぎやかでほのぼのとしているのにどこか整然と寂し気な空気が漂うのが、何とはなく好きだった。

（こうして私達は大きくなり、これからみんな何処へ向かっていくんだろう……）

高い空を見上げそんなことを思ったりしていると、金子君が私の前に来た。私は少し笑って優しく彼を見た。冷たくカサカサした手をしっかり握ると、長く伸びた爪の先が手の平にあたった。白く粉のふいた細い腕を気持ち大袈裟に振ってステップすると、金子君は恥ずかしそうに下を向く。隣で踊っている良子さんがにこにこしてこちらを見ている。

金子君を見ると何故か優しい気持ちが湧き上がってくる。がんばれと励ましたくなる。自分でも何故そうなるのか分からない。不思議な感情だ。

あっという間にパートナーは替わった。私は金子君の手をそっと離して、丁寧に次の人に送った。

四、五人過ぎて鈴木君が来た。目を伏せてこちらを見ようとしない鈴木君は、繋いだ手を握り返すこともせず、故意にそっぽを向いて次の人に進んでいった。

（私達はもう仲良しになれないんだろうか。あの頃のようにおしゃべりすることも出来なくなってしまうんだろうか）

そう思うと悲しくもあったけれど、こんな態度をとる鈴木君にどこかで腹も立った。

森君の踊りは、乱暴で下手糞だ。あんなに運動がよく出来るのに音楽音痴のリズム感無しは、調子っぱずれのステップを踏む。目が会った時、思わず吹き出してしまった。すると別れ際に森君は、小さい声で、「おかしい？」と聞く。

私は大きく目を開き「とっても」と答えた。あさっては、いよいよ運動会本番だ。

日曜日の朝は、思いっ切りの秋晴れだった。

御飯を食べ、真白な体操服を着て真新しい地下足袋を履くと、桃ちゃんが迎えに来た。

「朝子ちゃん　鉢巻忘れているよ」

「本当？」

慌てて頭に手をやり取りに行こうとすると、母がアイロンをかけた赤白のそれを持って来てくれた。

「他に忘れ物は無いの？　ハンカチは？　お母さんはお昼頃になりますよ。気をつけて。」
「はい。行って来ます！」
桃ちゃんと急ぎ足で外に出ると、足袋を履いた足は運動靴と違いピタリと地面に密着し、冷たくなってきた土の感触が布を通して心地よく体中に伝わってくる。一年に一回、運動会の早朝、清々しい空気の中で足袋をはいて外を歩くことは、身も心も軽くなってなんとも言えずうれしい。草の柔らか、石ころの形のいろいろ、コンクリートの平らな堅さが足裏に直に感じられるのが面白くて、下を向いてあちこち寄り道し私は歩いた。
学校まで二十分程の道のりだが、途中に貨物の引き込み線があり、踏切を渡る。列車はめったに通らない。私は小走りに線路に近づき、その上を歩いてみた。前から足袋を履いて線路を歩いてみたかったのだ。どんな感じがするだろうかと想像したりもした。
思った通り、鉄は冷たく摩耗されてつるつるし、おまけに幅が狭いので足を滑らしそうになる。しかし、もう一歩もう一歩と進む度、無心に先へ行きたくなった。
「朝子ちゃーん！　貨物が来てひかれちゃうわよ！　早くしないと遅れちゃうし！　もう！　先に行っちゃうよー！」
桃ちゃんの大きな叫び声で私は「ハッ！」とし、
「ごめんねー！　桃ちゃん！」と謝りながら正気に戻った。
遠く学校の方向から風に乗って、パンパンとピストルの音がし、クシコスの「郵便馬車」が細く聞こえてくる。畑道はもう、白い運動服の小学生でいっぱいだ。
午前中の種目が終わりに近づいた頃、約束通り、母はやって来た。簡単なお弁当を風呂敷に包み、敷物を一巻かかえていつもの場所に立っていた。そこは校庭の北側隅の二宮尊徳銅像を囲った脇で、一般の見物席から少し離れた所だ。日が当たらないので寒く、従って人も来ない。なんとなく寂しい場所なのに、どういう訳か兄がいっしょだった頃から母は必ずここに席をとり、私達親子はひっそりとお弁当を食べた。
「朝子ちゃん手伝って」
「はい」
私は新聞紙を敷きその上にビニールの風呂敷を二枚広げ座布団を置いた。
桃ちゃん家は、おじさんとおばさんが朝一番で日当たりのいい競技のよく見える席を陣取り、御馳走を広げている。楽しそうに回りの人

達と大声でおしゃべりをしながら笑って賑やかだ。こちらに声はかけて来ない。然りとて母は気にするでもない。お互いに了解して干渉し合わないのがおばさん流の思いやりだったのかも知れないし、母もそれが楽だったようだ。

「朝子ちゃん、寒いからこれを着なさい。足袋を脱いで、くつ下を履いたら？」

「それはいい」

「じゃあ、手を洗ってきなさい。」

「はい」

カーディガンに手を通しながら、すぐ側の水飲み場へ行こうとした時、私達の後ろで一人のおばさんが莫莚を広げ始めた。黒い髪、細い襟首、どこかで見た人だ。ああ！　金子君のお母さんだ。おばさんは私に気付かない。そのうち、妹と弟が戻ってきた。

「和夫はどうしたんだろう。」

おばさんは手を休め女の子に言った。

「兄ちゃーん　こっちこっち！」

男の子が手招きする先に、のん気に歩いてやって来る金子君がいる。私を見つけると、びっくりしたらしく目を伏せてしまった。

母はしきりに「寒くない？」と心配し、魔法瓶に入れてきた熱いお茶を「飲みなさい。温まるから。」と何度も私に勧める。格別な御馳走などなく、小さな重箱にはおにぎりとゆで卵と皮を剥いたりんごがお行儀よく並んでいるだけだ。色どりも寂しい。しかし、口にする度母は、

「そんなに塩をつけるものじゃないのよ。」

「左手で受けて食べなさい。」

「口の端にご飯粒がついているわ。」

いろいろ小さい子供に言い聞かせるようにうるさい。私はその都度黙ってそれに応じた。そのうち、

「じっとしていると眠くなるわね。」

母がとろんとした目で私を見て笑った。

「こんな所で眠ったら風邪ひくでしょう。」

私が真顔で返すと、

「運動会、今年が最後だわね。」

そう言いながら、始めてグラウンドの方に目をやった。

「お母さん、対抗リレーは見ていくでしょう？」

「そうね……そう言えばお兄ちゃんも速かったわね。」

思い出しながら口もとが優しく笑っている。

「金子！」

突然、森君の声がしたので顔を上げると、森君が手に持ったみかんを、
「食う？」と言って金子君に投げた。
金子君が上手に受け取るとそばにいた二人の妹弟は、
「ちょうだい！　ちょうだい！」と手を出す。
金子君は仕方なさそうにみかんに指を立てる。まだ青いみかんは独特の甘酸っぱい香りを放ちながらきれいに三つに割れた。妹弟はあっという間にそれを取り上げ、一口で食べてしまった。
「吉野　ここにいたのか」
「うん。森君、午後のリレー頑張ってね！　応援するよ！」
「ああ」
森君はゴソゴソとポケットからキャラメルを出し金子君の妹弟にだまって差し出し、それから二言三言、金子君と言葉を交わした後、行ってしまった。
「お友達？」
「そう　二人共。金子君は六年生になってから引越して来たの。」
母は一瞬考えるような顔をし、お茶を飲んでから確かめるように後ろを振り返った。そうして私が生徒席に戻る寸前、やにわに金子君のおばさんに声をかけた。
「お天気が良くてよかったですね。クラスが同じようで。吉野と申します。」
おばさんは急に声をかけられびっくりしたようで、
「はあー」と消え入りそうな声で返事したかと思うと早々に帰り仕たくを始めてしまった。
アナウンスが聞こえ、午後の競技が始まった。思った通り、対抗リレーは圧巻だった。
赤、白、紫、黄、四色に別れたチーム、三年生から六年生まで、タイムの速い順に選抜された選手がリレーで競い合う。三年生と四年生は五十メートル、五年生と六年生は百メートルを力走する。アンカーは勿論六年生だ。私達のクラスは紫で、最後に走るのは期待の星、森君。
入場門に整列した選手達が、ランニング姿の先生に誘導され軽い走りをしながら入ってくると、拍手はいや増して最高潮となる。そのままトラックを一周して所定の位置に腰を落とした。
トップランナーは三年生。先生は号砲のピストルを高く揚げ、
「ヨーイ！」
よく通る声を張り上げ、一呼吸置き引き金を引いた。一斉のスタート。

さすがに選手の走りはみんな見事だ。気持ちがいい。皆、夢中で名前を呼び乗り出して声援を送る。あっという間に五年生になった。が、差がついた。紫は四位だ。でも、森君は落ちついている。いつもと変わらない飄々とした表情で、ゆっくりスタートの位置に進んだ。裸足だ。紫の襷をかけた森君は、左手をやや後ろに、バトンを受ける姿勢をとり走者が来るのを待っている。すでに他のグループはアンカーが走り出した。悔しそうな表情の五年生が、バトンを突き出し真直ぐに森君に向かって走ってきた。受けた！　すばやく右手に持ち替えした瞬間、森君の表情が変わった。口元をへの字に結び、見たことのない凛々しい顔でまっしぐらに走り始めた。

「森―！　森―！　森―！」

声援はうなり声となって校庭に満ちている。森君の走りは見る見る勢いを増し、砂煙をまき上げながら一人また一人、追い抜く。

「森くーん―！　森くーん―！　森くーん―！」

女の子達も黄色い声をからして叫んでいる。ゴールのテープが張られた。あと二メートル位になった時、紫と白が重なった。しかし、森君がグッと胸をせり出し、ほんの僅かの差でテープを切った。

私達は歓声と共に抱き合って嬉び、気が付くと自分達の席から遠く離れてしまっていた。

やがて静けさが戻り日が傾きかけてきた頃、感動の中に運動会は終わった。

庭の紅葉が真赤になったので、小さくて形のよい葉を二枚取って、折れないようにそっと教科書にはさんだ。夏の頃から良子さんに「あげるね。」と約束していたのだ。

「きれい！」と喜ぶ顔を想像しながら、気持ち早く学校へ行って、彼女を持とうと思った。教室に入るとやはり良子さんはまだ来ていない。

ランドセルから紅葉の葉をはさんだ教科書を取り出し確認する。まるで切り絵のようにつんと尖った葉の先端まで葉っぱは秋の陽の紅色に染まって美しい。

そっとページを閉じてから、机の中にしまおうとした時、何やら中に白い画用紙が入っているのに気が付いた。

「何だろう？」取り出して私は棒立ちになった。

白い紙のそれには、黒いマジックで大きく、

「くせーやつ　こえーやつ　おまえのことだよ。」と書いてあった。ピンときた。あの子達だ。高山さんのおじさんが肥やしをまいていた時、「くせー！」と言って以来、時々私に意地の悪い言葉をかけてきていたあの男の子達。きっとそうだ！

私は廊下側の席を見た。思った通り、彼等はうす笑いしていた。怒りの感情が煮えたぎり、もう押さえきれないところまできた。

私は紙を握りしめ、つかつかとその子達の所へ行き、

「これ、あんた達でしょ！」と突き付けた。

「エー！　何怒ってんのー　知らネーヨ！　なぁ？」

「分かっているのよ　こういうことするのは、あんた達しかいない！」

「怒ってやんの　こえー顔！　なぁ鈴木？」

鈴木君はだまっている。私は深呼吸して、何げなく黒板を見た。そこには、日直当番がまだ叩いていない、白墨の粉がたっぷり付いた黒板消しがあった。ほとんど無意識だったと思う。私はそれを取りに行き、それから思いっきり彼等のランドセルを叩いた。何度も何度も、

「許さない！　許さない！」と言いながら、いつまでも叩き続けた。

二人の男の子は、興奮している私に驚いて何も言えないでいる。

「止めろ！　吉野、止めろ！」

森君が私から黒板消しを取り上げた時、ランドセルは真白になり、回りにいた友達が「ゴホッ！　ゴホッ！」と咳き込み始めた。

先生が入って来た。

「何してるんですか！」

髪を振り乱した私と白墨の粉じんを見て目をむき言った。森君が画用紙を広げ、事の子細を説明してくれた。

「先生！　吉野は僕達のランドセルをこんなにしました！」

「吉野さん　あなた……」

先生は憂うつな顔をしかめて、

「謝りなさい」と私を諌めた。私は拳を握り、自分を鼓舞し、絞り出すように言った。

「先生は、えこひいきしています！　私は謝りません！　絶対に謝りません！」

良子さんが、雑巾を絞ってきてランドセルを拭き始めた。それを見ながら、頭がボーとしてくるのを感じた。回りに人だかりが出来ているのも目に入らない。その後、どう時間が過ぎていたかも覚えていない。

中休み、男の子達は先生に呼ばれ、職員室に行ったらしいけど、私は呼ばれなかった。授業中も給食もボーとしていたらしい。

放課後、思い出して良子さんに紅葉の葉をあげた。思った通り良子さんは、

「きれい！」と言ってくれた。

涙があふれて、机に俯せて初めて私は泣いた。

「元気だして」

顔を寄せ、小さい声でそう言って、良子さんは黄色いガーゼのハンカチをそっと差し出してくれた。

それから、男の子達は二度と、「くせー奴」と言わなくなった。

風がいっそう冷たくなり、秋も終わりに近づいて来た頃から、私は勉強をしなくなった。学校はともかく、家で教科書を広げることはまずない。宿題もやったりやらなかったり。忘れ物も増えた。学校で友達とおしゃべりすることは以前にもまして少なくなった。

そのかわり本をよく読んだ。毎日、図書室によって一、二冊借り、その日のうちか次の日には読み上げた。相変わらず寝そべって読む癖は直らず、疲れてそのまま寝ている所に母が帰って来てしまった日もよくあった。

「風邪をひくでしょう！　目を悪くしますよ！」と、両親にはしょっちゅう叱られたが、もはや夢中になれるものは読書だけになった。

「赤毛のアン」は、留里ちゃんと同じ「アンの娘リラ」まで読み進んだ。

本の世界に入り込んで、様々な経験をすることは、重い心に羽根をつけたようなものだ。

アルプスの山で生活した次の日、無人島に漂流した。小さな昆虫の生態を観察者といっしょに心ときめかせ追いかけもした。嵐や日照りの猛威、そこで生き抜く人々も見た。馬や馬車に乗り、荒れた道を疾走した夜もあったような気がする。イギリスの暗く煙った街や、蔦の這う秘密めいた館、セージやバラの香りにあふれた庭は、私の大好きな風景になった。

ページをめくっていく中に時々出て来る挿し絵を頼り、景色や場面の想像を広げる楽しさは格別だ。が、それ以上に、今あたかもそこに生きているかのような主人公達と心を通わせる時間が、私にはかけがえのない喜びとなっていった。

お城の王女様もいろいろだった。華やかな生活が必ずしも幸せではない事を学んだ。試練に立ち向かった人の強い意志や勇気、悪を打つ正義、不自由な境隅の中で夢みて生きる本当の自由。それらはやがて不思議な感動となって、まだ訳分からない小さな私の感情を震わせ、確実に、「もの思う心」を豊かにしていってくれたように思える。

ある日、私は自分を見たいという衝動にかられた。泣いたり、笑ったり、怒ったりする自分って何だろう。どんな顔をしているんだろう。今まで自分を鏡に映してしみじみ見るなどという事はなかった。

奥の部屋の桐の箪笥の上に、母が結婚する時に持ってきた小さな姫

鏡台が置いてあった。もう決して新しくはないが、朱色の塗りでたまご型の鏡の下には可愛らしい引き出しが二つ付いている。

たまに母が出かける時、引き出しから紅入れを取り出すぐらいで普段は使われない物だ。重宝するのはもっぱら手鏡で、髪を梳かす時も肩に手拭いをかけ必ず縁側に出る。鏡を見ながらお化粧をすることはめったになかった。

椅子に乗り、鏡台を落とさないようゆっくりゆっくり降ろし、御膳の上にうやうやしく置いた。引き出しが少し開いて、そこから微かにぷーんと白粉のいいにおいがする。

私は正座し鏡の中にちょっと緊張した自分を映した。なるほど母の言う通りの髪だ。

「朝子ちゃんの髪はピンピン跳ねるから、おさまりがつかなくて困るわ。」

髪を梳かしてもらう時よく言われる。一応、乙女刈りなのだが毛先が四方に跳ね上がっている。

それに、太い眉、高くない鼻、決して美形ではない。でも一つだけ気に入ったのは、目だった。私の目は「かっ」と開きぼんやりしていない力があった。輝いている。

「目は心の窓」と誰かが言っていたのを思い出し、満面の笑顔をつくってみた。パチパチまばたきをした。最後に舌を出し、無言の「あかんべェー！」もした。

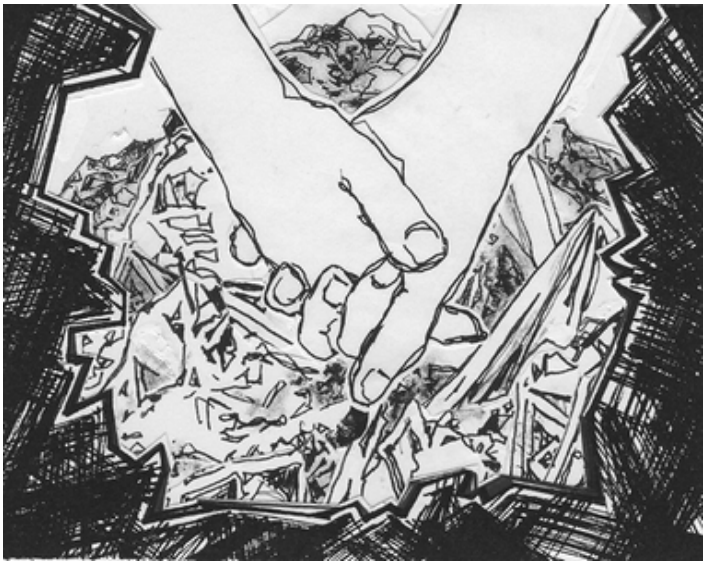
これが私なのだ。そう思うと妙に心は落ちついた。

（つづく）

アプとズコ(Appu & Zukko)

—第六回—

香取　淳



14

三月末のある晩、宿舎に世話係のペクールがやってきました。彼女はアプとズコをロビーに呼び出し、今日で合宿を切り上げることを言い渡します。翌日の夕方にオーナーのパーリオが迎えに来るので、それまでに支度を終えて待つようにと伝えに来たのです。ペクールは用件をヒステリックに言い終えると、ピンクの洋ダルをクルリと廻して宿舎を出て行きます。外は地表を覆う雪が解けて、夜闇が一層黒さを増していました。その闇に吸い込まれるように去って行くペクールを見届け、二人はロビーで話し合います。そして、帰り支度はその夜のうちに手早く済ませて、翌日はいつものように増産所に行くことにしました。冬のあいだ一緒に過ごした新しい人間の子たちとお別れの挨拶をしたかったのです。

翌朝、紫のコスチュームに身を固めたアプとズコは勢いよく宿舎を飛び出しました。理事長室の奥にある廊下で着替えを済ませ、広大な増産所のゲートを入ります。二人は乳児舎や一歳児の棟はパスして、直接二歳児が収容されている建物に入りました。おびただしい数の幼児が床や背の低いテーブルの周りで遊んでいます。しかし、その子らは誰ひとりとしてアプとズコに目を向けることはありません。ある子

は涎(よだれ)を垂らして指を嘗めまわしたり、またある子は床を走ったり転がったり、中には床にふんぞり返って大声で泣きわめく子もいました。それらの幼児たちをかき分けるように二人は奥へ奥へと進みます。

突き当りにある引き戸を開けて、二人は短い廊下で繋がった次の建物に入ります。しかし、フロアに群がる幼子たちは、アプとズコを無視して遊びに夢中です。三番目の建物に入っても様子は何ら変わりません。二人は建物の四番目の入口まで来ました。アプが引き戸を開けてフロアに入り、ズコがそのあとに続きます。彼らが後ろ手に引き戸を閉めたときです。入口近くで遊んでいた幼子の中から二、三の子たちが飛び出して、二人に駆け寄ってきました。機敏なその子らの動きにつられるようにフロアの真ん中や向かい側からも数人が走ってきました。アプとズコは両手を広げて、幼子たちを笑顔で迎えます。そして、一人ひとりの名を呼び、抱きしめたり高く抱き上げたりして別れを惜しみました。

次の建物では、沢山の子たちが二人に駆け寄ってきました。そうです、その建物にいるのは**の**組の子、十一月生まれの子たちです。このフロアにいる子の半分ぐらいは新しい人間の子でしょうか。アプとズコは次々に近づいてくる子たちの名を呼んで抱きしめます。「ユキノ」、「マリノ」、「サチノ」と呼ぶ声に、「アプー」、「ジュコ」と舌足らずに答える声が入り混じります。アプとズコは、身ぶり手ぶりを交えて幼子たちにしばらく会えなくなることを話します。その言葉が通じたのでしょうか、察しのよい子は悲しげな表情で、「バイバイ」と言いながら小さな手を振っています。

多くの子たちと別れの挨拶を交わした二人は、後ろ髪を引かれる思いで次の**お**組の建物に入ります。やはり、大勢の子たちが一斉に駆け寄ってきました。アプとズコは、その子たちの名を呼んで、つぶらな瞳を見ながら手をしっかり握ります。

「アイクちゃん、しばらくお別れよ。アプはしばらく遠くに行くけど、また冬になったら戻ってくるわ。それまで元気でいてね」

「アイク、さびちい！」

「そうね、さびしいわね。でも、アプ姉さんは必ず戻ってくるよ。だから、いい子で待っていてね」

アイクは感受性の鋭い子で、目からいっぱい涙を流しています。アプはアイクをしっかり抱きしめ、しばらくの別れを惜しみます。

愛おしい子たちに別れを告げたアプとズコは、紫のコスチュームに着替えて増産所を出ました。二人の手には増産所で一冬を着て過ごした黄色い衣服が握られています。その衣服を宿舎の所定の場所に放り

込み、二人は各々の部屋からスーツケースを持ち出してきました。しばらくロビーで待つうちに、本庁の勤めを終えたパーリオが迎えに来ました。

パーリオ邸に戻ったアプとズコは、翌日から早速野外トレーニングに出掛けます。ホサピレースでトップの地位を保つためには一日たりとも練習を怠ることはできません。それをよく理解しているパーリオ夫妻は、二人の申し出を二つ返事で聞き入れてくれました。そして、出発する二人に妻のペクールが手作りの弁当を手渡します。アプとズコはその弁当を腰に巻いたポーチに入れて、門の外に駆け出しました。二人が向かった先はもちろん地底湖のある洞窟です。パーリオの家から洞窟までは四、五キロメートルはあるでしょうか。往復すると十キロ余りで、一日の練習としては程よい距離です。

アプとズコは芽吹きの前の灰色の原野や林の中を駆け抜けて、深い谷に下って行きます。雪解け水の清流を遡り、洞窟の入り口にやってきました。いつものように空を見上げて、偵察機などが飛んでいないかを確かめます。それが済むと二人は四つん這いになって洞窟に入りました。先にズコが狭い洞窟に頭を突っ込み、アプがその後に続きます。二人とも背丈が伸びて、這った状態でなければ前には進めません。湧水が流れる洞窟を、二人は膝までびしょ濡れになって地底湖のほとりに辿り着きました。

真っ暗な地底湖の岩場に立つと、二人は闇に向かって大声を上げます。

「ただいま、ズコです！」

「アプです、ただいま戻りました！」

交互に叫ぶ二人の声が洞窟の闇にこだまして、湖面を渡る波のように返ってきます。そのこだまに交じって源蔵の声が響きました。

「アプとズコ、おかえり！　今すぐ迎えに行くからな」

迎えに来た源蔵のボートで対岸に渡り、二人は洞窟の奥にあるリビングに入りました。濡れた足をバスタオルでよく拭って、冷たくなった足をマッサージして温めます。そのあいだに源蔵はキッチンに入ってスープを温めてきました。アプとズコは熱いスープを啜りながら、イカタックシティで過ごした一冬の様子を話します。源蔵は、アプたちの言葉に大きく頷きながら話に聞き入ります。二人は代わり代わりに色々なことを話しました。なかでも人間の子たちの育児については熱が入って、時おりチホセとかアイクという具合に幼児たちの名が何人も飛び出してきました。

「二人とも有難う。待望の子供たちの成育は順調で、その子たちはホ

サピより知的レベルが高い。発達も極めてよいということだね」
源蔵はやさしく感謝を述べながら、さらに言葉をつなぎました。
「心配なのはイカタック星人にばれないか、という問題だな。ホサピの子とは明らかに違うとなれば……」
「その点は大丈夫です。僕らにはよく分かるけど、保母役のホサピたちも気付いてはいません。それに、イカタック星人は増産所にほとんど来ないし、たまに来てもホサピの子には関心を示しませんから」
「本当に、そうかな？」
「ズコが言う通りよ。私たち二人には親しい態度を示すけど、ほかのときにはホサピの子とまったく変わらないわ」
アプも、ズコを後押しするように言います。
「心配することはまったくない、という意見だね」
「はい、その通りです」
「分かった。それでは次のステップに進むとしよう」
「次のステップ？」
「そう、次のステップだよ。新しい人間の子供が千人も生まれてきて、その子らが順調に育っていれば、そっちはしばらく放っておいてもいいだろう」
「何故ですか？　言葉や文字の教育は？」
「ウム、君たちの場合はどうだったかな。ここに来たのは幾つのとき？」
源蔵の問いかけに、アプとズコは互いに顔を見合わせます。
「十歳。そうだよねぇ、アプ」
「そうよ、十歳になった春にパーリオ様のお屋敷に来て、それから間もなくこの洞窟を見つけたんだから」
「つまり、君たちが読み書きを習い始めたのは十歳を過ぎてから。それからいろんなことを学んだわけだ」
「ハイ、そうです」
「だから、いま増産所にいる子たちも十歳を過ぎても遅くはない……、そうは言えないかな」
「おっしゃる通りかも。それに、増産所ではホサピとしての躾（しつけ）や職業訓練もしっかり教育されるから」
アプが小さく頷き、源蔵に同調しました。
「言葉や読み書きについては慌てることはないということですね。それでは何です、次のステップというのは？」
「ウム、増産所の子たちではなく、君たち自身の教育というか学習だな。まあ、ワシと千佳さんも含めて、四人の学習だな」
「フーン、また勉強ですかぁ。一体、何を学ぶんですか？」

ズコが愚痴りながら不満気に訊きました。アプも合点がいかないという表情です。
「それはな、人類が何故滅びてしまったのか、という問題だ」
「何ですか、それは？」
「ウーム、核戦争という実に愚かなことを……」
「それは何度も聞いたわ。そんな話を何故繰り返すの？」
「それはな、新しい人類が同じ轍（てつ）を踏まないように、イカタックにいる新人類の子供たちが、愚かな過ちを二度と繰り返さないために」
「そうか！　それだったら少しは価値があるかも」
そう言うズコの背後から、千佳の声が聞こえました。
「人類が滅びたのは、人間が核という牙を手に入れたこと。猛獣のように鋭い牙で、人間同士が噛み合い殺し合ったためよ」
アプとズコは、源蔵との久々の会話に夢中でした。ですから音もなくリビングに入ってきた千佳には気付かなかったのです。
「あッ、千佳婆さん、ただいま」
アプが先に立ち上がり、挨拶をしました。ズコも椅子から立ってペコリと頭を下げます。
「二人ともおかえり。あらあらズコはまた背が伸びたこと」
「そうですか、自分では気づかないけど。ところで千佳婆さんはいま核という牙、猛獣のように鋭い牙、と言いましたね？」
「そうよ、誰でも見境なく噛み殺す恐ろしい牙よ」
「その牙ですが、なぜその言葉が出てくるんですか？」
ズコは、椅子から立ち上がった姿勢で訊き返します。千佳は頬にかかった銀色のほつれ毛を後ろに掻き上げながら源蔵に視線を送ります。源蔵は、それを待っていたかのように答えました。
「ズコの質問は核心に迫る重要なポイントだ！　もし、それを知りたいなら、これからスクールに行こうか」
「ハイ、分からないことはその場で解決したいです」
「アプはどうかな？」
「私だって知りたいわ」
「そうか、知りたいと思ったときがベストチャンスだ。それでは早速、スクールに場所を移そう」
「私はその間に美味しいケーキを作ることにしますわ。勉強が終わったときに、皆でいただきましょう」
そう言う千佳を一人残して、アプたち三人は地底湖のほとりの暗がりに出ました。岩でゴツゴツした足元を懐中電灯で照らしながら一行は広い岩場に口をあけた狭い洞窟に入ります。立って歩くのがやっと

の洞窟を潜って、突きあたりで源蔵がスクールの扉を開けました。中から強い光が漏れ出し、暗闇に慣れた目が痛いほど眩しく感じられます。アプとズコはスクールの壁に円形に並ぶディスプレイの前に座りました。源蔵は、二人の隣のソファー椅子に腰を沈めてタッチパネルを操作しながら話し掛けます。

「だいぶ前になるが、人間の歴史を学習したことを覚えているかな？」

「はい、人間が地球の支配者になったのは、ひとえに火を手に入れたことが大きな理由だと」

源蔵の問い掛けに、アプとズコが声を揃えて答えます。

「そう、二人ともよく覚えていたね。今日はその続きだよ」

源蔵が言い終える前に、『人類の歴史―後篇―』というタイトルがディスプレイに浮き上がりました。そして、前半の振り返り、原始人がマンモスを狩る狩猟生活や土器を作り農耕にいそしむ場面、槍や剣、弓矢を手に戦う兵士の姿がハイスピードで流れます。

振り返りの画像が遠ざかって消えると、入れ替わりにヨーロッパの封建社会、荘園とそのなかで自給自足の生活を送る人々が映し出されました。続いて森林の開墾や農具の発達により農業生産力は飛躍的に向上し、余剰の生産物が生まれてきます。その余剰産物の物々交換が盛んになり、それらはやがて定期の市へと発展し、貨幣経済へと移行していきます。

社会の変化は商人や手工業者という新たな階級を生み出し、彼らが住む地域に都市が生まれて発展を遂げました。イタリアのヴェネツィアやジェノバ、織物のフィレンツェやミラノ、北ドイツではハンブルクやブレーメンといった代表的な都市とその風景がテンポよく描かれます。

画面は変わり、ほぼ同時期に勃発した十字軍の画像が現れました。それまでの農民や商人に代わって、主役は甲冑に身を固めた勇ましい騎士や兵士です。「キリスト教の聖地奪還」というローマ教皇の命に従い、ヨーロッパに散らばる国王や諸侯は競うようにエルサレムへの遠征に加わります。二百年近く続いた十字軍の影響はとても大きく、発達した交通を基盤に商業の規模は拡大をつづけ、やがて広域貿易へと発展していきます。

この十字軍のほかにも戦争は絶えません。英仏の百年戦争とその後のばら戦争、宗教や宗派が絡んだユグノー戦争やドイツ農民戦争など、枚挙のいとまもありません。しかし、それらの戦いは甲冑に身を固めた兵士同士が直接戦う戦闘で、武器も刀剣や槍、時代が進むと鉄砲や大砲が加わる旧来からの戦いでした。

ディスプレイの映像が一旦消えました。一呼吸おいて画面に「近世

から今日まで」のタイトル、それに続いて産業革命の様子が描き出されます。蒸気機関の発明とそれを用いた大きな工場の建設、蒸気機関車や汽船を用いて大量の物資や人が運ばれ、さらに自動車や飛行機が発明されて、それらが大量に生産されるようになってきました。

このような技術革新の流れは兵器とそれを用いた戦争の姿をも大きく変えてゆきます。ダイナマイトが爆弾として用いられ、殺傷力が大きい重火器や戦車の開発、さらに軍艦や戦闘機が登場して、それまでの平面的な地上での戦争は、空や海を含んだ三次元のものへと変質してゆきます。かつての騎士や兵士たちが戦場に対峙して戦う姿は消え失せ、戦車や戦艦、さらに戦闘機などの兵器と兵器とがぶつかり合う戦争に変わったのです。さらに戦争で死傷するのは兵士にとどまらず、戦争とは直接関係のない一般の市民が巻き込まれていきます。無抵抗の子供や女性であっても見境なく殺傷される悲惨なものに変貌しました。

そして、一九四五年の夏には次元の異なる兵器、それまでの概念を遥かに超えた新しい兵器が登場しました。その兵器は決して大きくはなく、遠くからはパラシュートに括りつけた普通の爆弾にしか見えませんでした。しかし、それは爆発した瞬間、巨大なキノコ雲を青空に広げ、一挙に中核都市を廃墟と化し、そこに住む夥しい人の命を一瞬のうちに奪ったのです。それは老若男女を区別しない、むごたらしい大量殺戮（さつりく）でありました。

この人類最初の原爆投下の悲劇を教訓にして、しばらくのあいだ地上には原水爆禁止の機運が高まりました。しかし、それから百年と少しの後に、人類は保有する数千個の原水爆のすべてを爆発させてしまうという『世界核戦争』を起こして滅び去ったのです。

世界中のありとあらゆる都市が壊滅して、地上から人類が消えた映像は残されてはいません。カメラはすべて破壊され、最期まで撮影を続けたカメラマンたちはことごとく死に絶えてしまったからです。

ナレーションの女性は沈んだ声で言います。「この悲惨な人類の歴史の映像は、地下に逃れて生き延びた僅かな人が力を合わせて編纂（へんさん）しました。これから先、人類が地上で暮らす日が再び到来したときには、再び愚かな過ちを繰り返してはなりません。決して同じ轍を踏まないことを強く訴え、心より祈念しています」と。

アプとズコは画面に釘付けになり、しばらく動くことができません。映像が消えて黒々としたディスプレイを見詰めたままです。

「これが、滅びた人類が犯した大罪だよ。その償いでワシと千佳はこの地下で生涯を送る運命となり、君たちは宇宙生物のイカタックの家畜にされてしまったわけだ」
源蔵は弱々しくそう言うと、アプとズコに視線を向けました。
「いいえ、人類は滅びません。絶対に」
「そうよ、必ず地球を取り戻すわ。私とズコと、それに増産所にいる沢山の仲間たちで」
ズコとアプは声を震わせ、自らに誓うように言いました。
「そうだ、そうだね。まだ人類は滅び去ったわけではない」
源蔵も表情を引き締めて、アプとズコに同調します。
「僕は、少しだけど分かってきた。今のビデオで」
「私も分かったわ。何があっても戦争をしてはいけない、ということ」
「ウム、二人ともよく理解できたね。それではリビングに戻ろうか」
源蔵の言葉に促され、アプとズコは立ち上がりました。
アプたちはスクールを出て、ゴツゴツした岩の広がりに出ました。暗闇に目が慣れず、三人は手探りをするように漆黒の岩場を進みます。
「お帰りなさい。さあ皆さん、テーブルに着いて」
千佳が明るい声で一行を迎えます。
「今日はね、チーズケーキを作ったのよ。いま紅茶を淹れるわね」
千佳が盆で飲み物を運び、テーブルに四人が揃いました。
「美味しそう、いただきます！」
アプとズコは小さなフォークを手に、ケーキを一口頬張ります。表情が思わず緩んで、幸せそうな表情になりました。
「美味しいわ！」とアプ、「めちゃ、うまいっ！」とズコ。
「そう、嬉しいわ。久しぶりだけど、うまく出来て良かった」
千佳もそう言いながらケーキを一切れ食べて、紅茶を啜ります。
「ところで、スクールではどんなことを勉強してきたの？」
彼女は、ケーキを食べ終えたアプとズコに訊きました。
「人類の歴史、核戦争で地上から人類が消え去った悲しい歴史です」
「そう、人類が滅びた歴史を学んだのね」
「はい、戦争はいけない、戦争をしたら人類は滅びるということがよく分かりました」
アプとズコは冷めかけた紅茶を啜りながら答えます。
「そこまでの理解は二人とも完璧と言ってもいいかな」
源蔵が二人をフォローするように言いました。
「それじゃ、もう少し掘り下げて考えてみましょう」
千佳はケーキ皿や茶碗を脇に寄せて、テーブルに身を乗り出すよう

に話し始めました。

「これはね、広島と長崎に原爆が投下された二十世紀の半ば頃に、ドイツのヴァイツゼッカー（注）という人が言ったことよ。話はすこし長くなるけど、人間はどのような動物なのか、というところから話を始めるわね」

（注）カール・フリードリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカー（1912-2007）。ドイツの物理学者で、第二次世界大戦中は原爆の開発に携わったが、戦後はキリスト教の立場から平和運動を進める哲学者となる。

千佳の真剣な語り口に、アプとズコは少し緊張した面持ちになりました。彼女が切々と話した内容は、大筋において次のようなものでした。

人間は草食動物か、それとも肉食動物かと問われれば、誰でも『草食動物の仲間』とか『草食系』と答えるに違いない。その草食動物である人間が地上に現れたときは極めて弱い存在であり、ときとして肉食獣の餌食にもなってきた。その弱い人間が火を手中に収めることにより、猛獣の脅威から逃れ、逆に猛獣や巨大なマンモスを狩って食料とするように立場が変わった。

地上の支配者となった人間は、鉄器を用いた強靭な刀剣を作り出し、さらに鉄砲や大砲を開発、一度に多数の同胞を殺傷できる武器を持つようになる。そのような武器の開発はとどまることを知らず、ダイナマイトが爆弾に用いられ、ついには核兵器が造られた。究極の武器となった核兵器は、それまでの兵器とは違って、それを戦争に用いたときには敵味方の区別を超えて人類の滅亡をもたらす。

つまり、人間という動物はこの地上に登場して以来、永いこと草食動物の一種であった。ウサギや鶏のようにおとなしい草食動物は、ときとして仲間争いが高じると血みどろの戦いをする。食物を噛むための歯で仲間の腹や首を食いちぎり、殺してしまうことがある。おとなしい草食動物の仲間である人間の場合もしかりである。争いがあるたびに仲間を傷つけ、むごたらしい殺戮を繰り返してきた。

一方、ライオンや虎などの肉食動物の場合はどうであろうか。彼らは仲間同士で戦うことがあっても決して牙は用いない。仲間を殺してしまう牙は用いないやり方で戦う。何故なら、彼らが鋭い牙を用いて殺し合ったならば、その種はすぐに絶滅してしまうからである。これはコブラやハブ、マムシのような毒蛇にも当てはまる。

かつてはおとなしい草食動物の一種であった人間の場合はどうであろうか。残念ながら人間には肉食獣や毒蛇のような遺伝子、同胞には

噛みつかず、争ったとしても殺さない、という遺伝子は組み込まれてはいない。したがって、人間はその長い歴史の中で数えきれないほど多くの同胞を殺してきた。それでも争いで命を落とした人間の数には限りがあったので、人類の滅亡に直接繋がることはなかった。

しかし、核兵器を持ってからの人間、二十世紀中盤のヒロシマ・ナガサキ以降についても同じことが言えるであろうか。その答えは明らかにノー、人間はもはや草食動物の一種ではなくなったのである。ライオンや虎のように鋭い牙、核兵器という恐ろしい牙を持った肉食獣の一種になったと考えなければならない。

そこまでを一気に話した千佳は、脇に寄せたカップを引き寄せ、冷めた紅茶を一口啜りました。

「そうか、さっきの牙というのは、そういう意味だったんだ」

ズコが何度も頷きながら言います。

「そうなの、核という牙を持った人間は、もはや草食動物の仲間ではなくなったということ。ヴァイツゼッカーは肉食獣になったとまでは言っていないけど、人間は一旦争いが起こると同胞を噛みころしてしまう草食動物であることをよく認識しなければいけないと警告しているわ。そのような警告を無視して、人類はいまから三百年ほど前に全世界を巻き込む核戦争をしてしまったの」

「その結果、地上から人類は姿を消し、千佳さんや源蔵さんたちは地下に、私たちは家畜にされてしまった……」

「そう、アプの言う通りよ。だからこれから創る新世界では何があっても人間は人間を殺してはならないというルールが必要になるの」

「僕ら人間は肉食獣になった以上、もう仲間には噛みつかない、同胞を殺してはいけない、ということですね」

「そう、これからの新しい世界では人を殺してはならない、何があっても、と言うことだね」

源蔵が念を押すように強く言いました。

「でも、人類が滅びる前には死刑制度のある国が多かった、とスクールで学習したことが……」

「ああ、殺人などの凶悪犯罪を罰するために死刑というものがあったのは事実だ。しかし、人間は肉食獣の仲間になったという前提に立てばどうだろうか。もはや死刑などは認められない、いや死刑などという言葉もあってはならないことになる」

「よく分かります、でも大量殺人のような極悪非道の凶悪犯はどうなりますか？　凶悪犯罪の抑止とか再発防止という観点から必要だと考える人がいますが」

「うむ、対応策として懲役百年、二百年、必要であれば三百年とか五百の刑を作ればよい」
「そうすれば、恩赦や特赦があったとしても、重罪人が刑務所から出ることはなくなるわけか」
「そう、たとえ獄中死をしても刑務所に葬られ、刑期を終えるまでは骨になっても出られないような厳罰をね」
「なるほど、源蔵爺さんの考えは妙案かも」
「とにかく人は人を殺してはならない、ということをイカタックにいる子たちに教え込み、徹底することだな」
源蔵はそう言い終えると、千佳の目を見ました。
「私もまったく同じ意見ですよ。イカタックシティに生まれ育った新人類が性懲りもなく互に傷つけ殺し合ったとしたら、同じことの繰り返しになってしまうでしょう」
「そうだわ、新しい人間の世界ができたときには、その世界を統治するルールが要るわけね」
アプが源蔵と千佳の意を察して言いました。
「その通りなの、これから創りだす新世界にはルールが必要であり、そのルールの第一条にはいま学習していることがふさわしいわ」
「そうか、分かった。よーく分かったよ！」
ズコが突然椅子から立ち上がり、大声を発します。
「みなさん！　新世界のルールの一番目が決まりました。それをこれから発表します、よろしいですか」
源蔵と千佳、それにアプの目もズコを促しています。
「人は人を殺してはいけません。どのような理由があっても」
ズコの大きな声が洞窟の隅々に響き渡ります。その洞窟の一隅に灯りをともすリビングにパチパチと四人の拍手が響きました。

15

アプとズコは今朝も元気にパーリオ邸を飛び出しました。街路樹のプラタナスや銀杏の若葉が初々しく、頬をなぶる風も爽やかです。軒を連ねた家の庭先や生垣には躑躅（つつじ）やバラが色鮮やかに咲いていました。
二人が市街地を抜け出すと、道路の左右に広大な農園が広がります。その農園では、茶色の服を着たホサピたちが黙々と働いていました。やがて二人は舗装された広い道から草の生えた旧道に入ります。
「人は、人を、殺してーは、いけません」とズコがジョギングに合わせて掛け声を掛けました。

「どのような、り、ゆ、うーが、あーっても」とアプが続けます。再び「人は、人を、殺しては……」とズコ。

その掛けあいを繰り返すうちに谷底を細く縫う清流が見えてきました。二人はその谷川の畔までやって来ると、勢いよく浅い流れに足を踏み入れます。春先は冷たかった雪解け水も幾分温まり、流れをさかのぼる二人の足も軽やかです。狭い洞窟の入り口を這いつくばって潜り抜け、船着き場に迎えに来た無人のボートでいつものリビングに入りました。

「アプとズコ、今日は少し早い到着だね」

「そうです、早く勉強がしたくて急いだから」

「まあ、ズコったらいい子ぶって。でも、勉強が面白いのは私も同じよ」

「そうか、二人とも意欲満々だね。それでは早速、スクールに行こう」

源蔵は、濡れた足を拭き終えた二人に声を掛けて立ち上がります。暗闇を四、五分進んでスクールに入ると、アプとズコはお気に入りの椅子に掛けました。源蔵が入り口近くのタッチパネルを操作しながら言います。

「今日は、日本の古代史だよ」

「へーッ、これまではヨーロッパの歴史が中心だったけど、今日は何が出てくるのかな」

「ヨーロッパとは一味違った、日本独自の歴史だな」

源蔵が言い終えないうちに、タイトルの文字がディスプレイに浮き上がりました。それが消えると縄文時代の人々の暮し、弥生時代とその文明、さらに古墳時代から飛鳥へと時代が進んでいきます。アプとズコは身を乗り出して、画面を食い入るように見詰めています。源蔵はそれを見届けると、足音を忍ばせてスクールを出ました。

またたく間に一時間が経ちました。頃合いを見計らい、源蔵がスクールに戻ってきました。ディスプレイには学習内容のサマリー、さらに編集に携わった人の名や参考にした書物などがテロップで流れます。

「二人ともお疲れ様、よく理解できたかな？」

源蔵がタッチパネルを操作しながら二人に訊きます。

「正確なことは不明……ということが多過ぎて、すっきりしないわ。例えば卑弥呼がいた場所とか聖徳太子は何者なのかとか」

「ウム、日本に文字が伝来したのが遅かったから、飛鳥より前はあいまいな点が多いね」

「そうかぁ、文字がないと正確な記録は残らないんだ」

「そうだよ、文字がいかに重要なものか、日本の古代史を見るだけでもよく理解できるだろう」

源蔵はディスプレイの電源を切ると、二人をリビングに促します。
そして、千佳を交えた四人でディスカッションを始めました。
「今日の学習で印象に残ったことは何かしら？」
ミルクティーを啜るアプとズコに、千佳がやさしく尋ねます。
「日本が統一されて、大和という国がつくられたとこかな、仏教の伝来も含めて」とズコが言い、「仏教と一緒に、新しい文化や先進の技術もたくさん入ってきたんでしょうね」とアプが繋ぎます。
「ウム、二人とも良いところに目をつけたね。恐らく古墳時代までは各地で豪族たちが力を競い合い、争いが絶えなかっただろうね。その群雄割拠の状態から畿内の豪族たちが抜きん出て、やがて大和朝廷をつくりあげた。そして天皇を中心とする国家が形成され、聖徳太子の十七条の憲法が発布される」
「十七条の憲法？　いまスクールで勉強したやつですね」
「そう、その十七条の憲法の最初は？」
「確か、和をもって貴（とうと）し、だったと思うけど」
ズコは、質問の真意が分からない、という表情です。
「アプはどうかな？」
「仲良くすることが一番という意味は分かるけど、それがどうして第一条にくるのか、さっぱり理解できないわ」
「そうか、そうだよね。その辺について、もう少し深く掘り下げてみよう」
源蔵は、テーブルの向かいの千佳に目配せをして話を振ります。
「なぜ、聖徳太子が和を大切にしたのか、その背景を考えてみましょうね」
千佳は、紅茶のカップを脇に寄せて、身を乗り出しました。
「大和という国ができる前はどうだったか、二人とも思い出して。近畿はもとより北部九州から東は濃尾、関東にかけて数え切れないほどの豪族がひしめき合っていたと思うの。それらの豪族たちは首長が亡くなると古墳をつくって、その勢力を誇示していた。当然、領土や利権をめぐる争いは絶えることがなく、国内は戦乱状態にあったと考えられるわよね」
千佳は、アプとズコの真剣な表情を確かめ、話を続けます。
「それに加えて隣国では隋（ずい）が数百年ぶりに中国を統一し、朝鮮半島では百済（くだら）、高句麗（こうくり）、新羅（しらぎ）が三つ巴の勢力争い。そのようなときに日本が内乱状態では、いつ侵略されて滅ぼされるか心配になるわよね」

アプとズコは、再びコクリと頷きます。
「そこで聖徳太子は言ったのだと思うの。狭い島国の中で、いがみあったり争ったりしていてはいけない。互いに仲良くすることが一番大切だと」
「そうかぁ、豪族同士の争いが絶えなかったのか」
「狭い島国の中で戦争をしていたら、国が滅びるということなのね」
アプとズコも、徐々に理解を深めてきたようです。
「さらに付け加えると、十七条憲法の終わりでは、仲良くするためには話し合いが大切だと言っている。重大事についてはみんなで議論をして決めなさいと念を押しているわけだ。まあ、大和という名には『大きな和の国』という意味も込められているのだろうね」
源蔵が、再び会話に加わってきました。
「話は変わるけど、新世界、イカタックシティで生まれた人間の子たちが創り出す新世界ではどうかな、この和が大切だという問題は？」
「急に訊かれてもうまく答えられないけど、反対する理由はないんじゃないかなぁ。そうだよねぇ、アプ」
「ハイ、苦労に苦労を重ねて生まれてきた大切な仲間ですもの、互いに仲良くするのは当然のことだわ」
「あのね、源蔵さんが言いたいことにはもう少し深い意味が込められていると思うんだけど、それが何か、分かる？」
「いいえ、それ以上のことは……」
アプとズコが小首を傾げます。
「無理もないわね、あなた達は滅びた人類を知らないんだから。それじゃお話しするけど、人間が地上から消える前の地球はとても狭くなっていたと思うわ。ジェット機を使えばどこにだってすぐに行けたし、情報は瞬時に伝わった。たとえ地球の裏側で起こった出来事であっても、動画などでリアルタイムに見ることができたのよ」
「そのような世界は、スクールで少しだけ学習したことがあります」
アプとズコが、声を揃えて反応しました。
「いくら距離があっても行き来に大した時間が掛からず、情報を簡単に交換できる世界は広いと言える？　それとも狭い？」
「ウーッ、広いとは言いにくいかなぁ」
「そうね、情報伝達という面ではむしろ狭いかも」
ズコもアプも、歯切れの悪い応答です。
「それでは、聖徳太子が『狭い島国の中で』と言ったときの日本の広さと、千年以上も経った二十一世紀の地球とを比較したときはどうかしら？」
「自信はないけど、後者かも……」

「少なくても時間距離とか情報の早さから見たら、二十一世紀の地球の方が狭いかも知れないわね」
「そう、アプの言う通り。少し切り口を変えれば、聖徳太子が生きた時代の日本より、人類が地上から姿を消したときの地球の方が遥かに狭い、と言うことができると思うの」
千佳は、アプそしてズコの目をしっかり見て言いました。
「そうすると、狭い地球の上では争いを避けて、互いに仲良くすることが何よりも大事、ということになりますね」
「そうなのよ、ズコ。二十一世紀の人類、地上に住むことができなくなった人類は自分たちが地球という惑星に乗り合わせたクルー同士であることにうすうす気付いていたと思うの。だから争いをやめて仲良くしなければならなかったのに……」
「そうか、聖徳太子が言った『狭い島国の中で』を『狭い地球の上で』に置き換えればいいんだ！」
急き込むように言うズコに源蔵が大きく頷き、さらに訊きます。
「これまで学習してきた人類の歴史で、国や民族が対立したときには何が起こったかな？」
「大抵は武力衝突、戦争でしたね」とズコ、「強い者が弱い方を攻め滅ぼし、敗けた方は殺されたり奴隷にされたり」とアプ。
「そうだね、武力に訴えて悲惨な戦争を繰り返してきた。その背景には世界が広すぎて互いの立場を理解すること、いや相手を知ることさえできなかった、ということが考えられるね」
源蔵は、落ち着いた声で続けます。
「同じ人間であっても、肌や目の色が違うだけで差別や虐待をする。言葉や生活習慣の違い、宗教の違いなどが理解できずに、揉め事が起こるとすぐに相手を攻撃してしまう。かつての人類には『同じ人間同士』と言う認識や自覚がなかったから、互いに歩み寄って話し合うことなど、端（はな）からできるわけがなかった」
源蔵の言葉に、アプとズコはじっと耳を傾けます。
「ところが船や飛行機などの交通手段で国と国との往来が自由になり、情報通信の進歩で地上の出来事や様々な文化が世界のどこにいても共有できるようになってきた。自動車や機械、さらに音楽や映画、ゲーム等も良いもの、優れたものは瞬く間に世界の隅々にまで行き渡るように変わった。千佳さんが先ほど言ったように、地上から消える前の人類、二十一世紀に生きた人たちが住む世界は飛鳥時代の日本と比べて遥かに狭いことは明白だと思うね」
源蔵はそこまで話すと、千佳に視線を送りました。

「そのような狭い地球に住む人間、もはや哺乳動物ではなくて猛獣の仲間になった人間が戦争をしたらどうなるか、分かるわね？」
源蔵の言葉を受け、千佳が畳み掛けるように訊きます。
「それはもう滅びるしかありません」
ズコがきっぱりと答えます。
「私もそう思う。互いに鋭い牙をむき出して戦ったとしたら人類はすぐに滅びてしまうわ」
アプも、ズコに負けないくらい大きな声で言いました。
「二人ともよく理解できたようだね。それでは改めて訊くが、地球という小さな惑星で対立や揉め事が起こったときにはどうしたらよいかな？」
「それはもう話し合いで解決するしかないわ。だって人が殺し合う戦争なんてもう出来ないんだから」
「そうだよ、武力行使を禁じられたら、とことん話し合うことしか残されていない。たとえどんなに時間が掛かったとしても」
ズコが話し終えると、アプが椅子からスッと立ち上がりました。そして一際高い声を張り上げます。
「皆さん、新世界のルールの二番目が決まりました。それをこれから発表しまーす！」
源蔵夫妻とズコも、アプの発表を待ち望む表情です。
「仲良く暮らすことが大切です。揉め事はすべて話し合いで解決しなさい」
パチパチパチという拍手が、暗い洞窟の隅々に広がっていきます。

アプとズコは、紫のランニングシャツにショートパンツ姿でパーリオ邸を飛び出しました。真夏の太陽が容赦なく照りつけ、額や首筋に汗が噴き出してきます。住宅街の出口では、道端の百日紅（さるすべり）が真っ赤な花を梢に散りばめていました。
二人は西日本、関西から九州で開催されたホサピレースを転戦して、二週間ぶりにパーリオ邸に戻ってきました。二人の戦績は極めて良好で、九回の出走のうちアプが二勝、ズコは三勝を収めました。飼い主のパーリオ夫妻は多額の賞金を手に入れて大喜び。遠征から戻った翌日の外出を、快く認めてくれたのです。
街から離れた旧道に入ると両脇の樹木が枝を伸ばし、濃緑のトンネルの中を走っているようです。二人は額やこめかみから流れる汗を拭うことも忘れて、地底湖のある洞窟へと急ぎました。

洞窟の入り口に潜り込み、通い慣れたリビングに入ると源蔵が待っていました。二人は久々に会った源蔵と挨拶を交わし、濡れた足をバスタオルで丁寧に拭います。

「ほら、暖かいスープができたよ。洞窟の中はいつでも同じ気温だから外から来ると寒いくらいだろう」

源蔵が二人にスープを勧めながら訊きました。

「有難うございます。でも、ランニングで体が火照っているから洞窟の中は丁度良い涼しさです」

ズコの言葉に、アプも頷きます。

「そうか、スープも冷たい方がいいかな？」

「ハイ、できれば」

源蔵は冷蔵庫から角氷を取り出してきて、アプとズコに好きなだけ入れるようにと勧めます。

「ところで千佳さんは？」

アプが、スプーンでコップの角氷を突きながら訊きます。

「ああ、元気だよ。今朝も食事が済むと研究所に直行、お陰でワシは専業主夫というわけさ」

「へー、頑張っているんですね」

「イカタック星人に勝つ方法、それも時間を掛けず一気に、となれば一筋縄ではいかないよ」

「そうですね、うまくいくといいんだけど」

「まあ、うまくいく、うまくいくさ。そう考えないと研究は成り立たない。研究者やそれを支える者は常に楽天的でなければならん」

「そうかぁ、研究者は楽天家であることが大事なんだ」

「そうよね、私みたいに難しい、駄目かも、多分駄目ね……なんて考えていたら、前には進めなくなるもの」

「その通り。研究に限らず、新しいことに挑戦するためには楽天的であること、可能性を信じることが大切だね」

源蔵はそう言って、アプとズコをスクールに誘いました。アプが空になったテーブルのカップを片付けます。三人は暗闇の岩場を手探りするように進んでスクールの扉を開けました。お気に入りの椅子に腰を掛け、ディスプレイのスイッチを入れます。そのアプとズコの目に、『世界の宗教』というタイトルが飛び込んできました。

「今日のテーマは宗教についてだよ。今まで勉強をしたことがなかったけど、人間が生きていくためには大切なことだから、しっかり学習をしよう」

タッチパネルの操作を終えると、源蔵は二人にそう呼びかけました。

タイトルが消えた画面にギリシアのパルテノン神殿が大きく映し出

されました。そして、ギリシア時代にはゼウス、アテナイ、アポロンなど、多くの神がいたことが紹介されます。これらの神々はその後ローマに引き継がれますが、ローマ帝国はやがてキリスト教を国教に制定して、他の宗教の弾圧や排斥に取り掛かります。

画面が切り替わり、キリスト教の母体となったユダヤ教の話が出てきました。バビロンに国を滅ぼされたユダヤ人は、首都エルサレムからバビロンへと連行されます。捕虜となったユダヤ人は、祖国を失ってもユダヤ人のアイデンティティを失わないようにと、捕囚の暮しの中でユダヤ教を作り上げます。およそ六十年の後に彼らはバビロンを滅ぼしたペルシアにより解放され、祖国に戻ることを許されました。このエルサレムに帰還したバビロンの捕囚が旧約聖書を編纂して、ユダヤ教が確立したことが説明されていきます。

さらに画面は、イスラム教の世界へと進みました。イスラム教の神はアラーですが、キリスト教やユダヤ教の神と同一です。預言者はムハンマド（マホメット）で、イスラム教徒はキリスト教を不完全なものと見なしているようです。この宗教は偶像崇拝を固く禁じ、教徒として為すべき行動がこと細かく決められています。例えばメッカに向かって一日に五回、礼拝をすることや断食を年に一度行い、豚肉は絶対口にしてはいけないこと等々。イスラム教の信徒は、心の中や口だけでなく、常に信徒として具体的な行動を求められていると言います。

同じ神を信仰する三つの宗教の次は、インドで生まれ東南アジアに広がった仏教、中国の儒教、そして日本の神道が紹介されました。しかし、これらの宗教は他の宗教や宗派を攻撃することは比較的少なく、紛争や戦争の原因にもなりにくかったので、今回はその名を列挙するにとどめると言います。そして、画面は再びキリスト教を中心とした説明を始めました。

ユダヤ、キリスト、イスラムの三宗教はエホバあるいはアラーとその呼び名は違っていても、ともに同じ神を崇め、聖地も同じエルサレム。この世のすべてを創造した造物主は一つであり、それ以外の神は一切認めないという唯一一神教です。

これらの唯一一神教がローマ帝国などの国家権力と結びつくと悲惨な結果を引き起こします。十字軍は、ローマ教皇の『聖地奪還』という名のもとに多くの異教徒を殺戮し、奴隷にしてきました。また、大航海時代にはスペインやポルトガルの冒険家や軍隊と結びつき、インカやアステカの文明を壊滅して、植民地の人々をカトリック一色に染め上げてしまいます。バーミアンの石仏の破壊も、イスラム教徒が『偶像崇拝の禁止』という教義を行動に移したまでで、破壊にかかわった教徒に罪の意識はないでしょう。

一方、宗教には経典があります。ユダヤは旧約聖書、キリストは新約聖書、イスラムはコーランです。しかし、経典がつくられたのはいずれも古い時代であるため、後世に起こることのすべてについては書かれていません。たとえば堕胎や人工授精、臓器移植は良いか悪いか、などです。そこで聖職者は、教典から推測するとこうなる……という解釈を求められ、この解釈が宗派を生み出します。もっとも典型的な宗派は、キリスト教におけるカトリックとプロテスタント。この両者は長いあいだ激しく対立して、宗教戦争を引き起こしたことも少なくありません。宗派の対立では、イスラム教におけるシーア派とスンニ派も民族の違いとも相まって相容れないものがあります。

このように宗教は信仰する神の違いや宗派の違いで、数多くの紛争や戦争を引き起こしてきました。神そのものは、人間は仲良く平和に暮らすように説いているにもかかわらず、実際には神の名のもとに、あるいは教義の解釈をめぐる宗派の対立により、悲惨な争いを繰り返してきたと言えるでしょう。そして、二十一世紀の終わりに勃発した世界核戦争もまた、その発端は宗教と民族の対立にあったことを画面は説明していきます。

瞬く間に二時間近くが経過して、学習プログラムが終了しました。この日は源蔵もその場にとどまり、アプとズコの隣で視聴をしていました。その源蔵が、アプたちに声を掛けます。

「今日はいつもより時間が長かったけど、どうだったかな？　一応、世界の主な宗教を学習したことになるが」

「実にいろいろな宗教があるものですね」とズコが感嘆の声を上げ、

「何で宗教なんて必要なの？　戦争や揉め事の原因になってきたのなら、いっそのこと無い方がいいんじゃない」とアプが疑問を投げかけます。

「うむ、アプの疑問はとても重要だね。でも、よく考えてごらん。人間はとても弱い存在で、いつも何かに寄り添っていたいとか縋（すが）りつきたい、と思うものではないかな」

「確かに、そういうこともありますね」とズコ。

「君たちも家畜としてこの世に生まれてきて、偶然、地下で生き延びた私と千佳に出遭った。そして、いま人間について学習しているけど、それは君たちの意思でやっていることかな？」

「いいえ、僕らは決して家畜なんかに生まれてきたくはなかった」

「そうだよね。人間は自らの出生についても、己の意志ではどうにもならない。それに将来のことも全く不明だ。将来と云わず、明日のこ

とさえ正確には予測できない」
「確かにそうだわ。私たちがこのまま大人になれるか、そして人間の世界を取り戻せるか、それはまったく分からないことだもの」とアプ。
「そうだろう、だから何かを信じ、何かに寄り添っていたいと思うのは自然のことだ」と源蔵。
「でも、僕は平気さ。自分を信じて生きて行くよ」
「ウム、それはそれでいい。だがなズコ、今は元気でも病気になったらどうする？　体が思うように動かなくなったとしたら」
「そんなこと考えらない、考えたくもない！」
「そうだね、元気でいればいいが、人間は何時でも健康でいられるとは限らない。心を病むことだってあるだろう。それに私らのように歳をとれば肉体は衰え、やがては死を迎える」
「そんなこと、いまは考えたくないよ！」
「そうだろう、ズコはとても正直だ。ズコのように人間はみんな弱い存在で、自分が生まれてきたことも死ぬことも思うようにはならない。だから弱い自分より強い確かなもの、ゆるぎないものを信じたいと思うことは自然なことだよ」
「そうだわ、私たちはここで源蔵さんと千佳さんに会って、色々なことを学ぶことがとても楽しいし、生甲斐にもなっている。でも、何時かは源蔵さんや千佳さんに会えなくなってしまう日が来るように思うわ。もし、そうなったらどうしよう」
　アプは表情を曇らせ、不安な表情で天井を見上げます。
「アプは鋭いな、実に察しがいい。ワシと千佳さんは先が短いし、いずれ君たちに会えなくなる日は必ずやってくる。そのときに備えて君たちが信じられるもの、頼れるものを作るために、いまの学習があるとも言えるのだ」
「ということは教典？　新世界の教典を作ろうとしているわけ？」
　ズコが、源蔵の目をしっかり見据えて訊きます。
「そう、そう思っても構わない。まず君たち二人が教典をしっかり身につけて、次に新世界で生きてゆく若者たちに教えていく」
「ウーン、言っていることは分かるけど、雲を掴むような話だね」
「確かにズコの言う通りかも知れない。でもここは信じたい、新世界が必ず訪れ、そこで人類が再び栄えることを心底から信じ、祈っている！」
「源蔵さんが祈っている？　一体、何に対して？」
「ウム、この洞窟とそれを包み込む深い山々。私らを三百年ものあいだ守り続けてくれたこの自然の要塞を私らに与えてくれた神に」
「神を信じている、と言うんですね」

「そう、日本には大昔から神道という宗教があって、山や川、大きな岩や樹木といったものには神が宿ると考え、信仰した。八百万（やおよろず）の神、なんて言うこともあるが、ワシの信仰はそれに近いものだね」
「へー、悟りきったように見える源蔵さんにも神様があるんだ」
「そうとも、人間を超越した神の存在を信じることは大切なことだよ」
「千佳さんはどうかしら？　やっぱり神様を信じているのかな？」
「それはどうかわからんけど、アプから直接、千佳さんに訊いてみたら」
「そうね、本人から聞くのが一番だわ」
　そのような次第で、三人はスクールを出てリビングに向かいました。

「お疲れさま、いま、お茶を入れますからね。あれ、今日はひどく真剣な顔をして、一体、どうしたの？」
　昼どきでリビングに戻っていた千佳が、開口一番に訊きます。
「あの、お茶の前に、訊きたいことがあるんです」
　アプとズコの申し出に、彼女は浮かせかかった腰を椅子に沈めます。
「あのぉ、唐突なことをお尋ねしますが、千佳さんは神を信じていますか？」
「あらまあ、突然のことで返答に窮すけど、信じていないとは言えないかも知れないわねぇ」
「歯切れが悪いですが、信じているということですか？」
　ズコが念を押すように訊きます。
「一日に何回もお祈りをしたり、日曜には教会に行ったりはしないけど、心の中には神様がいますよ」
「それはどのようなものですか？」
「そう訊かれると答えにくいけど、日本古来の神道（しんとう）に近いものかしら」
「この洞窟を包む深い山々に宿っている神様、ですか？」
「そうね、アプの言っている通りかも知れないわ。でも、何故アプはそれを？」
「源蔵さんがそう教えてくれたから。やはり千佳さんも同じなんだ」
「そう、今日はスクールで宗教の勉強をしてきたのね。それで、私や源蔵さんが神様を信じているかどうかが疑問になった、というわけね」
　千佳は合点がいったという表情で話を続けます。
「それじゃ、人類が地上から姿を消す前の話を少ししましょう。日本には神道という大昔からの宗教があって、その神道の流れが生活に深

く染み込んでいたの。例えば、新年を迎えるときは近くの神社に出掛け、神前での結婚式や安産祈願、新生児が生まれればお宮参り、三、五、七歳には通過儀式の七五三。さらに家を新築するときの地鎮祭や上棟式など、事あるごとにお参りやお祓いをしていたの。だけど、多くの人は宗教との結びつきを余り意識していなかったようだわね」

千佳の話に、源蔵が続けます。

「生活に密着した行事のほかに、言霊（ことだま）や怨霊（おんれい）などにみられる霊の存在とお祓（はら）いは神道に由来したものだ。言葉には霊が宿るという言霊思想は生活に染みついていて、不吉な言葉は不幸を招くと言う感覚を日本人は常に持っている。生まれてきた子供の名前をつける時には不吉な名前は決して付けない。厄年（やくどし）の厄払（やくばらい）いなどは多くの日本人が必ずと言っていいほど行っている」

「そうですわね、天神様は菅原道真の祟（たた）りが京の都に災（わざわ）いをもたらしたと恐れられ、怨霊を鎮魂するために建立されたけど、そのような神社は他にもたくさんあったようだわね」

千佳が、源蔵に合わせて言葉を添えます。

「さらに、穢（けが）れと禊（みそぎ）なども神道独自のものだね。例えば毎日使っている箸は自分のものでなければ気が済まないが、スプーンやフォークは構わない。日本人は他人の箸には穢れがあると感じるのだろう。さらに『水に流す』という感覚も日本独自のもので、穢れをきれいな水で清める、あるいは禊をするという感覚も神道からのもの。この感覚から、広島と長崎に原爆を投下したアメリカの戦争責任に対して、日本人は『過ぎたことは水に流して、前向きの関係を』と考える。しかし、この考え方を隣国の韓国や中国に期待してもそうはいかない。結果として、何時までも水に流そうとはしない韓国や中国がいやらしく感じられてならない……ということになる」

源蔵は、卑近な例を挙げて話を進めます。

「でも、少しおかしいよ！　日本は仏教の国だと学習してきたもの」

ズコが、千佳と源蔵の話に異議を唱えました。

「ズコが言うことにも一理はあるなぁ。確かに日本人に仏教はよく浸透しているが、それは古来の神道に仏教が取り込まれたものだと思うよ。八百万の神を認める日本人は、良いものがあれば何だって取り入れてしまう。その一つが仏教であり、その後には儒教、さらに近年で

はキリスト教。クリスマスなどは完全に年末の行事になっていたからね」

源蔵の説明に、ズコはまだ納得できないという表情です。

「例えば、お盆に先祖の霊を家に迎えて、坊さんが檀家の仏壇に経をあげる風習がひろく残っていた。ところが輪廻転生（りんねてんしょう）が根本思想の仏教に、霊というものは存在しない。これは日本に導入された仏教が、日本古来の神道に妥協して、霊の存在を認めてしまったということになるね。また、日本人は都合よく葬儀や先祖の供養だけに仏教をうまく取り入れ、日常の生活には神道を、と言う二刀流のようなところもあると思うよ」

源蔵の説明に、ズコが確かめるように訊き返します。

「それって、神道と仏教が混じり合った宗教？」

「そうだね、その言い方も正しいだろう。でもワシは、日本人の根本はやはり神道にあると思っている。先ほどの聖徳太子の和をもって貴しという考えにも神道の影響があるし、大震災のときに略奪などは起こらず、互に食べ物を分け合ったりすることにも関係があると思うな」

「まあまあ皆さん、宗教の論議は始めると果てしないから、この辺でピリオドを打ちましょうよ。私たちはいま、新しい世界のルールを作ろうとしているんでしょう。だからあまり深く入り込むのは止めましょう」

千佳が、加熱した議論を収めるように提案しました。

「そうだな、アプとズコには納得がいかないかも知れんが、人間には宗教が必要だと言うことを認めてほしい」

「はい。形はどうあれ、人間には心の拠りどころになるもの、信じるものが要るということは理解できます」

アプとズコは、共に源蔵の提案を受け入れます。

「一日に何回も祈祷しなければならないものから、宗教だとは意識しないほど深く生活に染み込んだものまでいろいろあるが、人には信仰が、神を信じることが大切だよ」

源蔵は、同じことを繰り返し強調しました。

「だけど、宗教であれば何でも良いと言うわけにはいかないわね」

千佳が、源蔵の言葉に条件付けを促します。

「他の宗教や他の宗派を攻撃したり、排斥したりするものは駄目だ。異教徒や宗派の異なる人を傷つけたり殺したりする宗教も認められない」

源蔵は、断じるように言い切りました。

「そうすると、新世界における三つ目のルールが決まりそうね」

結論を示唆する千佳の言葉に、アプとズコも賛同する雰囲気です。それを確かめ、源蔵が大きな声で言います。

「神を信じることは大切です。しかし、他の神や宗派を認め、これを尊重し、共存することが前提になります」

リビングにパチパチパチと大きな拍手が起こりました。

〈以下次号〉

（注）宗教に関連した部分は、次の書籍を参考にしました。

井沢元彦著　世界の［宗教と戦争］講座　徳間書店

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に２回発行する等の文芸活動を行う。

・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。

・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。

・会員は、年会費２千円を負担する。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。

・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。

・作品の長さについては特に規定しないが、１回に掲載できる枚数は、原稿用紙で１００枚以内とする。

・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

青い実り（第三話・水子観音）

唐瀬　光

プロローグ

紅い夕焼け雲が、あざやかに山の稜線から立ち昇っている。

ここ高尾山の麓にある舞鶴（まいづる）女学園では、今日一日の活動を終えた生徒たちが三々五々、学校や森のキャンプ場から自分たちのねぐらに帰って行くところだ。『帰る』と言っても家族の待っている自分の家に帰宅するのではない。校舎の裏手に連なっている女子寮に戻るのだ。

ここは中学校と高校を合わせた全寮制の女学園。夏休みなどの長期休暇や、法事などの特別な事情を除いては、実家での寝泊まりは許されない。

日曜、祭日など授業のない日は昼間だけ校外に出ることができるが、学校の許可が必要だ。それがないと警備員が常駐している校門を通過できない。勝手に塀を越えようとしても、その高さは人の背丈の四、五倍。塀の上には赤外線センサーが張りめぐらせてあり、とても超えられるものではない。ここは外部から切り離された別世界。

ぼくは寮の屋上から黄金色に染まった地上を眺めながら、今日一日の出来事を振り返っていた。

この学園と同じ敷地内に建つ尼僧院。その寺院（翔鶴院（しょうかくいん））の住職代理を務めている菖蒲尼（しょうぶに）様が、森の中で腕に赤子を抱いたお地蔵様の供

養をしていた光景。

キャンプ場で昼食を共にした生徒会長の高城智世（たかじょうともよ）が「僕」とか「君」とか男言葉を使っていたという驚き。その彼女から生徒会の補助員にならないかと誘われたが、それを書記である二年生の葵（あおい）さんが激しく拒否していた場面。

もともと今日のデートは、ぼくの恋人である葵さんと日見子（ひみこ）（女子だけの学内夫婦）の間柄になるべく、彼女にプロポーズするという大いなる目的があったのだが、すんでのところで無邪気な女子中学生たちに邪魔された。

葵さん……卵型の顔、黒く大きな瞳、健康そうな小麦色の肌。入学以来ずうっと（と言っても、まだ二ヶ月も経っていないが）あこがれ続けて来た年上の人を、するりとこの手から逃がしてしまった。

（くそ、チューボーめ！　もう少しのところを……）

ぼくは屋上の手すりにもたれながら、悔しさのあまり校庭をうごめくやや幼い顔の少女たちに向かって毒づくことしきり。

ぼく……おっと自己紹介がまだだった。名前を立花芯（たちばなしん）という。もちろん立花が性で、名が芯だ。男のような響きだが戸籍上は『こころ』と読む。だが誰もそう呼んではくれない。皆『シン』で済ましている。名付けた親たちも、当のぼく自身も。

もっとも、こちらの呼び方が、ぼくにピッタリ来る。『こころ』と呼ばれては、なんだか女になったようで気持ちが悪い。

女生徒なのに「なぜ女の名では気持ち悪いのか」と問われれば、ぼくは身体の形状は女性だが、脳は男性の構造をしている。すなわち男として性を自認しているので、感じ方、考え方が男性と同じ。胎児だった頃のホルモン異常が原因らしい。自分のことを『ぼく』とか『オレ』なんて言っているのもそのせいなのだ。

世間では障害者などと言われ、ぼく自身も中学校までは周囲に適応できず、かなり悩んだものだが、この女子校に入学してからは、ずいぶん気が楽になった。なにせここの世界では、生徒はもちろん、先生から用務員まで皆女性。比較する性別がない。

（それに、忙しい！）

この学園の教育方針、文武両道に従って、クラブ活動は中学からやっている柔道を、文系は得意の美術を取った。それに入学早々、クラスの副委員長に選ばれたりして多忙を極め、深刻に悩む暇がない。

友達もたくさんできた。恋人の葵さんはもちろんのこと、寮で同室の尾鈴美雪（おすずみゆき）（愛称、お雪（ゆき））。「宮（みや）」と呼ばれる学年一の美人、赤木宮子（あかぎみやこ）。

それに、かわいい顔をしていながら、ぼくと同じ男脳の七島蘭（ななしまらん）。副寮長で剣道部と生物部の副部長を兼務。暴れん坊で副ばかりつくから

『鬼の副長』と呼ばれている。葵さんと同じ一学年上の先輩だ。
これら友人に囲まれて『生まれて初めて』と言える楽しい学園生活を満喫していた。

水子観音（みずこかんのん）

1

「えーっ、キスもなかったって！」
ルームメイトのお雪は、そばかすを散りばめた丸い顔を仰け反らすと、（あきれた）という表情をつくった。
その晩『お雪ママ』のしつこさに負けて、今日、葵さんとのデート中にあった出来事をポツリ、ポツリとご報告申し上げていた。
「ふーん、それって、変よねえ……」
一部始終を聞き終わると、彼女は腕組みをして考え込む。
「単にタイミングが悪かっただけだよ。もうちょっとのところで、ウサギが出たり、チューボーに邪魔されたり」
森の中で葵さんの手を取ってプロポーズしようとした寸前にウサギが飛び出して来て、そのかわいらしさに彼女はぼくを放り出して追いかけて行った。また、帰りの道中に最後のチャンスとばかりキスしようとしたところを、通りがかりの女子中学生たちに揶揄（やゆ）され、その雰囲気が崩れてしまった。
ぼくは（あれさえなければ）と悔やむことしきり。
「いや、それだけじゃない……と、思う」
「じゃあ、なんだってんだよ」
「うーん、難しいわねえ。でも、なにかある。あたしたちの知らないなにかが……」
お雪はあごに手を当てて、しきりに首をひねっている。
「おいおい、ここは平和な女子校だぞ。なにも変なこと、あるわけないだろう」
「うーっ、引っかかるのよねえ。このあたりに」
彼女は「うーっ、うーっ」とうなりながら、もどかしそうに自分のこめかみを指でつつく。
「まず始めから、一つ一つ事件を追ってみましょう」
『お雪探偵』は手を後ろに組み、狭い室内をクマのように歩きまわりながら、一人深刻そうに考え込んでいる。
（事件なんか、なぁんにもなかったって）
ぼくはあほらしくなって、彼女のベッドにゴロンと横になった。

「まず、葵様が私服で来たってことよ。特にその青いスカートね。あの方は飾り気のない人。制服以外のスカートなんかめったに穿かない。それ、新しく見えたのでしょう。新調したのよ、きっと。葵様がシンとのデートにおしゃれをした。なぜか？」

少女探偵は人差し指をピタッとぼくの額に向けた。

「あんたにプロポーズされると思ったからよ。そして彼女はそれを受けるつもりだった。でも途中で気が変わった。……いや、気持ちに迷いが出た、ということかしら。『キャンプ場に行こう』と誘ったのも、ウサギを追いかけたのも、プロポーズを避けるためよ。……なぜか？」

（『なぜか？』って言われてもなあ……人の気持なんか、わかりっこねえ）

「やはり、あれね。あんたが途中で菖蒲尼様に出会ったこと。その辺が引っかかるわねえ……」

彼女はツインテールの髪を指先でひねりながら、一人ぶつぶつとつぶやく。

「菖蒲尼様に出会ったのは偶然だって。そのことで葵さんが嫉妬したとでも言うのか。五十近くのオバサンだぞ、あの方は。いくら姿が美しくて、三十代にしか見えないとしても」

「うん、嫉妬の線はないわね。さすがに」

「あたり前だ」

「ではまず、最初の登場人物、菖蒲尼様を検証してみましょう」

お雪は丸い頭を傾けて、ひたすら推理に没頭している。

「あの方は森の中で、お地蔵様の供養をしていた。石の像を水で洗い、まわりを奇麗に掃除していた。あの森には同じようなお地蔵様がいくつもあるのに、その像だけを丁寧に扱っていた。なぜか？」

「それは、その地蔵さんが、あの人にとって大切なものだからさ。言ってたぜ、昔ここで流産した女がいたと。その人、きっと菖蒲尼様の友達かなんかだろう」

「うーん、その線はあるかも。でも友達だからって、そこまでする？十年も二十年も」

「親友だったのだろう」

「親友ねえ……ひょっとしたら……」

「ひょっとしたら、なんだよ？」

「菖蒲尼様ご本人だったりして。そして流産したって子は……」

彼女はアゴに手を当てて考え込む。

「ばかな！　あの方は貞淑な尼さんだぞ。そんなこと、あるわけないだろう」

「シン、あんた甘い！　人は変わるものよ。菖蒲尼様だって、三十年

前は若い乙女だったの。恋もしたでしょう。つき合った男の一人や二人いたって、おかしくないわよ」
お雪はバカにしたような顔で、ぼくを見おろした。
「それから、これも気になるわねえ。菖蒲尼様があんたを見た時の驚き様。いつも冷静なあの方が、水桶を落とすほど取りみだすかしら」
「一心にお祈りをしていたから、びっくりしたのさ。誰もいないと思っている所に、突然人が現れたら驚くだろう。普通……」
「まあ、そうね。だけどあの方は、年季を積んだ茶人よ。人がいたぐらいで、驚いたりしないと思うな。幽霊ならともかく」
「でも、薄暗い森の中だぜ。普段は誰もいないだろう」
「違うわ。あの森には生徒がよく出入りするの。下草が刈られていて歩きやすいでしょう。山岳部や園芸部はもちろん、恋人たちもね。あそこが『日見子の森』って呼ばれているの、知ってるでしょう。だから、急に人が出たって驚くようなことじゃないわね」
お雪はフムフムと一人でうなずく。そして、ぼくの寝転んでいるベッドの縁に腰かける。
「よし、次にキャンプ場に目を移してみましょう」
彼女は、思考の対象を変えようとするかのように頭を左右に振る。ツインテールの髪束がぼくの頬をかすめるように飛んで来る。あわてて顔を引き、紙一重の差でよけた。
「キャンプ場？　なにもなかったぞ。智世様が男のような言葉でしゃべっていた以外は」
「そう、その智世様よ」
「今度は、あの生徒会長があやしいってか」
ぼくは（ついて行けない）というふうに両手を広げた。
「智世様の語り方は関係ないと思う。なぜってあの方は男言葉と女言葉を上手に使い分けるの。態度だってコロッと変えるわ」
「葵さんから聞いたよ。なんでも脳を切り替える訓練をしているとか」
「そう、男は女に比べて右脳と左脳を繋ぐ脳梁（のうりょう）が細いらしい。だから議論する時、感情抜きで冷静な判断ができると言われているわ。で、自分でそこを操作できるようになったらいい、ということで、世田谷の女子大でそういう研究をしているそうよ。考える時には感情分野の右脳を切り離して左脳だけを使う。楽しむ時には繋いで右脳を、というふうに」
「そんなことが、ほんとうにできるのかい。眉つばだな」
「あたしもわからない。でも智世様の、あの変わり様には驚くわ。あんたもそのうち見ると思うけど……」
お雪は「本題に戻りましょう」と、そこで話を事件の解明に移した。

「智世様の頭の構造は置いといて、問題は、あんたを生徒会に誘ったことね」
ねこ柄のパジャマに身を包んだお雪は、足をぶらぶらさせながら推理を再開する。
「人手不足だって言ってたぞ。生徒会の仕事は忙しいのだろう」
「それなら、あんたでなくてもいいじゃない。引っかかるのは、あの方が『めったな者には任せられない。その点、この子なら大丈夫』と言ったこと。なぜ、シンなら大丈夫なのかなあ？　あんたよりしっかりしてる子は、たくさんいるのにね」
その言い方にカチンと来たが黙っていた。こういう時に彼女の思考をじゃましてはいけないのだ。
「なぜ、あんたならいいのか。ほかに、できる子はいっぱい……」
また言った。
（ああそうですよ。どうせ、オレはチャランポランな性格ですよぅ。誘ったのは、智世様の気まぐれですぅ～）
いじけてみたが、彼女は一向に気にした様子はない。相変わらず足をぶらぶらさせて「ああでもない、こうでもない」とつぶやいている。
ぼくのすぐそばに、お雪の丸いお尻がある。身体が小柄な割には大きく、ほんのりと色香をまとっている。
ふと魔が差したように、そのお尻に触ってみたくなった。だがそんなことをすれば、廊下に叩き出されるのがオチだ。彼女に嫌われたらこの学園ではやっていけない。すんでのところで、あわてて手を引く。
（でも、お雪は無防備すぎる）
ぼくが男の目線で見ているのを知りながら、目の前で平気で着替えたりする。その度に視線をそらして意識を別の方に向けているのだが。
「シン！　聞いてるの？」
ハッと我に返ると、お雪がぼくの顔を見おろしている。
「ハ、ハイ！」
思わず声が裏返った。
「だから、潜入捜査をすべきだと言ってるのよ」
「せ、潜入……どこに？」
「やっぱり、聞いてなかったじゃない！」
彼女はベッドから飛び降りると、クルリと反転し、腕組みしてぼくを睨みつける。
「ボーッとして、変ににやけて、なに考えてたのよ！」
「な、なにも考えてません。誓って、ほんと、マジ！」
「必死に否定するところが、あやしい」

疑い深〜い目をして、ぼくを見つめる。
「しつこいなあ、なにも考えてないって言ってるだろう。疲れてウトウトしていただけだよ。それより、潜入捜査ってなんだ。誰がどこに潜入する？　なにを調べるんだ？」
ぼくは開き直って、ふてぶてしい態度に変えた。
お雪はフンと鼻を鳴らすと「まあ、いいわ」とつぶやいた。
「あんたが生徒会に潜入するの。調べるのは、葵様の不可思議な態度」
「えっ、葵さんの態度と生徒会？　それが、どうつながるんだ」
「それはあたしの勘。直感よ」
「お雪の勘で、生徒会を調べるのかよ」
『『お雪の』とはなによ。あたしの読みは当たるの。あそこには個人情報が集まっている。洗えばなにかわかるはずよ」
彼女はアゴを上げて自信ありげに断言した。
「だったら、葵さんに直接聞いた方が早いんじゃないか」
ぼくの顔には（なんで、そんなまわりくどいことを……）という表情が出ていたに違いない。
「あんたバカじゃない。当の本人に向かって『自分のプロポーズから逃げる理由を教えてください』って言うつもりなの？」
あきれた顔でぼくを見おろす。
「それで生徒会に潜入か。でも入れてくれるかなあ。確かに智世様は『手伝ってくれ』と言ったけどな。あれは冗談だったりして……」
「まあ、あたしが直接聞いた話じゃないからね。でも智世様って、そんな冗談は言わない人よ。それ、本気だったと思うわ」
一年生のお雪に（なぜ雲上人である生徒会長の心がわかるのか）と不思議に思ったが、彼女がＦ組の委員長なのを思い出して納得した。クラスの代表として、会長の智世様とかかわりがあるのだろう。
「でも、葵さんは反対していたぜ。オレが葵さんを無視して入っちゃあ、まずいだろう」
「もちろん、葵様には事前に話を通しておかなくちゃ」
「ダメと言うに決まってる」
「そんなこと、お話してみなければわからないじゃない。反対されても言いくるめるのよ、なんのかんのと。あんた、そういうの得意でしょう」
「人を詐欺師みたいに言うな！」
お雪の無遠慮な言い方にムカッと来て、怒鳴りつけてやった。
「いい、あたしはあんたに幸せになって欲しいから言ってるの。自分のことだから、ちょっとは考えてよね」
イライラした様子でぼくをねめつける。

「はいはい、わかりゃした。やりゃいいんだろう、やりゃあ」
ぼくは指の爪を噛みながら仏頂面で答えた。捜査とはいえ、生徒会のお手伝いをするなんて、なんとも気が重い。
ふと見上げると、お雪が腕組みして、ぼくを睨んでいる。
「ん？　なんだぁ」
「どいて、そこ！　もう寝るの」

2

翌日、制服を着たまま昼食を済ますと、その姿で柔道部のある武道館に行った。部活を終えたら、そのまま生徒会に顔を出すつもりなのだ。このコンクリート三階建ての棟には剣道部以外の武道クラブ（空手、柔道、合気道、ボクシング、レスリング等）が入っている。
柔道を終え、道衣からセーラー服に着替えているのを、葵さん始め部員たちが奇異な目で眺めている。ぼくが制服のまま道場に現れたのは今日が初めてだ。
着替えを済ますと、出口の所で葵さんを待つ。仲間の部員たちは意味ありげな挨拶をして次の部活に向かう。
この学園では文武両道を教育の指針としている。それは文字通り、生徒のひとりひとりが文と武の両方を究めるというもので、クラブ活動も、文化系と体育系の両方を取らなければならない。
正規の授業は朝七時半から始まって、十二時半に終わる。それ以後の授業はもうない。昼食時を過ぎると、すぐにクラブ活動だ。それも体育系と文化系の二つをかけ持ちする。生徒会などの活動はその後に行うので、とても忙しい。校舎と同じ敷地内に自分の宿舎がある全寮制学園だからできるカリキュラムなのだろう。
待つこと数分、葵さんが出て来た。黒いセーラー服がいつもよく似合っている。彼女と一緒に階段を下りて裏の校庭に出る。
いつもならここで、ぼくは美術部が入っている文化棟のある東に、葵さんは園芸部のある資材倉庫へと別れるのだが、今日は彼女にくっついて西の方に向かった。
「なに、どうしたの？」
しばらく歩いて生徒たちの姿が見えなくなったところで、葵さんが振り向く。
「あのさ、オレ、あの話を受けてみようかと……」
ボソボソと切り出す。
「あの話って？」
「だから、ほら、昨日、智世様が言った……」

「えっ、生徒会を手伝うこと？　本気なの？」
彼女は一瞬ポカンとした表情を見せた。
「ええ、智世様が冗談で言ったのじゃなければ、ぜひ」
「智世は本気だと思うけど……でも、なんで？　柔道も美術も生徒会もじゃ大変よ。役員なら文化系は免除されるけど、あなたの場合はそうじゃないでしょう。お手伝いの補助員、単なるボランティアなんだから」
予想通り乗り気でない。
「大変なら、葵さんも同じでしょう。柔道と園芸部をかけ持ちしているんだから」
「わたしの場合は、どちらもやりたいから」
「自分もです。やれますよ。大丈夫！」
ドーンと胸を張る。
「でも、急にどうして？　ん！　智世に気があるとか？　背が高くて美人だからねぇ、彼女……」
葵さんの顔が曇る。
「まさか！　オレが好きなのは、葵さん、あなただけですよ。生徒会で働きたいのも、あなたがいるからです。オレ、あなたと一緒になにかしたい。道場では、話なんかできないじゃありませんか。そこで、生徒会なら」
（決まった！）
ところが彼女は「うーん」とうつむいて考え込む。
（なんだ、殺し文句のはずが……）
『これで、コロリと来ない女はいない』
そうお雪は請け合ったのだが。
「そうねえ……どうしてもと言うのなら……まあ、ねえ……」
（なんだ、この「……」は？）
葵さんはあれこれ考えていたが、やがて思い直したようにぼくの顔を見つめた。
「まあ、しかたないか。ただし、勝手な真似はしないでよ。あそこはいろいろと難しいの。わたしか智世、または美里（みさと）。それ以外の人をまともに信じちゃだめよ。何事も自分でよく考えて行動しなさい」
彼女はそう言い残して、資材倉庫の方に歩いて行く。頭の後ろで二つに分けた長いおさげの髪が、腰のところでゆらゆら揺れている。
その日、二回目のクラブ活動、美術が終わると、さっそく三階の生徒会室に下りて行った。会議室の方から入ってみると、前髪を眉のところで切り揃えた女生徒が一人、テーブルの上で薄っぺらな書類をめ

くっている。彼女の長い黒髪はつややかに輝き、すっぽりと肩をおおっている。

（クレオパトラだ！）

本名は秋月貴子。剣道部の部長であり、学園の寮長でもある彼女は、常に生徒会長の高城智世と張り合っている。智世様がローマ帝国の皇女を表す『アウグスタ』なのに対し、この人は、ローマに対抗したエジプトの女王『クレオパトラ』に位置付けられている。

いずれも学園を二分する勢力の頭領であり、その敵対する遠因は昨年末の生徒会選挙にあるという。

その選挙に、秋月貴子は副会長に剣道部副部長の七島蘭、書記に指南役の宮浦朋江を当て、さっそうと立候補した。

これに対して、日頃から学内一の勢力を誇り［剣武館］という独自の道場棟を持つ剣道部を快く思っていないほかの武道クラブが連合して対抗する。すなわち生徒会長に空手部の高城智世、副会長に合気道の一ツ葉美里、書記に柔道部の伊東葵を立て、激しい選挙戦を展開した。

結果は、小差で高城組の勝利。だが、それだけでは終わらなかった。秋月貴子は再起をかけて翌月の寮長選挙に出馬。有効な対抗馬を立てられなかった武道連合に勝った。それ以来、武道館組が学校を、剣道部が寮を支配するといういびつな形になっている。

クレオパトラこと秋月貴子。ぼくはこの人とは一度も話したことがない。なんだか近寄りがたい雰囲気なのだ。お高くとまっているわけではないが。

「失礼します！」

一礼すると、顔を上げた彼女と目が合った。切れ長の眉、少し吊り上った目尻。メイクすれば、本物のクレオパトラより美しいかも知れない。

「あら、あなたは確か一年の……」

「はい、一年E組の副委員長をやっております。立花芯です」

ペコリとお辞儀する。

「覚えています。クラス委員の懇談会で目立っていましたから。葵や蘭の、お友達だそうですね」

そう言って、にっこりほほ笑む。

（へええ、けっこう優しそうじゃん）

まとった鎧が、スッと消えて行くのを感じた。

「どうしたの？　葵ならまだ来てないけど」

「いえ、葵さんでなく、生徒会長に」

「智世に？　なにかしら……ん、ひょっとして、乗り換えた？」

「まさか、そんなんじゃありません！」
「ほほほっ、冗談よ。ああ、赤くなっちゃって。色男を気取っている割にはウブなこと」
「誰が、色男ですか！」
ぼくは憤慨して、恐れ多くも寮の最高権力者を睨みつけた。
「悪い、悪い。ちょっとからかってみただけよ。蘭の言ってた通り、おもしろい子だこと」
彼女は口元に手を当てて「おーっ、ほほほっ」とわざとらしく女王様のような笑い声を上げた。
彼女の「おもしろい子」といういい方に、いささかムッと来たが、言い返せばますますからかわれるだけなので、なんとか押さえて平静を装った。
生徒会室は普通の教室を二つ繋いだものだ。一方を会議室に、片方を事務室に使っている。繋ぎの壁にドアが一つついており、廊下に出なくても、二つの部屋を行き来できるようになっている。
会議室には貴子様が一人だけだ。隣の事務室からは、なんの物音も聞こえない。
「誰もいないのですか」
「留守のようよ。私も今来たばかりで、よくわからないけどね。おそらく、宮の店ではないかしら」
「宮の店……」
『宮の店』と言ったら、五階にある［カフェ鶴の舞］のことだ。調理部の運営している喫茶店で、一年生部員の赤木宮子が、そこでウェイトレスをやっているから、そう呼ばれるようになった。彼女は美人で愛想がよくテキパキしていると、大変評判がいい。
宮は体育系の部活はレスリング、文化系は調理部に所属している。ほかにE組のクラス委員長もしているから、けっこう忙しそうだ。
「あそこは、智世グループの溜まり場なの。いつも取り巻きを連れて飲みに行くわ」
「えっ、『飲みに』ですか。まさか！」
「バカねえ。お酒じゃないよ」
彼女はあきれ顔でぼくを眺めた。
「ところで、あなた、智世になんの用？」
彼女の顔が、心なしか警戒しているように見えた。
「生徒会を手伝うように言われまして」
「ふうん、そう、ついにお声がかかったの。やはり……」
なにか引っかかるような言い方をして、ぼくの顔をまじまじと見つめる。

「なんでも、人手が足りないそうで」
それを聞くと彼女は薄く笑った。
「確かに生徒会は、三役と七委員会の長で構成されている。十人しかいないから、これでは少しきついね。そこでお手伝いの補助員を入れているのだけど。考えてごらん、各委員会には副がいる。それでも足りなければクラス委員を動員すれば済むことだし、人手ならいくらでも集まるわ。でも智世はそうしない。なぜかと言えば生徒会を自分の腹心で固めたいわけよ」
貴子様の顔が次第に険しくなる。
「私は寮委員会の長だけど、仕事は全部、智世と取り巻きだけでやっている。私のもとには『ハイ、これが決定事項です。サインだけください』って、こういう出来上がった書類がまわって来るだけ！」
彼女は（憤まんやり方ない！）というふうに、手にしていた書類を机に叩きつけた。
「なぜ抗議しないんです？　貴子様も生徒会の役員なのに」
「言ってるわよ。でも私の言葉なんか、聞く耳持たずってとこね。なにせ、こちらは選挙に負けた身だからね」
彼女は頬杖をついて溜息をもらした。その丸くなった背中がなんとなく寂しそうだ。いつも真っ直ぐ背筋を伸ばし、女王のような威厳を保っている寮長の意外な内面を見て、ぼくはかなり驚いた。
考えてみると、男でも女でも組織というものには、権力闘争がつきものだ。去年の生徒会選挙に敗れたことは、プライドの高い貴子様にとって、大変な屈辱だったのだろう。顔には出さず、表面はなんでもないように取りつくろっているが。
その時、廊下から賑やかな笑い声が響いた。
「帰って来た」
彼女はたちまち背筋をピンと立て、女王の風格に戻った。
建てつけの悪い引き戸がガタガタと開いて、智世様を先頭に、五、六人の生徒が入って来た。副会長の美里様もいる。ぼくらを見るとピタリとおしゃべりをやめた。
「わあぁ、シン君じゃない。来てくれたんだ。うれしい～」
智世様は両手のこぶしを胸の前に合わせ「きゃー」と黄色い声を上げた。
ぼくはその様子に唖然とした。確かに智世様ご本人だが、昨日の男性的な彼女とはまるで別人のようだ。
「ねえ見て、この子、一年のシン君。葵のカレ。今度から生徒会をお手伝いしてくれるの。仲よくしてね～ぇ」

取り巻きの女生徒たちに、なよなよとした声でぼくを紹介する。
「誰が、わたしのカレだって！」
その時事務室のドアがバタンと開いて、中から葵さんが出て来た。
彼女は不機嫌そうに眉間にしわを寄せている。
「あぁら葵、いたの～ぉ。なんで隠れてるのよぉ。立ち聞きなんて品のないこと。あなたらしくもなぁ～い」
「わたしは今、前の方から入って来たの。隠れてなんかいないよ。立ち聞きなんかしなくても、智世の声は廊下まで聞こえている。それより、その、なよっとした声、なんとかしてくれない。虫唾（むしず）が走るわ」
葵さんはあきれた様子で、腕組みをしながら智世様を睨みつけた。
「あお～い、きつ～ぃこと言わないでよ～ぉ。あたし、これでも精一杯女らしくしているのだからさぁ」
言いながら身体をくねらす智世様。
「女らしくしなくてもいいから、生徒会長らしくしてくれない。これじゃまるでお笑い番組だわ」
葵さんはそんなキツーイ言葉を投げつけると、ツカツカとこちらにやって来て、ぼくの肩に手をかけた。
「智世、シンを補助員にするのはいいけど、わたし専属ってことにしてね。あなたには、とても任せられない」
それからコソッとぼくの耳にささやいた。
「さっき、わたしが言った忠告、少し訂正するね。信じていいのは、わたしと美里だけよ。智世は、はずすからね」
小さな声だったが、近くにいたクレオパトラには聞こえたらしい。
「ぐびっ！」と奇妙な声をもらした。その声で智世様は、そこにいる寮長の貴子様に（初めて気がついた！）と、そんなそぶりを見せた。
「ああら、貴子いたのぉ。早いのねぇ。会議は五時からよ～ぉ。みんなまだ来てないわよぅ」
相変わらずなよなよした声で話しかける。
「私はクソ真面目だからね。ちゃんと資料に目を通しておかないと、気が済まないのよ」
「そうぉ、なんだか、あたしが不真面目だと言われているような気もするけどぉ……。まあいいわ、その企画よくできているでしょう。これで来月もバッチリだわよねぇ」
「なにが、バッチリよ！　なにが、よくできているよ！　こんないい加減な企画書、見たこともない。おおかた、あなたの取り巻きに作らせたのでしょうけど」
彼女は顔を真っ赤にして怒る。
「貴子ぉ、こわぁい。そんな顔しないで～ぇ。心臓が止まりそ～ぅ。

意見があるなら会議で言ってくれなぁ〜ぃ。それ、単に『案』なのよ。決めるのは、会議のメンバーなのぅ」

智世様は「おお怖かった」と両手を胸に交差させた。

「ふん、単なる案がいつも無修正で通るじゃない。役員の過半数を押さえているからね、あなたは。私がなにを言っても無駄なのよ」

彼女はあきらめたように首を横に振った。

やがてほかの役員が次々とやって来る。会計長の美巳（みみ）様も現れた。

彼女からは、この前、翔鶴院の茶会で厳しい指導を受けたばかりだ。あの時のことを覚えていたのか、彼女はその長い首でぼくをとらえると、驚いたように口をOの字に丸めた。それからニヤリと笑って葵さんの隣にかける。

みんながそろったところで会議が始まった。隣の事務室では、補助員たちが書類の整理やお茶の支度などを始めている。

ボーッと突っ立っていると、台所の二年生に手招きされた。そばに行くと「会議の人にお茶を」と湯呑茶碗がいくつか載った木製の盆が渡された。ぼくは茶など出した経験がないので、まごまごしていると、ついて来るように言う。彼女も湯呑を載せた盆を手にしている。

会議室に入ってみると、すでに議論白熱の様子。質問しているのは寮長の貴子様。彼女は中央の席に構えている智世様を睨みつけながら話しているが、答えているのはなぜか美里様。葵さんはさかんにボールペンをノートに走らせ、美巳様は難しそうな顔をして腕組みなんかしている。

先輩補助員に奥の方を配ってくれと言われたので、こぼさないようにソロソロ歩いていると、室内が急に静かになった。変に思って周囲に目を向けると、みんながぼくの方を見ている。葵さんなんか筆記の手を止めて口をあんぐりと開けている。

（確か、偉い人から配るのだな）

宮が調理部の喫茶店でやっている姿を思い浮かべる。

まず生徒会長の智世様の所に行って湯呑を置き「ごゆっくりどうぞ」とやったら、彼女は驚いたように振り向いた。

次に副会長の美里様の前に置いて同じように言うと「くすっ！」と笑われた。

その次は葵さん。湯呑を置いて、さあ言おうとしたら「それ、黙って置くの。『ごゆっくり』はいらないのよ」と耳元でささやかれた。

小さな声だったがシーンとした室内、しっかりみんなに聞こえたようだ。たちまち会場が「どっ！」とわいた。机にひれ伏す者、椅子から転げ落ちる者、爆笑はしばらくやまなかった。

ぼくは恥ずかしさに頬から湯気を吹きそうになった。残りをさっさと配り終えて、早々に事務室に引っ込もうとした。

「みんな静かに！」

その時、智世様が立ち上がってみんなを制し、ぼくの所にやって来た。その姿は先ほどの『なよなよ』したものではなく、凛々しい若者のように見える。

彼女はぼくの肩に手をまわして、みんなの方を向かせた。

「紹介しよう。こちらは今日から生徒会を手伝ってくれる立花シン君だ。一年生としては最初の補助員になる。よろしく頼む」

智世様にうながされ、居並ぶ生徒会の役員たちに向かって挨拶した。

「はっ、はい。一年E組の立花芯です。縁あってこちらに就職……いや、加入させてもらうことになりました。よろしくお願いします」

声がうわずり、しどろもどろになる。

『就職』がおもしろかったのか、笑いと拍手が入りまじって起る。

「給料は出ないよ！」

誰かの声が勢いよく飛んで来た。

こうして無事生徒会に潜入した。だが、探せどもなんら秘密めいたことは見つからず、毎晩お雪をがっかりさせる結果になった。

また、生徒会の仕事は楽なものではないと、身にしみて感じた。毎日夕方遅くまで書類の整理や走り使いをやらされる。それに、生徒会長の智世様と来たら……。

智世様は『アポロンのように気高く、マリア様のように優しいお方』だと、生徒たちに崇拝されているが、ぼくは大いに疑問を持った。

彼女は日常の業務を美里様や葵さんに任せっぱなしにして、自分は本棚で囲った自称『会長室』にこもり、囲碁クラブから連れて来た補助員を相手に、日がな一日囲碁に興じていたりする。時々額に青筋を立てた葵さんが「智世！」と怒鳴り込んでいた。

始めの内は、二年生の葵さんが三年の智世様や美里様を同じ生徒会の役員とはいえタメロで話し、名前を呼び捨てにしている場面に違和感を覚えたものだが、慣れて来るとそうでもなくなった。

この三人は中学一年の頃には同級生だったという。葵さんが大病を患って留年したせいで一年違いになっているが、元々仲良し三人組という間柄なのだろう。

智世様の言動については、ある日こんなこともあった。

夕食を終わって寮の自室でくつろいでいると、二年生の補助員が呼びに来た。「すぐ来てほしい」と言う。生徒会室に駆けつけてみると、

机の上に書類が山のように積まれていた。数人の生徒が忙しそうに働いている。
現場を仕切っている智世様がぼくに指示する。
「このパンフレットを明日全校生徒に配るのだ。君、済まないが、これを数えてホチキスで留め、クラス別に分けてくれないか」
「えっ、これをですか！　そんな……」
「なあに、四、五時間もあればできるだろう」
こともなげにサラッと言う。
「よ、夜中になるじゃないですか。困ります。宿題とかあるし」
「君、宿題なんて朝チョチョとやれば終わるものさ。それより、こちらの方が大事だ。君も生徒会のメンバーなら、当然やってくれるね」
（悪魔か、コイツ）
「でも、自分は葵さんの専属ですから。葵さんからなにも聞いていないし……」
「もちろん、これは葵も承知の上さ。考えてもみたまえ、葵は僕や美里と一体で選挙に当選したのだ。葵の言うことは僕の言うこと。僕の言うことは葵の言うこと。わかるかい？」
「はあ……」
なんだか、煙に巻かれたような気がするのだが……。
「そう、わかってくれたの。うれし～ぃ。シン君って、とおっても賢いのね」
一変して慈悲深いマリア様のような微笑みを向けられると「はい、わかりました」と言ってしまうから不思議だ。
彼女はぼくたちに大量の仕事を押し付けると、後方で仕分け作業をしている美里様に声をかけた。
「美里、後は皆に任せて、お風呂に行こう」
誘われた美里様は仕事中の生徒たちを見まわしながら、愛嬌のあるタヌキ顔をゆがめて「でも……だし……」とつぶやいている。
「美里、今度の日曜日に新宿に行かないか。御苑を散歩しよう。二人だけで」
そう言われると彼女は頬を赤らめて、うれしそうについて行った。
（あやしい。日見子の仲とはいえ、プラトニックな関係だと聞いているが……）
後からやって来た葵さんにこのことを話したら「智世のやつ、調子いいんだから！」と湯気を立てて怒っていた。
とはいえ、生徒会はけっこう楽しかった。同じ補助員の上級生とも仲良くなれたし、各委員会のメンバーとも顔見知りになれた。
それに、なにより葵さんといる時間が長い。毎日デートしているよ

うなものだ。二人きりになる時もしばしばある。でも、一週間たち二週間たっても、まだ葵さんにプロポーズができない。彼女は二人で仕事をしている時には楽しそうなのに、いざ、その雰囲気になるとスルリと逃げるのだ。

ぼくはあせった。（どうしても彼女と日見子になりたい）という思いが日に日に強くなる。

3

季節が変わって夏になった。

六月に入ると学園中に白い花が咲く。制服が一斉に夏用にかわるのだ。上着は白い半袖。セーラーカラーの黒い色はそのままだが、布が薄くなって風通しがいい。スカートも同じだ。だが夏といっても六月の梅雨時。薄い半袖ではまだ肌寒い。

その日は生徒会に顔を出さず、文化系クラブの美術を終えると、そのまま文化棟を後にした。今日葵さんは非番、ぼくは彼女の専属だから当然出なくてもよい。外を歩いていると、校庭を吹き抜ける冷たい風にブルッと身体が震えた。

ぼくは腕組みして縮こまりながら、講堂の方へと急ぐ。講堂裏の小さな庭に立っている地蔵仏、そこが葵さんとの待ち合わせ場所だ。

そう、これから彼女とデートなのだ。今日は生徒会の仕事をしないのだから制服でなくてもよいのだが、先月、いつものジャージを着ていたら蘭先輩に「ダサイ」と言われた。それからは、デートの時には制服かジーンズを身につけた。今回は文化棟の美術室から直行したので制服のままだ。ジーンズでは校舎の中に入れない。

今日は衣替えの初日。腕組みして背中を丸めているのは寒さのせいもあるが、恥ずかしい気持ちもかなりあるのだ。みんな同じ制服を着ているのに恥ずかしいなんて変な話だが、ぼくはこのセーラー服というやつになかなかなじめない。『セーラー服＝女生徒』という観念が、どうしても頭から抜けない。いくら『この女学園が世界だ。人類とはこの学園にいる者だけ』と思えといっても、なかなかそう簡単に割り切れるものではない。

それに、この白いシャツは時々肌が透けて見える。他人のを見ているぶんには、密かな楽しみもあるが。

講堂裏に着いてみると、葵さんはもう来ていた。手持無沙汰とみえて、靴の先で地面になにやら文字らしきものを書いている。ぼくの姿を見ると胸のところで小さく手を振った。彼女も夏の制服。まるで白

いバラの大輪が咲いているようだ。
「葵さん、その夏服とても似合いますね。奇麗です、素敵です、美しいです」
褒め上げると、彼女はシャツの脇を摑んで「ふふふっ」と恥ずかしそうに笑った。
「あなただって、なかなかよ。白い天使みたい」
彼女の言葉に自得心をくすぐられる思いがした。
今朝、登校前にドレッサーを覗いてみたが、そこに映っている背の高い中性的な少女は、自分で言うのもなんだが、白い天使のように見えた。天使とは、男でも女でもない性別を越えた聖なる存在だという。
「天使は買いかぶり過ぎですよ。さあ行きましょう」
照れ隠しに「さあ、さあ」と葵さんの腕を取って歩き出す。
部活を終えて寮に帰る生徒たちが、意味ありげな笑みを見せながら通り過ぎて行く。ぼくと葵さんは彼女たちとは逆に、森の方へ向かって歩いた。急に空が曇って来たが一時間もすれば戻るつもりだったので、特に気にしなかった。今は一年中で一番日が長い季節、ここ山麓の地でも七時ぐらいまで明るい。時間は充分あるのだ。
途中から道を外れて森の中に入る。ぼくは葵さんを先導しながら、記憶を頼りに木々の間を縫うように歩く。ところが歩いているうちに道がわからなくなった。（あっちでもない、こっちでもない）と探しまわって、ようやく見覚えのある場所に出た。
「見つけた！」
笹藪の手前に、赤ん坊を抱いた白い石の地蔵が立っている。
「水子観音（みずこかんのん）ね」
葵さんがささやくように言う。
近づいてみると、周囲の地面には奇麗な箒の後が円を描くように残っていた。像の両脇にある竹の花立てには、小さな額紫陽花（がくあじさい）が一房ずつ挿してある。
葵さんはその石像をあちこち触っていたが、やがて腕を組んで考え込む。時が止まったようにそのままじっと動かない。薄暗い森の中で、セーラー服の白い上衣が妖精のように輝いている。
「やはり、そうよね」
彼女が唐突に声を出す。
ぼくは「そうよね」の「そう」の意味するところがわからず首をかしげた。
「この像は、菖蒲尼様が彫ったものよ。あの方は石で彫刻をなさるの。わたし翔鶴院で見たことある。このノミの跡がそっくり」
彼女は指先で観音像をなでた。

なるほど像の表面には、なにか鋭い刃物で削った跡が幾筋も見える。完全に研磨されてはいないようだ。

「それに、この観音様のお顔をよく見てごらん。誰かに似ているとは思わない？」

そう言われて改めて石像の顔に目を移す。そして「あっ！」と声を上げた。

（似てる。いや、そっくりだ。菖蒲尼様に……）

「どういうことです？　ここで流産した女って、まさか！」

検分するように、像のあちこちを触った。裏側にまわってみると観音像の載っている台座に苔が付着している。苔の切れ目になにか文字らしきものが見える。指先でこすって、文字のくぼみをたどった。それは『芯人』と読めた。

「芯、だって？」

驚いて葵さんを振り返る。

彼女も指で文字をなぞった。さらに苔がはげる。そこには昭和の年号が刻まれていた。今から三十年ぐらい昔だ。

「きっと流産した子よ。それに、これ戒名じゃないね。この子の本名だわ」

「でも、自分と同じ字だ。そんな！」

先月に催されたお茶会の後で、菖蒲尼様に見せられた写真を思い出した。彼女が学生の頃に撮られたもので、そこには三人の人物が写っていた。彼女と妹（現理事長）の間で笑っている青年は、なんとぼくの親父だった。

（三十年前って、菖蒲尼様は高校生。親父は大学生。二人の家は近かった……）

物思いにふけっていると、時間の経つのも忘れた。気がつくと空は黒い雲におおわれ、あたりには夕闇が迫っていた。

（もう戻らなければ）

そう思って声をかけようとした時、突然辺りが真っ白に光った。同時に激しい地響きがして、ぼくはカエルのように跳び上がった。

（雷だ！）

続いて二度三度、光と音が間近で炸裂する。

（夕立が来る。急がなければ）

葵さんを見ると、両耳を押さえてしゃがみ込んでいる。腕を引っ張って立たせようとしたが、身体が硬直したように縮こまっている。

「葵さん、雨が来ますよ。早く帰りましょう。大丈夫、たかが雷じゃないですか」

なだめたりすかしたりしたが、テコでも動きそうにない。そのうち

シャワーのような激しい雨が降って来た。
石像の母子に目を移すと、それは間断なく起こる雷光を受けて白銀にきらめいていた。
その時、ふっと赤子の目が輝き、ぼくに笑いかけたような気がした。意識がふわりと浮き上がる。だが激しく降る雨に叩かれて、すぐ現実に引き戻された。
ずぶ濡れになりながら葵さんを無理やり立たせ、雨宿りの場所を探す。少し坂を上がると、一本の太い老木が立っていた。折れたのか幹の中ほどから上がない。でもまだ生きているようだ。幾本かの小枝が残った幹から生えている。その根元に大きな穴を見つけた。二、三人が楽に入れそうな木の洞(うろ)だ。ぼくは彼女を抱きかかえるようにしてその中へ転がり込んだ。
洞の中はいくばくかの温もりが感じられた。誰かが掃除でもしているのか、木の屑もクモの巣もない。外では絶え間なく雷が鳴り、豪雨が降り注いでいるが、一段高くなった所にあるこの穴には入って来ない。ようやく安堵の息をついた。
だが今度は濡れた上着が肌に張りついて、とても気持ちが悪い。ぼくはセーラー服の上衣を脱いで両手でギューッと絞り、バタバタと振って水を落とした。それから洞内の出張ったところにかける。スカートも同じようにする。下着は、それほどひどくは濡れていなかったので、身につけたままにした。
「シン、なにしてるの……」
葵さんのか細い声が聞こえた。声のする方を見ると、彼女は洞の隅にぼんやりとうずくまっている。
「濡れたので乾かしているんです。気持ち悪いでしょう、葵さんもそうしたら。オレ、手伝ってあげますよ」
そう言いながら近づくと、彼女は「いや！」と叫んで、また縮こまってしまった。だが雷光に浮き上がるその青白い顔は、寒そうにガチガチと歯を鳴らしている。ぼくは再度服を脱ぐように勧める。
「このままじゃ風邪ひきますよ。なにも変なことはしませんから」
ぼくは葵さんの上衣に手をかけ、脇のファスナーを開いて無理やり剥ぎ取った。スカートも横の留め金を外し、裾を引っ張って脱がせる。そして同じように水を絞って洞の中に干す。
迷ったのは頭の後ろで二つに束ねたおさげの髪だ。腰まで届くくらい長いので、途中ところどころ輪ゴムで留めてある。その二本の髪束もたっぷり水を吸って、いかにも重そうだ。輪ゴムを外してばらばらにしようかとも思ったが、今度は束ねるのが大変そうだ。髪をばらし

たまま寮に帰れば、なにがあったのかと、生徒たちにあやしまれるのは目に見えている。
（ええい、ままよ！）
ぼくはその黒い髪束を両手で掴むと、ギューッとねじって水をしぼり出した。もう一本も同じようにする。

稲妻が走る度に、葵さんの下着姿が生々しく浮き上がる。スリップの濡れたところから、彼女の肌が透けて見える。その色香に頭がクラリとした。葵さんの裸身は寮の風呂場で見たことがあるが、全裸より下着姿の方がぐっとなまめかしい。
狭い洞の中で終始二人の肌が触れ合っている。たまらず手を伸ばして引き寄せ、唇を奪う。彼女は始めのうちイヤイヤしていたが、きつく抱きしめると抵抗をやめて身体をゆだねて来た。
それからずいぶん長い間そうしていたように思う。気がついてみると雷の音はせず、雨も止んでいる。腕時計の青白い液晶を透かして見ると、もう八時を過ぎている。なんと、あれから二時間も経っていた。
葵さんはぐったりとぼくの肩にもたれている。その身体はとても柔らかく温かい。いつまでもこうしていたかったが、もう寮に戻らなければお雪たちが心配するだろう。ぼくはポンポンと彼女の背中を叩く。
「葵さん、葵さん、そろそろ帰りましょう。雨も上がったようですし」
耳元にささやくと、彼女は（ん？）という表情で顔を上げた。そして、いきなりぼくを突き飛ばした。勢い洞の壁に後頭部をぶつけて、目から火が出た。
「なにするの！」
痛む頭に、彼女の怒声が降って来た。
「な、なんですか。いきなり！」
負けずに言い返す。
「葵さんが雨に打たれて『寒い、寒い』って言うから、温めてあげてたんじゃないですか」
（ウソだけど）
「それを、はねのけるなんて、ひどいじゃないですか！」
肩を掴んで強く揺する。
「シン、あなたなの？」
葵さんは呆けたような声を出した。そして自分の額に手を当てる。
「ああっ思い出した。突然雷が鳴って、頭が真っ白になって、あなたにここに連れ込まれたのは覚えている。それから、どうしたのか……記憶があいまいなの。誰かにずうっと口を吸われていたような気がするけど……夢だったのかなぁ」

思わずドキリとした。また、突き飛ばされてはかなわない。
「そ、そう、夢、夢ですよ。夢に決まってるじゃないですか。ここは大きな木の中ですから、木の精でも、見たんですよ。きっと」
「そう……気のせい、かしらねえ……」
葵さんはなんとなく腑に落ちないようだったが、それ以上突っ込んでは来なかった。
それから二人して、まだ湿っているセーラー服を身につけると、洞を出た。雨はすっかり上がって、先ほどまで低く垂れこめていた雨雲はどこかへ去り、空には丸い月が顔を出している。
木立の中には胸に赤子を抱いた水子観音が、なんだが寂しそうな顔で立っている。ぼくは先ほどの心霊現象がまた起こらないかと、その赤子を注視したが、その顔は元のおだやかな石像に戻っていた。
地面はぬかるんでおり、ぼくは何度か滑って転んだ。葵さんは藪や木の枝を上手に避けながら、ぼくを先導するように森の中を歩いて行く。なるほどここは園芸部の庭みたいなものだ。正気を取り戻した彼女は、やはり頼もしい。寮につながる小道に出て一息つくと、並んで歩きながら、そっと彼女の手を握った。
やがて出発点の講堂裏に出る。そこにはもう誰の姿も見えない。明るい月の光が赤松の枝を透して射し込み、隅の方にちょこんと立っている古い地蔵の顔を照らしているだけだ。
その地蔵仏の前で、どちらからともなく立ち止る。月の光に浮かび上がる葵さんの端正な顔が青く輝いている。
引き寄せられるように彼女の腕を取る。心臓が震えた。
「葵さん……オレと、一緒になって……もらえませんか」
声がかすれてやっと言葉になった。
「それって……プロポーズ？」
彼女は、まん丸い目をしてぼくを見つめた。
「もちろんです。自分の見子（みこ）になってください。お願いします」
今度はしっかり言えた。
だが葵さんは「うーん……」と額に手を当てて考え込む。
「オレ、申込みましたからね。受けてください。お願いします」
次第に哀願調になったが、彼女は相変わらず「うーん」を繰り返している。
（オレでは釣り合わないのか……それを気にしているのか……）
ふと疑いの心が胸の隙間に入り込んで来た。
「年下だから嫌なんですか？　それとも別に……」
詰め寄ると、葵さんは「うーん」をやめ、正面からぼくの目を見つ

めた。
「年下だからなんて、これっぽっちも思っていないよ。わたしには、あなた以外にいるはずないじゃない。でも、一晩だけ考えさせてくれない。一晩でいいから」
拝むように言うので、不承不承うなずく。
「では、明日の朝六時にここにいますから」
細い一本の糸にすがるような思いがした。
「わかった。朝六時にここで待ち合わせね。そこで答えればいいのね」
「一つお願いがあります。イエスだったら、白い夏服で来てください。もしノーなら黒い冬服で。それだけです」
「あはっ！　それって映画のシーンみたい。あれは黄色いハンカチだったけど」
彼女はこれまで見せたことのない、こぼれるような笑顔でぼくを見つめた。

4

寮の玄関に数人の人影が心配そうに立っていた。背の高いの、低いの。その中には中学生ぐらいのあどけない顔もまじっている。ツインテールのお雪や、葵さんと同室の美貴先輩の姿も見える。
「あっ、帰って来た！」
一人の子がぼくたちを見つけて指差す。
「でも、びっちょ濡れ」
別の子が口をあんぐりとする。
「あんたたち、どうしたのさ。その姿！」
背の高い美貴先輩が驚きの声を上げた。
「シン、どうしたの。葵様と喧嘩でもした？　雨の中で」
辛辣な言葉は、言わずと知れたお雪の声だ。
「誰が喧嘩するか！　森で夕立に遭ったんだ。そんで、今まで雨宿りしてたの」
「ふうん、でも泥だらけ」
「滑ったり転んだりしたからな。ねっ、そうですよね」
隣の葵さんに同意を求めると、彼女はなにか考え事をしている様子で上の空だった。
「とにかく、身体を洗って着替えよう。そんなんじゃ風邪ひくよ」
美貴先輩がうながす。
そこで葵さんは美貴さんに連れられて寮の二階へ。ぼくはお雪と一緒に一階の自室に向かう。

部屋のシャワーを浴びてパジャマに着替えると、猛烈に空腹を感じた。食堂や売店はもう閉まっているので、お雪から缶詰や乾パンをもらって食べた。彼女が「大地震に備えるため」とか言って、しこたま蓄えている非常食だ。

「ねえ、どこで雨宿りしていたのよ」

ぼくが食べ終わるのを待ってたように、さっそく聞いて来た。

「木の洞を見つけたんだ。大きな洞。菖蒲尼様が供養していた地蔵……いや、観音様の近くにあった」

「あっ、それ、熊の穴だわ」

「知ってるのか」

「中学の時、野外授業で見たの。なんでも昔、熊さんの一家が住んでいたんだって。確かにあそこなら雨宿りできるわ。でも変ねえ。雨は一時間ぐらいで上がったのに、あんたたちが帰って来たのは九時過ぎよ。それまでずうっと穴の中にいたの？　二人だけで？　いったいなにしてたの？」

お雪はいつもの興味津々という顔に戻っていた。

（コイツに隠し事は無理だ）

そう思ったので、今日の出来事をかいつまんで話した。

「よかったじゃない！　プロポーズできて」

彼女は手を叩いて歓声を上げる。

「なにがよかっただ。返事は保留だぞ。明日の朝まで」

「まあ、しかたないわね。葵様ぐらいのお立場になれば、いろいろ考えることもあるのよ。でも、あの方はうれしかったと思う。あんたを好きなのは見え見えだもの。大丈夫、自信を持ちなさい、自信を」

お雪は胸を張って断言した。

でも、そのように「大丈夫」と言われると、ますます心配になるから不思議だ。葵さんがちゅうちょした理由がわからず、もんもんとしてその夜を過ごした。

彼女が最後にこぼれるような笑みを見せながら言った『黄色いハンカチ』とは、高倉健主演の『幸福の黄色いハンカチ』のことだろう。山田洋次監督の映画で、ぼくは小学六年の時に親父の借りて来たビデオで見た。

黄色いハンカチが家の前の高い旗竿に何十枚もはためいているシーンは今でもはっきり目に焼きついており、子供心に涙を流して感動したのを覚えている。ぼくも黄色いハンカチ……いや、しあわせの白いバラを手にすることができるのだろうか。

翌朝まだ暗いうちに起きて、ベリーショートの髪を丁寧にセットす

る。ぼくが部屋の灯りをつけてゴソゴソやっているのに、お雪はぐっすり寝込んで時々寝言などつぶやいている。

「いい気なもんだ。他人事だと思って……」

ぶつぶつ言いながら、予備のセーラー服に着替える。昨日と同じ半袖の夏服だ。でもまだ肌寒い。腕組みして背中を丸めながら、もうすっかり明るくなった校庭に出た。

時計を計って十五分前に講堂裏に行く。生垣の破れ目から中学校の庭に入り、ヒイラギ木犀（もくせい）の下に身を潜める。棘のついた葉の隙間から地蔵の立っている庭を覗く。

もし葵さんが黒い冬服を着て来たら、そのままそうっと立ち去るつもりだった。

約束の六時になった。心臓がドクドク音を立てる。

五分過ぎた……来ない。

十分過ぎた……まだ来ない。

朝練の中学生たちが、不審な顔をして通り過ぎる。中には立ち止って後ろに立っているヤツもいる。

十五分過ぎた……来ない。

（生徒会の役員ともあろう者が、イエス、ノーも言わず、逃げたのか）

次第に怒りが湧いて来た。

と、後ろにいる一人に肩をつつかれた。

（うるさい！）

ぼくは怖い顔で振り向き、そいつを睨みつけた。

「あっ！」

相手の顔を見て声を上げた。とたんにバランスを崩して背中から生垣に倒れ込む。むき出しの腕にヒイラギ木犀の棘がチクチク刺さる。

「シン、大丈夫？」

目の前に待ち人の驚く顔があった。彼女の着ている制服の上着は、軽やかに白く輝いていた。

「葵さん！」

ぼくはピョンと跳ね起きて、彼女に抱きついた。

「イエスですね！　見子になってくれるんですね！」

感激のあまり胸が震えた。そのままキスしようとしたら、両手で止められた。

（えっ、なんで？）

首を傾けると、彼女はそっと左右を指差した。

まわりを見て（げっ！）となった。もの珍しげな顔をした少女たちに、ぐるりと取り巻かれているではないか。

（チュ、チューボーだ！）

チューボーは苦手、天敵。反射的に腰を引く。
先週、葵さんへプロポーズしようとした絶好の機会を女子中学生どもに邪魔された。それ以来、女子中生がトラウマになっている。
葵さんはそんなぼくをやさしく抱き寄せると、頬に軽くキスをした。
周囲から一斉に拍手が起こる。
（えっ、歓迎？　チューボーが？）
その中から背の高い少女が一人、前に出て来た。先週、キャンプ場で葵さんを始め生徒会の三役と食事を共にしていた時、みんなのサインを求めに来た子だ。両手に一輪ずつ、黄色い野花を持っている。
「おめでとうございます」
少女は顔を紅潮させて、葵さんとぼくにその花を差し出した。
「ありがとう。とても素敵な、お花ね」
葵さんはその小さな花を胸のポケットに挿した。ぼくもあわてて同じようにする。
すると今度はフラッシュが光った。
それに答えるかのように、葵さんがぼくの肩に手をまわす。彼女は、なにかを吹っ切ったような、すがすがしい顔をしていた。
（第三話了・続きは第四話で）

一発逆転の夢

畑中康郎

山中和夫と井本慎二は同じ高校を卒業し、本条電子工業に同時に入社した。中堅の電子部品メーカーである。

高校では、山中の方が成績は遥かによかった。クラス委員などを務め、いつもクラスの中心として活動した。先生方の評判もよく目立つ生徒だった。

一方、井本の方は成績も下位で目立たない男であった。それにまったくの不勉強だった。ズルイところがあり、試験のときになると山中に頭を下げてきた。カンニングペーパーを回せというのである。試験に立ち会ったのは担任だったが、すでに年老いており見回ってカンニングをチェックする気もなかった。井本はそれに乗じた。

気弱で人がいいうえに級友たちの評判を気にした山中は、言われるままにペーパーを回した。その度に井本に対する軽蔑の度は増したが、それは自分自身の不甲斐なさに対する不満でもあった。

井本はよく言ったものだ。

「勉強なんかしてどうする？　社会に出たらそんなもの少しも役立たないよ」

端から大学に行く気がないから、落第しなければよいと考えているのだ。井本はそれでよかったが、山中はまだそのとき進学の夢を捨てていなかった。

「俺は大学に行く。大学でもっといろいろなことを学ぶんだ。お前なんかと違うんだよ、俺は」

「ふん、お前なんか学歴が欲しくて行くんだろう。レッテルが欲しいだけなんだよ。学歴を利用して社会で楽をして出世したいと思っている。俺は実力で世間を渡るんだ。勉強なんてムダだ」

しかし、そんな山中も結局は家庭の事情で進学を断念した。そして高校卒業後、偶然同じ会社に職を得ることになったのだ。山中はそんな男と一緒の会社になったことが悔しかった。それなら自分はもっといい会社に就職できたはずだ、と思った。

ところが、入社後に社内の配属先がわかったとき、山中は溜飲を下げた。山中が総務部であったのに対し、井本は工場の作業員であったからだ。当時のホワイトカラーとブルーカラーの違いである。

『やはり成績の違いはこんなところに出るものだ。ザマを見ろ』

五年が過ぎた。山中は総務部の仕事にやりがいを覚えていた。仕事は正確で早かった。決められた手順を実行することが彼は得意である。当然上司の覚えはよかった。

それに対し、井本は製造現場でいつも上司とぶつかっていた。上司は従来のやり方が正しいと考えるのか、合理化のための改善に消極的だった。これまで上手く行ったのだから、どうしてやり方を変える必要があるのか、と考える。井本はそういう上司が嫌いだった。製造現場のやり方は、時間が経つに従がって常に変えなければならないと信じていた。時には上司を怒鳴りつけることさえあった。序列をまったく無視し敬意の欠片もなかったから、当然上司と言い争いになる。上司は彼を配置換えしたかったが、換える場所がなかった。言い換えるなら、どこにも彼を採ってくれる部署がなかったのである。

井本の評判は常に悪かった。昇進昇格にあたっての評価は常に最低だった。

山中はそんな井本の評判を聞く度に、このまま冷や飯を食い続ければいいんだ、馬鹿な奴だと思った。序列に従い、上司の言うとおりにルールと既存のやり方を守っていれば評価は必然的に高くなる。

ところが、世の中は捨てる神があれば、拾う神もある。それは山中と井本が二十五歳をわずかに過ぎるころのことであった。

工場の中をたまたまひとりで視察していた取締役製造部長が、井本と上司のやりとりを柱の陰で聞いた。あまりに大きな声で怒鳴り合っていたので、聞きたくなくても聞こえてしまったのである。

それは井本がよく行なう改善提案であった。製造ラインでの部品

の位置と人の動き方に少し工夫を加えたもので、その工夫により製造時間の短縮になると主張した。

それを聞いた役員は、むしろ井本の言い分の方に理があるかもしれないと思い、後で井本だけを役員室に呼び入れた。詳しく彼の考え方を質したのである。

その結果、井本のやり方に合理性があると考えた役員は、従来のやり方と井本が考えるやり方の二通りの方法をラインで競わせることにした。すると、井本の方法が従来の方法よりも、電子部品一個あたり五十銭のコストダウンになることがわかった。一日あたり百万個の製造だから、一日にトータル五十万円のコストダウンである。

これで井本の評価は急騰した。上司を差し置き、その製造ラインは井本に任されることになった。だが彼はその程度の成功で満足するような男ではなかった。さらに次々と新しいアイデアを製造ラインで試した。役員も井本の手腕を評価し、新しいアイデアの導入に反対しなかった。

役員を後ろ盾に意をますます強くしたのか、井本は工場の中で力を持ち始めた。いよいよ独断で仕事を変え始めたのである。

仕事というものは不思議なものである。一度定着したやり方に人は何の問題点も見出せなくなるものらしい。問題点があってもそれを問題と思わなくなる。安心してしまうからだ。改善点はいくらでもあった。井本はそれを発見し改善していくのがおもしろくて、どんどん実行した。それに対し誰も反対の意を唱える者がいなくなった。

工場の様子を聞いた山中は、次第に井本を嫉妬し始めた。高校時代にはまったく目立たなかった男が、この会社では上司を尻目にやりたい放題なのはどういうことか。社会に出たなら、奴のようなやり方が出世の近道なのだろうか。しかし自分には到底、井本の真似はできないと思った。アイデアも実行力もそして勇気もない。

父親の教えでは、『出る杭は打たれる』。それが山中の体に浸み込んだ教訓であった。

井本が大きな失敗を犯し、再び日陰の存在に戻るよう願わざるを得なかった。

☆

山中には、入社以来好きになった女性がいた。同じ総務部の松園慶子である。

彼女はいつも穏やかであった。自分を主張しない。そしていつも

他人の話に熱心に耳を傾けた。それは見せかけではなかった。話す人の立場に立ってじっくりと聞く。そして最後に自分の意見を二言三言告げる。だがそれはいつも的確だった。話を聞いてもらった人からはいつも感謝され、自然と相談役のような立場になった。山中には、彼女が自分にないものを持つ素晴らしい人に思えた。上品なうえに知的な美しさがあり、それも彼の憧れであった。

しかし毎日顔を合わせるが、親しい口を利いたことはなかった。高嶺の花と思っていたから、彼の手に届くはずもない。

憧れは、憧れに止めておくべきだ。告白しても彼女に迷惑をかけ、自分の申し出を彼女がどう断るか思い煩わせるだけだ。憧れはずっと自分の心の裡に秘めておくべきだ、と思った。

ところが、あるとき噂を耳にしてしまった。あの井本が猛然と慶子にアタックをかけているというのだ。とんでもないことだと思った。あんな男に彼女を奪われてたまるか。他人を押しのけ、ただ自分の思うままに進むような男が彼女に相応しいはずがない。

だが女性は熱心に心を傾けてくる男に弱いものだという。そうかもしれない。好きなのか、嫌いなのか、何も言葉にできないような男に女性は魅力を感じない。そして強い男に魅力を感じるものだ。彼女も自分なんかより井本の押しの強さに軍配を上げるに違いなかった。このままではだめだ。彼女の心が井本に奪われないうちに、自分の存在をアピールしておかなければならない。

井本は二十六のときに係長に昇進した。彼の他に係長としての適任者はいなかったのだ。彼をコントロールできる現場の責任者はいない。課長は完全に無視され、部長でさえも遠慮しながら物を言っている。勿論、昇進を超された工場の同僚や先輩たちが、彼に意見を言うだけの力はなかった。いまや飛ぶ鳥を落とす勢いなのだ。恐いものなしだ。それに、何と言っても役員がバックについている。

その井本が慶子にアタックをかけている。山中はひどい気後れを感じた。彼女が井本に気持ちを奪われるのは時間の問題と思った。だから山中は焦った。だが、どうしても彼女の前に足を踏みだせない。話しかけることもできないのである。自分はなんて情けない男なのか、井本の前に何をすることもなく敗れ去るのか。

しかも悪いことに、山中は先日、井本と慶子が会社の傍の喫茶店から二人して仲よく出てくるところを目撃してしまった。それでますます元気を失くした。

会社内での地位を勢いのあるものにしている井本。それに引き替え今の自分は何者なのだ？　現在の総務部で係長になる可能性はな

い。その兆しさえもない。慶子が選ぶのは、井本のような覇気と将来性のある男に決まっている。

総務部で同じ事務室にいる山中と慶子。愛を感じている女性が自分のほんの目の前にいるのに、話しかけることもできない。そんなもどかしさと切なさが続いた。相変わらず、仕事のことしか話せない。

彼女を見ることは自分の不甲斐なさを毎日のように自覚することだった。この状態を脱するには、山中が他部署に配置換えになるか、彼女が結婚するかして職場を去ることしかない。

その彼女がきょうも元気な笑顔を見せている。年齢は山中と同じだから二十六だ。高卒で入社して八年目であった。

後から入社した若手の女子社員が何人かいた。高度成長期で元気のあったこの時代、会社は女子社員の採用も活発だった。

総務部には、慶子より後輩の女子社員が二人いた。ひとりは小林という社員で、いわゆるふつうの出来だった。が、もうひとりは沢本といって、出来が悪かった。仕事が遅い上によく間違いを犯した。一年も経てば簡単に覚えられる内容の仕事だが、思うように出来ない。それで係長からよく叱られた。時には課長までが声を荒げることもあった。

その度にその社員を庇ったのが慶子だ。係長に反論したこともある。

「係長、いくら忙しいといってもそんなに一時に頼んだら、沢本さんだって間違えます。もっと優しく接することは出来ないのですか」

ふだん何も言わない彼女が言うと迫力があった。係長も慶子には何も言えなくなってしまう。

慶子に仕事を任せると安心だったし、絶対の信用を寄せていたのだ。

係長に言った後、慶子は黙って沢本の仕事までこなしたが、沢本には何も言わなかった。後輩の二人の女性が忙しければ、率先して朝のお茶いれや机の拭き掃除まで実行した。先輩だから何もしなくていいとは決して思わない女性であった。

そうした状況を毎日のように見ているうちに、慶子が立派すぎて山中にとってますます高嶺の花になっていった。

ある昼休み時間のことだ。賑やかな社員食堂の窓際に山中がひとり座って食事をしていた。そのとき、突然後方から聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。総務部の若手女子社員の二人であった。

「ねぇ、小林先輩、知ってる？」沢本だった。
「私ね、工場に同期入社の男の子がいるんだけど、もっぱらの噂らしいの」
小林は沢本の話に対し興味半分に応えた。
「あら、何？」
「ウチの松園慶子さん、工場の井本さんという人と結婚するらしいんです」
山中は衝撃を受けた。ついにそんなことになったか。
「あら、それって、どこから出てきた話？」と、小林の声。
「何でも井本さん本人が自慢げに話しているらしいんです」
「ふーん、そうなの。よかったわね。慶子さんなら、いい奥さんになると思うわ。あの人は器が大きいから、強引な井本さんとでもきっとうまくいく」
「あら、先輩は井本さんという人のこと詳しそうですね」
沢本が意外そうに言った。言われた小林は調子に乗った。
「アイデアマンらしいわよ。コストダウンの工夫をいくつか実行して会社の利益に貢献したらしいの。それでこの前係長に昇進したわよ。これからもっと偉くなるわよ。まだ二十六だって」
「まだ二十六なんですか、すごいわぁ。それで慶子さん、井本さんのことどう思っているのかしら？　私、興味津々」
「本当のところはよくわからないわ。でも井本さんがそこまで言うなら本当なんでしょう。慶子さん、きっと井本さんの積極性に負けたのよ。女って、迫力があって自分に情熱を傾けてくれる人に大抵負けちゃうものよ」
「でも、慶子さんほどの美人で器の大きい人だったら、もっといい人がいると思うんだけどなぁ。私なら、おっとりしている人の方がいいわ」
小林が、井本と慶子の結婚に賛成するように言った。
「案外、その二人、相性がいいかもしれない。情熱的な井本さんと彼を受け止める慶子さん。私はいいと思うわ。何かお祝いしなくちゃ」
山中は食事をしながら、食べ物が喉を通らなくなかった。いよいよ結婚まで行ったか。その間、自分は一体何をやっていたのだろう？　気後れして閉じこもり、自分を主張することさえなかったではないか。
だが、井本の話したことは本当だろうか？　強引で一方的な井本のことだ。思い込んでいるだけではないのか？　よし、こうなったら、自分の目と耳で話が真実かどうか確かめてやる。絶対にそうす

る。ダメでもともとだ。自分の気持ちを曝け出してみる。

山中は決心したつもりだったが、それからも特別の動きは取らなかった。いや、取れなかったのだ。相変わらず、慶子の前に出ると何も言えなくなってしまう。時間はどんどん経って行くのだが、気持ちが焦るばかりで何も出来なかった。

ところが、チャンスは思いもかけない時にやってきた。それは忘年会だった。総務部は毎年末に全員で忘年会を実施する慣わしで、その年末も例年通り行われた。全員で四十名という比較的大きな部署だったから、料亭の大広間を借り切った。

そのとき、滅多にない幸運が山中に訪れた。なんと彼は慶子と並んで座る機会に恵まれたのだ。山中は心がウキウキした。当然、酒も進んだ。慶子も気持ちよく飲んでいる様子だ。二人は取り留めのない話をした。

だがどうしても山中は例の肝心な話が出来なかった。酒が進むにつれ、男は胡坐、女は横座りの形になっていた。その間、いつもなら山中も慶子も多くの人との会話を求め、最初の場所を離れるのだが、そのときは何故か二人ともずっと同じ場所に座り続けた。

山中は嬉しかったが、その理由がわからなかった。もしかしたらと思ったが、まずそんなことはないと自分の気持ちを打ち消した。

井本とのことを訊きたいと思った。しかしそのことで、せっかくの楽しい雰囲気をダメにするようで恐かった。それでまた仕事の話に戻ってしまった。

忘年会はいつしか役職者の周りに多くの社員が集まってしまい、二人だけの空間ができた。二人だけが孤立しているような感じになった。山中にはそれが嬉しくて仕方なかった。そしてまたしても、もしかしたら彼女は自分に好意を持ってくれているのかな、と思った。自信が湧いてくるようだった。だが彼は言い出せなかった。

時間はいつの間にか経った。二時間なんて短い。全員が立ち上がり、翌年に向かっての決意表明よろしく乾杯の段階になって、山中は激しく後悔した。肝心のことを言い出さずに終わってしまった。人生の最も肝心なことだった。どうしても彼女が自分の人生に必要なら、どんな恥をかいても訊くべきだった。

散会となった。二次会に行く者もいた。山中は自分の不甲斐なさが嫌になり、途端に元気を失い二次会に行く気がなくなった。慶子はというと、彼女も帰るという。

途端に彼は元気を取り戻した。それから自信が確たるものになった。

それで初めて彼は積極的に出た。
「きょうは本当に楽しかった。一緒に帰りませんか」
そして駅まで並んで歩きながらついに訊いた。
「松園さん、ボク噂で聞いたんだけど井本君と結婚するらしいですね」
すると、彼女は笑ってこう応えたのだ。
「そうですね。そんな噂があるらしいですが、私、彼とは結婚しません」
山中のその瞬間の嬉しさといったらなかった。スカッとし、温かいものが胸いっぱいに広がった。
「本当ですか？　それじゃいま、お付き合いしている人はいないのですね？」
慶子は黙って頷いた。これは一体何を意味する？　いくら鈍感な山中でもわかった。もしかしたらという、想像は現実だったのだ。彼は勝負に出た。
「じゃ、どうかボクとお付き合いしてください」
よく勇気が出たものだと彼は自分に感心した。そして次には歓喜が彼の胸を突き抜けた。
「ええ、こちらこそ。よろしくお願いします」
慶子がそう応えたからだ。
それが二人の交際のスタートだった。そして、そのまま二年の交際を経て結婚した。
だが、山中にはどうして自分のような者が、将来に可能性がある井本のような男に勝てたのかまったくわからなかった。そしてこのことは後年、慶子の口から聞かされるまでの謎だった。

☆

井本が係長になって仕事を完全に任されるようになってから、彼はますます野心を露わにした。
ある若手技術者との協力で実現したアイデアを、部長や課長に相談なく独断で実行したのだ。さらに上に行くための、彼にとっては賭けのようなものだった。
それは当初うまくいくように思われた。ところが今度は勝手が違った。アイデアはよかったが、まだその時期ではなかったのだ。いわば需要の出るタイミングを見誤ったのである。
新しい施策のために投じたコストを売り上げでカバーすることは、到底無理であることが明らかになった。結局、会社はその時点で大

きな損失を出してしまったのだ。
　責任を追及する段になって、会社はそれまでの貢献度を鑑み、彼の行為を不問にすることを考えた。だが、最終的に反対したのが他ならぬオーナー社長の本条であった。社の秩序を乱すというのがその理由だった。鶴の一声で井本の一般社員への降格が決まったのである。
　これを井本のプライドが許さなかった。彼は敢然として辞表を叩きつけ、啖呵を切って会社を去った。
「この会社のダメなところは、先を見通せる人材がいないということだよ。今回の件だって、少し待てば需要が出てくる。それがわからない。
　それに、自分が前に出過ぎるということだが、社内に波風の立たない会社には将来性はないんだよ。
　社長もわかっていない。秩序だとか、ルールだとか、みんな仲良くなんてことは時代にそぐわないんだ。競争なんだよ、競争。そして、もっと日常の仕事を疑え、ということだよ」
　いつからそんな強い男になったのか、山中にはわからなかった。高校時代の井本は実におとなしい人間だった。あるいは、そう見えただけだったのか？　しかしやはり大きかったのは、会社に入って貢献した実績だったに違いない。
　だが山中は心のうちで井本を嘲笑した。余計なことをやって墓穴を自ら掘ったのだ、と思った。会社のルールに則り、地道にコツコツ努力する方が結局勝つと確信したのである。
　彼は井本が会社を辞めたことを慶子に話し、そっと彼女の様子を盗み見た。だが彼女にはそれに対して何の感慨もないようだった。いつもどおりに淡々としている。井本に対する評価が高まることも低くなることもなかった。

　一方、当の井本はすでに自分というものに自信を持っていた。
　将来の可能性に賭け、自分の会社を興したのである。それは勇気に違いなかった。
　勿論、最初は苦労した。危機は何度も会社に訪れた。一番の危機はやはり資金繰りである。経営というものが簡単に軌道に乗るはずがない。第一、初期投資の回収が簡単ではなかった。目に見えないコストもあった。そのうえ、銀行も実績のない人間に寛大であるはずもなく、融資も最初から十分なものではなかった。
　だが、彼には培った能力がすでにあった。短期間ではあったが、作り上げた取引先との人間関係もあった。すでに、彼は十分な信用

を持ち得ていたのである。
資金繰りの危機も乗り切り、会社は徐々に軌道に乗った。最初の会社で新しいことに挑戦するうち、すでに十分といっていいほどノウハウを蓄積していたのである。

☆

山中は、井本が成功しつつあることを同じ業界人として、噂に聞いた。家庭の主婦に納まった慶子ではあったが、やはりその情報は彼女の耳にも届いていた。三十代も半ばを過ぎて、まだ係長にもなっていなかった山中はがっかりした。そして彼女の顔色を窺うように訊いた。
「井本が創業した会社がね、どうやらうまくいってるみたいだよ。慶子さん、男を選び損ねた気はしないかい？」
彼女は相変わらず淡々と応えた。
「いいえ、私はあなたを選んで本当によかったと思っています。井本さんとあなたは違うんです。いい？　彼のことは考えないこと」
負け惜しみで言っているのではなかった。心底有りのままの感想のように山中には思えた。
それが彼には不思議なのである。一般社員のままであったから、彼の給料は結婚当初からそれほど大きくは上がっていない。だから彼女は自分でもパート社員になって家計を助けていた。後悔はないのか？
彼女のいいところは、一切他人を羨まないことだった。人は人、それぞれの道を行く。その考え方が徹底して身に浸み込んでいた。
しかしそうは言っても、悔しいのは山中自身であった。井本と自分のどこが違う？　自分がまだ中小企業の一般社員であるのに、彼は会社を興して社長に納まっている。どこでどう違ったものか？

ある時、高校のクラス会が行なわれた。山中は実は行きたくなかった。どうせ誇らしげに現れるのが、あの井本だ。あいつの顔だけは見たくない。
だが自分は当時クラスの中心人物だった。仲間を指導する立場であったから、その自分が欠席するわけにはいかなかった。どうやら七、八割のメンバーが集まるらしい。その後の皆の様子も訊きたい。
結局、出席した。井本とは離れた席に陣取った。彼以外のメンバーと楽しくやりたかったのだ。
ところが、案の定、井本が会の中心になった。井本が十万円とい

う破格の寄付をしたということをクラス会の冒頭、幹事が披露したのだ。それで一気に井本の会社社長としての立場に話題が集まってしまった。初めて聞いた連中もいたが、そういう連中までが感動している。まさか、自分たちの仲間から今をときめく社長が出現するとは思ってもいなかったのである。

クラス会は山中の望まぬ方向へ行ってしまった。井本の自慢話を聞く会に変貌したのだ。

調子に乗ったのが当の井本だ。ここまで来るのにどれほどの苦労をしたか、その苦労話と自慢話を長々と始めた。皆は感心して聞き入っている。

山中はおもしろくなかった。どうしてこの連中はこんなおもしろくもない話に耳を傾けるのであろう？　彼は、話題を別の方向に持って行きたくて、傍に座っているかつて仲の良かった芝原という男に話しかけた。

「芝原君さ、どう君のとこ何か変わったことない？　確か君、結婚が早かったから、お子さんはもう中学だろ？」

芝原の家庭に話題を持って行こうとした。が、芝原が山中の話を聞こうとしたのは一瞬のことで、すぐに関心は井本に向かった。

「うん、これがどうも出来が悪くてね。……。ちょっと待って、いま井本の話がおもしろそうだから、後にしよう」

山中は黙らざるを得なかった。井本の話が続いていた。

「俺が一番苦労したのはね、創業直後の資金繰りだったね。どこも相手にしてくれないんだよ。銀行なんて大きいほど企業家の夢に賭けようとする気持ちがないね」

井本は時折難しい顔をしながらも、自信たっぷりだ。仲間の連中はふだん聞く事のできない内容だったから、なお一層熱心に耳を傾けている。皆の真剣な様子にますます気をよくしたのか、いよいよ井本の独壇場になった。クラス会は彼ひとりの演説会の様相を呈した。

「俺が初め本条電子工業に入社したことは、みんな知っているだろう。そうだ、そこにいる山中君と一緒だった」

そう言うと、列中央に座っていた井本は、対面する列の、左端に座る山中を指差した。彼は不快になった。

「俺は上に使われるだけの本条が嫌になってすぐ辞めたけど、山中君はまだ真面目に勤務している。総務部なんていう、ホント地味なところでよく頑張っていると思うよ。いつも感心しているんだよ」

これはまったくの嫌味だった。こいつ自分が成功したものだから優越感に浸っている。あるいは、好意を寄せていた慶子を奪われた

ことへの腹いせに違いない、と山中は思った。
彼は些か大人気ないとは思ったが、井本の話の途中、トイレに行くふりをして席を外そうとした。これを見た井本が、また癇に障ることを言った。
「おっと、見ろよ。山中君が席を外すよ。俺が成功したんでおもしろくないのかな」
ニヤニヤしている。とうとう山中が癇癪を起した。
「馬鹿言うんじゃない。誰が成功しようと構わない。折角の会社だ、せいぜい倒産させないように頑張るんだな。ふん、いつまで続くかわかったものではないけどな」
それは山中の精一杯の強がりだった。しかし心の中は敗北感と空しさでいっぱいだった。
「ふん、負け犬がいっぱしの口を利いているよ。君に言われなくてもわかっているよ」
井本が軽く受け流した。
宴会が終わったとき、井本が威勢のいい声を上げた。
「どうだ、みんな。俺が金出すから二次会で派手にやらないか。そこでさらに景気づけをやろう」
皆は気勢を上げた。これでは何のためのクラス会かわからなかった。旧交を温め、近況報告なんて感じではなくなった。殆どの出席メンバーが井本の後をついて行った。
無念だった。独り帰路に着いた山中は寂しかった。

クラス会が終わって数日が経っても、山中の気持ちは晴れなかった。どうして井本と自分はこれほどまでに差がついてしまったのだろうか？　高校時代、あれほどおとなしくて目立たなかった井本がどうしてあれほど変貌したのか？
それに引き替え、この自分は上司の前では借りてきた猫、何も言えない人間になってしまった。下手なことを言って、上司に疎まれたら恐いと考えているからなのか？　無難に人生を渡りたいという意識が強すぎたからなのか？
少なくとも自分は、井本のような人生は渡れない。彼が事業に失敗してくれれば、こんな苦しい思いをせずにいられたはずだ。自分が正しいことの証明にもなったはずだ。

山中はそんな思いを抱えたままで、それからの人生を送った。
一方の慶子はどんな思いで、山中との生活を過ごしたのだろうか？　彼女はいつも元気だった。落ち込んだことがないのだ。多分、

気持ちのコントロールが上手なのだろう。たとえ落ち込んでも、表に出さない。山中が元気を失くしていても、余程のときでないと彼の話は聞かなかった。彼の自力回復に委ねたのだ。本当に元気を失くしたと思われるとき、慶子は身を入れて彼の話を聞いてやった。

そして、彼は話をするといつも不思議に気持ちが和らぎ、いつの間にか元気を取り戻していた。

慶子は気持ちの安定した、本当にゆったりとした人であった。そのうえ、まったく愚痴や不平不満というものがなかった。いつも淡々としており、生活費が不足しそうなときでも平気だった。

彼らには二人の息子がいた。この息子たちの教育費が最も高いものについた。だが慶子には金を惜しむところがなかった。高い教育を受けさせることで、もしも息子たちの人生が拓けるのなら金の苦労は何でもなかった。

息子たちの方も山中夫婦の影響なのか、とにかく真面目、勉強も熱心だった。恐らくそれが親の一番望むことだと息子たちも考えたのであろう。そして二人とも名門大学に進学できたし、名の通った会社にも正社員で就職できたのである。

したがって費用はかかった。山中家はいつも貧乏だった。しかし慶子から愚痴を聞くことはなかった。山中は当然、慶子に頭が上がらない。本当に自分には出来すぎた妻である。どうしてこれほどの女が自分の妻になってくれたのか、彼には信じられなかった。自分の運の良さに感謝した。

結婚して三十七年が経ったが、退職時にあっても彼は係長にさえなれなかった。会社はリーダーシップのある人間を係長に据えたのだ。ただ黙って上の命令をこなすだけの人間では長のつく立場は無理と考えたのである。会社はすでに従来の年功序列から脱却していたのだ。

慶子は山中に出世を望むようなことを言わなかった。彼のやりたいように任せ、彼の方は毎日を無難に過ごす生き方を選んだ。

こうして彼らの人生は淡々と過ぎ、老年を迎えたのである。

☆

山中が突如変貌を遂げたのは、定年退職をしてから翌年のことだ。何を思ったのか、投資を考え始めたのである。あたかも何かに目覚めたかのようであった。

その原因の第一は、退職して何もやることがなくなったことである。

長年、総務部で事務の仕事ばかりだったので、手に技術らしきものが身についていなかった。それに迂闊だったことは国家資格のようなものは何も取っていなかったことだ。だから第二の就職先に自分を売り込むにも、その材料がなかったのである。

無趣味でもあった。とにかく妻と息子二人の生活を大事に思い、人生をコツコツ歩いてきただけであった。自分の好きなことなど、考える余裕もなかった。

そして、最たる原因は、やはり金銭面で苦労をかけた妻に報いてやりたいとの思いであったし、さらには井本のことが頭に掠めたからだ。

井本はその後さらに大きな成功を収め、地元商工会議所の役員にも就任していた。そんな彼を一発逆転するには、投資に連続して成功を収めることしかなかった。

山中は投資関係について必死に勉強した。投資信託、株、債券、為替差益を狙った外貨預金等々、懸命に勉強した。ところがそれらのいずれもが、結果を出すためには時間を要することがわかった。彼はすでに六十六になっており、残された時間が潤沢ではなかったのだ。

思い悩んでいたとき、不思議なことが起こった。タイミングよく、投資勧誘の電話がかかってきたのである。それは男の声で金投資を勧めるものだった。その声はこう言った。

「私、Z商品の川内と申します。金投資にご興味はございませんか？金がこの十年で四倍に値上がりしていることはご存知ですか？」

山中でも、そのくらいは知っていた。知っている、とだけ言った。男の声は脈があるとでも思ったのであろうか、口調が滑らかになった。

「金は確かにこれからも上がります。ですから金を長期に現物保有すれば、間違いなく利益は出ます。でもそれには時間がかかります。そこでちょっと考えてください。金でも株でも上がり放しということはないのです。利益確定の売りが入って必ず一時的に下がるものです。いわゆる調整というものですね。そこを利用するんですよ」

「どうするんだ？」

「その下がる場面で売りを仕掛けるんですよ。上がり方が凄かった分、下がり方も凄いと私は思っているんです」

「なんだ、お宅の会社、商品取引を扱うところ？」

「申し遅れましたが、そんなところです。今が売りを仕掛けるチャンスだと思っています」

「だけど、商品取引というのは、いわゆる相場だろ？　危ないんじ

やないのか？」
男の声は笑って応えた。
「皆さん、そうおっしゃいますが、こちらの言うことをキチンと守って投資していただければ少しも怖くありませんよ。とにかく今がチャンスです。投資金額にもよりますが、うまくすれば簡単に一千万単位で儲けられますよ」
山中は驚いた。苦労してやっと貯めた一千万が簡単にできるというのか。
「ホントかい、じゃ詳しく教えてよ」
こうして彼の投資の矛先は金の商品取引に決まった。
まず五百万円の委託証拠金を会社に送り、口座開設の手続きをした。そこでしばらく値動きを見ようと思ったのである。その辺は一応慎重だった。なにしろわずかな金額に苦労した人生だった。そのくらい慎重でなければならなかった。
一ヶ月が経った。しかし彼は動かない。Ｚ商品から何度かポジションをとるよう催促の電話があったが、それでも動かなかった。大きな動き、いわゆるトレンドが明確になる時期を待っていたのである。大きな動きに乗れば、比較的簡単に儲けを手にできる。素人が動くのにわかりやすいからだ。
二ヶ月が経とうとした、ある金曜日の朝のことだった。山中を担当することになった川内から突然電話が入った。
「山中さん、ビッグニュースです。ニューヨークで金が暴落しました。昨日七〇ドルの下げです。今日の相場は朝から大きな下げになりますよ」
と、言ってきた。ニューヨークでそれほど下げたのなら、日本でも大きな下げ相場になるに違いない。だがそれでも動かなかった。なにより恐れたのは、空売り後しばらく下げた後の急激な反転だった。相場経験のない彼は、ニューヨークの動きが勘として結びつかない。それでなおしばらく様子を見た。結果はやはり朝から売り一色の展開となった。川内の言うとおりだった。暴落したのである。反転の兆しはまったく見られなかった。
ポジション取りが少し遅れた。が、この段階ならばまだチャンスはあった。ところが山中はそれでも動かなかった。いまは売り一色だから、それに相応する買い手が少ないだけだ。何かのキッカケで大きく反転するかもしれない。実際に下げトレンドに入ったかどうか、それはまだわからない。それが理由だった。様々に理由をつけて躊躇した。
結局のところ、彼は恐かったのだ。絶対に儲けられるという確信

が得られるまで、彼は動けなかったのである。
だが、絶対なんてことが相場の世界にあるはずもない。山中のような決断力のない人間に相場は果たして向いていたのか？　ついに後場に入っても様子を見ただけで動かなかった。
「山中さん、残念でしたね。動いて欲しかったな。動けば大儲けできましたよ」
夕方になって心底残念そうに川内が電話をしてきた。山中も少しは後悔した。朝一番で五百万円分空売りに出していたなら、結局その日は二百円以上も下げたから、優に一千万円以上の利益が出たはずだった。五百万円の投資では、相場一円の動きが五万円の動きになる。
残念だったが、チャンスはこれからいくらでもある、そのとき勝負するぞ、と山中は自分を納得させた。しかし時間が経つにつれ、さすがにこの段階で気持ちが焦ってきた。実損が出ていないのに、損をしたような感覚に陥った。川内に煽られた影響でもある。
金曜日の相場はこうして終わった。週明けまでたっぷり考える時間がある。どうするか腹を決めなければならない。彼は時間に追い詰められるような気がしてきた。
その夜、晩酌をしながら山中は相場のことばかり考えていた。ほんのちょっと躊躇したために、大きく儲け損ねたのだ。一千万円か、結構大きかったな。一千万円あれば慶子さんを喜ばすことができたな。一千万円のうち、一部の金でヨーロッパ旅行も贅沢に楽しめたな。彼女の笑顔を見ながら一緒に幸せをかみしめられたはずだった。井本にも胸が張れたな。
しかし、慶子の方は、山中が相場に関わっていることに気付かなかった。日中はパートに出ていたから、彼の動きはわからなかったのだ。
その晩も、黙って晩酌に付き合っていた。

翌土曜日の朝だった。勿論日本の相場は休みである。ところがその朝、思いがけず川内がわざわざ電話をかけてきた。
「山中さん、ニューヨークでまたまた大きく下げました。今度は百四十ドルの大暴落ですよ。やはり金曜日のうちに売りを仕掛けておけばよかったですね。残念です。週明けには大儲けできましたよ。軽く二千万は儲かったはずです。月曜日は取引中断を伴う下落が確実ですよ」
山中は頭の中が真っ白になった。ますます追い詰められた感覚を持った。

「じゃ、月曜の朝一番で五百万円分すべて売ってくださいよ」
気持ちが逸った。しかし川内はこう言ったのだ。
「それはもう無理です。調べたらすでに大量の売り物が出ています。これからは売りに相当する量の買い物が入ってこないからとても売れないでしょう」
相場の理屈からいって当然のことであった。売り物に見合う買い物がなければ、取引は成立しない。誰もが下がることが分かっているから、買いに出てこない。それに売り物の処理は申し込み順だから、これから売りに出しても買ってくれる投資家がいないから取引は成立しないのである。
山中は今度こそ、これまで以上に激しく後悔した。躊躇した自分が馬鹿にみえた。二千万円はおそらく儲かっていただろう。やはり自分という男はよくよく貧乏に馴染んでいる男なのだ。貧乏人はいつまでたっても貧乏人だ。彼は自虐の思いに捉われたのである。
さて月曜日、日本の相場が始まると、思ったとおり金相場は朝から大暴落となった。売りが売りを呼んだのである。雪崩のように下げ続けた。買い方にまわる投資家はいなかった。
ついに取引中断が二度の四百三十円の下げになった。確かに川内の言ったとおりだった。金曜日の大引け前、その時点で相場は落ち着いていたから、そのときにもしも仕掛けていたならば、ちょうど二千百五十万円の儲けになったはずだ。寄り付きから下げ一色なのだ。
ここで山中はついに確信した。金相場は間違いなく下げトレンドに入った。これはもう間違いない。後悔もあったが、これからでも間に合う。二千万円以上儲け損ねたが、これからだってこれに匹敵する大相場は続く、と思った。川内も断言した。
「しばらくこの下げトレンドは続くでしょう。大きく儲けるチャンスです。一気に勝負に出てください。もうここは躊躇する段階ではないですよ。放置すればチャンスはどんどん逃げていきますよ」
この言葉が山中の気持ちを決定的にした。これ以上後悔したくなかったから、相場が落ち着きを取り戻した夕方、ついに五百万円の証拠金全額を売りに投じた。少し恐かったが、下げはこれからも続くと見たのである。すると、しばらくしてから、川内が取引成立の報告をしてきた。
「よかったですね。五十枚全部空売りできました。明日が楽しみですよ」
ところが山中は、今度は売ってみると、それでよかったのか、逆にまた不安になってきた。下落が続くと確信はしていたものの、実

際に体験するまでは安心できなかったのである。
　もしも逆の動きになったらどうしよう。そう考え始めた彼は、それからは相場が気になって仕方なかった。いても立ってもいられないのである。晩酌をしていても、相場のことが頭から離れない。考える事はすべて相場であった。それしか考えられない。どうかうまくいきますように、どうかニューヨークで続落してくれますように、そんなことしか頭になかった。祈るような気持ちは床に入ってからも続いた。なんと言っても、それは彼にとって一世一代の大勝負であった。生涯で初めての冒険なのだ。すべてが上の空となった。
　ニューヨークの相場がこれからどう動くか、二日間で合計二百十ドル下げたのだ。そう簡単に下げトレンドは変わらないはずだ、と思った。そうは思っても緊張した。ついに一晩中まんじりともしなかった。頭が冴えわたり変に熱かった。翌朝七時までじっと待ち、震える手で川内の携帯電話にコールした。
「川内さん、朝早くから申し訳ないね。昨日のニューヨークどうでした？」
　声が緊張のためか、すでに上ずっている。ところが、川内は嬉しそうだった。
「大丈夫です。やはり思ったとおりですよ。下げました。ただ昨日は下げ幅がちょっと小さかったですけどね」
　下げ幅が小さい？　その言葉を聞きとがめた。ショックを受けたのである。すでに胸の鼓動が大きくなっている。
「下げ幅が小さいって、いくらですか？」
「六ドルでしたけれどね、でも大丈夫ですよ」
「六ドル、たったの六ドル。それじゃ、すぐに上げトレンドに変わってしまうのではないの？　やばいことになったのかなぁ。止めとけばよかったのかなぁ」
　早くも弱気になった。不安が胸に黒雲のように広がった。
「大丈夫ですよ。下げ幅は小さいですが、その前二日間が大きな下げだったから、ちょっとした反動ですよ。トレンドは簡単には変わりませんよ。そんなに心配するようなことではありません」
　川内は自信たっぷりである。これで山中の気持ちも多少は軽くなった。しかし考えてみれば川内が取引をしているわけではなかった。川内にとっては相場が上げても下げても、どちらでも構わないのである。会社として売買手数料さえ懐に入ればよい。痛くも痒くもないから、客には楽観的なことを言うのである。
　朝方、相場は確かに下げた。下げから始まったのである。川内か

らすぐ電話が入った。
「山中さん、ほら大丈夫だったでしょう。案の定下げましたよ。いま期先で十円の下げですよ。これからもっと下げていきますよ」
彼はちょっと安心した。何とかこのまま下げ続けてくれ、と願った。しかし下げたのは朝方のほんの短い時間だけだった。朝の十時過ぎには少しずつ買い物が多くなり始めた。そして十時半近くになったころだろうか、それまで一進一退と思われた相場は買い物に比べて売り物が極端に細り、やがて猛烈な勢いで買いが入ってきた。大きく値を上げ始めたのである。相場が転換したのだ。
すぐに川内から連絡が入った。
「山中さん、大丈夫だと思いますが、いまちょっと高くなっています」
山中は激しい衝撃を受けた。動悸が激しくなった。
「えぇ！　話が違うじゃないの。それでいくら高いのよ？」
「昨日より五十円ばかり高いですね」
すでに値洗い二百五十万円の損だった。あっという間に、計算上証拠金の半分が飛んだのだ。呆然となり、頭を抱えた。
すると、十分もしないうちにまたしても川内から電話が入った。
「山中さん、申し訳ない。いま百円の上げになりました。ちょっと予想外です。これからまた下げに転換するとは思いますが、いまのまま上げていくと強制的に山中さんの取引は解約になります。損が証拠金を上回るとそうなってしまいます。取引をお続けになりたいのなら、申し訳ないですけどお金を入れてください。追加であと五百万円入れていただけますか」
山中は鉛を呑み込んだような気持ちになり、同時にめまいの感覚に襲われた。
「ええっ、別に五百万円？　そんな金ないよ。それは苦労してやっと手に入れた退職金だ。それは無理だ、勘弁してくれよ」
彼は叫んだ。泣きたい気持ちになった。頭が錯乱した。呼吸が荒くなり、何も考えられなくなった。あと五百万？　虎の子の五百万が出て行く？　奈落に突き落とされた感じになった。
そのとき頭をよぎったのは、やはり慶子のことだった。自分にとってかけがいのない、あの愛する妻に何と言ったらいいんだ？　彼女に対する申し訳なさに胸が張り裂けた。不覚にも涙が滲んだ。だが泣いている場合ではなかった。計算上では、いま分秒刻みで金が失われている。渇ききった砂漠の土に貴重な水が吸い込まれるように、大切な金がどんどん失われている。
「待ってください。証拠金を入れるにしても、これから銀行に行っ

て金を下ろさなければならない。その間にもっと相場が上がったらどうなるんです？」

やっとそれだけ、振り絞るように言った。

「山中さんにその気があるのなら、私どもの会社でその分のお金を立て替えます。どうされます？　五百万の損にとどめますか？　とどめるならそう言ってください。すぐ決済します。損は五百万で済むかもしれません。それとも追加の証拠金を入れますか？」

山中は判断に迷った。しかし、やはり五百万円を失うわけにはいかなかった。

あの五百万円を貯めるのにどれほど苦労したことか。時間が経てば、再び下げに向かうかもしれない。少しの我慢だ。下げトレンドがそう簡単に変化するはずがない。彼は確かにそう思った。

五百万を諦めるわけにはいかなかったのだ。結果的にはそれしかない。一銭だって失いたくなかったのである。

山中は叫んだ。

「追加証拠金を入れる！」

そして電話を切ると、すぐ自宅近くの銀行に駆け込んだ。顔は蒼ざめ、呼吸は荒くなっていた。銀行では何事があったのか、不審そうにじっと彼の顔を見ている。銀行員の動きは鈍かった。少なくとも彼にはそう見えた。

「俺がだめになる。俺の人生がだめになる」

恥も外聞もなかった。近所の知り合いが見ているかもしれないが、ついに怒鳴った。

「早くしろ！」

「どうされたのですか？　こんな大金、何にお遣いになります？」

悠長な質問である。銀行では最近、個人がまとまった現金を引き出すとき、犯罪に巻き込まれていないかを疑い、このように訊いてくる。山中の顔は血走り、蒼白で目だけがギラギラしていた。

「お客様、大丈夫ですか？　何があったか説明していただけませんか？」

一分一秒の時間が惜しかった。銀行の対応が如何にも遅い。他人の苦しみなど何もわかっちゃいない、と思って、腹立たしくなった。

ところが実際にはすでに現金を立て替えてもらうことになっていたから、急ぐ必要もなかったのである。山中はすでに冷静ではなくなっていた。

「いいから、早くしろ。いま大変なんだ」

解約したばかりの五百万円をひったくるように抱えると、彼はその足で郵便局に走った。郵便局からZ商品へ送金すると手数料がわ

ずかながらも少なくて済む。たったそれだけのために、彼は走ったのだ。

送金手数料を通常より軽減する、それが郵便局とZ商品との協約であった。

だが相場はついに反転しなかった。山中と川内、二人の予測は完全に外れたのである。相場は大きく上げ、そのまま上げ基調になった。そして次には損を少なくしようとして取引を決済しようとしても、もはや後場の取引では買い戻しが出来なくなった。すでに時遅しだったのである。

商社などの機関投資家はニューヨークの取引を見て、下げ基調が間もなく止ると考えた。その考えが顕著に現れ始めた午前十時半には、大量の買いに回ったのである。だがその段階でも、二人はまだ下げに転じると予想していた。ところが、相場はすでに反転していたのだ。この激しい動きは、山中のような素人の出る幕ではなくなっていたのである。

驚くべきことに前日取引中断が二度あった下げ相場は、翌日には一転上げの取引中断を伴う相場になった。ちょうど四百円の大暴騰になったのである。山中は気が狂ったようになった。時間が経てばたつほど損が大きく膨らんだ。すでに二千万円の損害である。勿論それだけの大金をつぎ込めば取引継続が可能になり、相場の下げを待つことができる。資産家が最終的に勝つ蓋然性が高くなるのはそのためだ。時間が経てば、相場が反転することはよくある現象だからだ。

しかし山中には追加の五百万円はもともと大金であり、それにその段階では一銭の現金もなくなっていた。二千万円の損切り以外に方法がなくなったのである。決済ができたのはようやく夕方になってからだった。仕方なく損を確定させたのである。悔しくて涙は止まらなかった。

それは一日の違いであった。たったそれだけのことで、二千万円以上の大儲けのはずが逆に二千万円の大損になった。いや午前の早い段階で決断していれば、五百万円の損でおさめられたかもしれない。

山中は、ショック状態となった。退職金を含むわずかな預貯金のすべてが失われ、送金済みの証拠金の合計一千万円を充当しても、あと一千万円が不足する事態となった。

☆

老後の人生が暗転した。そうなると心配なのは慶子のことだった。あれほどできた妻はいない。彼の人生のすべてであった。彼女を喜ばせたい、贅沢をさせたいとの思いから始めた投資だったのにそれが無に帰した。

眠れなくなった。食事も喉を通らなくなった。背中を丸め、俯き、じっと考え込んだ。慶子のいないところで頭を叩き、体を家の壁や床に叩きつけてもどうにもならなかった。やがて思いは死ぬことに収斂していった。これほど多額の借金を背負って生きていくことはできないと思った。これまでだって、それほど意味のある人生ではなかった。生きていても仕方ない。

だが自分が死んだら、残された慶子は独りでどうやって生きていく？　息子たちに頼る？　彼らには彼らの家庭がある。頼ってはいけないのだ。

ここで彼は飛躍した考えを持った。無理心中である。慶子を殺して自分も死ぬ。それが一番心残りのない解決方法と思った。

一方、慶子の方も山中のふつうでない様子に気づき始めていた。だが彼女がいくら訳を訊いても、山中は決して言わなかった。じっと黙ったままだった。それが彼の最後に取り得た、最低の面子だったのかもしれない。

山中はＺ商品に逆恨みの感情を持った。こんな目に自分が遭うのはＺ商品の、あの川内の投資勧誘の電話だ。そのうえ、下げのトレンドに間違いなく入ったなどと、嘘を言ったことも到底許せない。

一千万円の借金が残っていたが、これを踏み倒してやろうと考えた。どうせ儲かっている会社だ。一千万円くらいどうでもいいだろう。

損が確定してから一週間近くが経ったころ、川内から借金取立ての電話が入るようになった。

「山中さん、困るよ。取引続行を選んだのはあんた自身なんだ。金を入れてもらえないと、俺が困るんだよ。これ以上支払が先になるなら、取り立てに別の人間があんたのとこへ行くよ。恐い人間だよ。それでもいいのか？　おい！　どうなんだ！」

最後は脅し文句だったが、山中は少しも恐くなかった。遺書を残し会社を苦しめてやろうと思った。

損を出してから十日ほどが経つ、ある寝静まった夜のことであった。山中は寝床を抜け出した。横には慶子が静かな寝息を立ててい

るのが見える。彼はいまがチャンスだ、と思った。
咄嗟に台所の包丁を手にした。そして夫婦の寝室となっていた六畳間に戻ると、彼は改めて慶子の寝顔に見入った。四十年近くを共に過ごした、愛する女の顔だった。この女に何一つ十分なことをしてやれなかった。もしも井本のような男と一緒になれば、まったく違った人生になっていただろう。申し訳ないという思いが、彼の胸を塞いだ。
慶子が寝ている掛け布団の上に跨った。そしてこう呟いた。
「これまでのこと、心から感謝している。こうなったら一緒に死んでくれ」
そうして慶子の首あたりに狙いを定めて包丁を振りかざしたとき、重みを感じたのか彼女が突然、目を開いて叫んだ。
「あなた、何するの！」
彼女が飛び起きた。その目は大きく開かれ、山中を凝視している。たちまち彼の殺意は萎えてしまった。そうなのだ。何をやっても彼は中途半端な男だった。あれほど思いつめ、これしかないと決意したのに、いざとなると何もできなくなる。これが自分の正体なのだ。山中はまたしても自分の不甲斐なさに失望した。もう殺せないと思った。慶子がゆっくりと手を伸ばし、包丁を取り上げた。
二人は向かい合って正座する恰好となった。彼らは視線を合わさなかった。山中は俯き、慶子は天井を見ている。
どのくらい時間が経過しただろう、少しずつ冷静になった段階で、まず慶子が口を開いた。
「きっと無理心中を図ろうとしたのね。一体何があったというの？」
山中はとうとう言わざるを得なくなった。
その第一声は申し訳ない、という言葉であった。
「自分が不甲斐ないために大して贅沢をさせられなかったし、苦労もかけた。とにかくそれが申し訳ない」
彼は泣いていた。慶子は訳がわからなかった。何をいまさら言い出すのだろう？
「何をいまさら言うの？　どうしてそれが無理心中につながるの？」
「金がなくなったんだ」
彼女は息を呑んだ。何が起きたのか、咄嗟にわからなかった。
「わずかしかない老後の蓄えがなくなったんだ」
「えっ、あの退職金も…。どうして？」
「慶子さんを贅沢させようと思って、相場に手を出した」
「じゃ、お金何もないの？」
「うん、そのうえ借金もできた」

慶子には次第に状況が見えてきた。絶句した。さすがに冷静で大きな気持ちを持つ彼女も失望の気持ちは隠せなかった。息が途切れてしまい、まともに呼吸ができなくなった。

「それで…。借金は…。いくらなの？」

ようやくそう言った。

「悪い。俺がダメなんだ」

「それでいくらなの？」

「一千万」

慶子は天井を睨んだままで、言葉を失った。しばらくして訊いた。

「どうしてお金を儲けようと思ったの？」

山中は絞り出すような声でこう答えた。

「慶子さんは自分のような何にもできなかった男より、井本のように積極的で前向きな男の方がよかったんだ。もし井本とあのとき結婚していたら、いまごろは立派な社長夫人になっていた」

ボソボソ俯きながら話す山中が、慶子は憎くなった。腹が立ち、無性に悔しくなった。何をいまさら言うのか、山中和夫の悪い点はこういうところだ、と思った。

そしていままで黙っていたことを話し出した。彼女なりに我慢して言わなかったことだ。

「これだけは私言いたくなかった。でもこうなったら、あなたの間違った考えを正すために言うわ。

あなたの人生は井本慎二さんとの比較でずっと生きてきたようなものなのよ。あなたの考えの根っこには井本さんの影が常にあった。それは、あなたとお付き合いを始めてから、すぐ気づいたことよ。会社で彼が失敗したときのあなたの嬉しそうな顔。自分の会社を興した彼が成功しつつあると聞いたときのあなたの悔しそうな顔。私、おかしかったわ」

山中は全部見抜かれていたことに少なからず驚いた。

「はっきりと言わせてもらうわ。そういうところが、あなたのダメな点よ。そんなことを考えているからダメなのよ。そこには、あなた自身がない。井本さんが成功しようが、失敗しようが、あなたに関係ない。あなたはあなたでしょ。どうしてそう考えることができないの！」

慶子の口調は厳しかった。

「こんなこと私が言うのはおかしいけれど、人はね、皆それぞれ違う道を行くのよ。いいじゃないの。あなたは地道に歩く人生で」

山中はそれを聞いて、自分の心が温かくなったように感じた。それで少し元気を取り戻した。

「じゃなんで、もっと早く言ってくれなかったんだ。わかっていたら、俺も馬鹿なことはしなかった」
これには慶子が怒った。
「どうしてそういう情けないことを言うの！　甘ったれるのもいい加減にしてちょうだい！　自分の人生は自分で決めるものでしょう！　いちいち言ってもらわなければ、生きられない人なの？」
山中は夫婦になって初めて、慶子から厳しく叱られたように思った。
が、次には慶子の口調が少し和らいだ。
「私はね、そうね、あなたの生き方に安心していたから何も言わなかったのかもしれない」
二人はまた沈黙した。しばらくして口を開いたのは、今度も慶子の方だった。
「私はね、しばらく井本さんとお付き合いしたわ。彼の熱心さに負けて、何度かデートもした。初めはいい人と思った。バイタリティがあって、前向きで負けず嫌い。会社を興すのに必要な資質を持っているとも感じた。でもだんだん危ないものも感じ始めたの。恐らくこの人は生涯気の休まる時間を持たずに終わる人ではないか、そして家族を大切にしないで生きる人に違いない、と思ったわ。
それに、あまりに闘争精神が強すぎる。人を押しのける気持ちが強かった。私はね、人を押しのけてまで前に進もうとは思わないの。競争も積極的には認めたくない。それでね、井本さんと私、ちょっと違うのかな、と思い始めたのよ」
山中はじっと目を瞑って、俯いたままだ。
「そう考えていたとき、ふと目の前を見たら、あなたがいた。ずっと一緒の職場なのに気づかなかった。真面目で、人と協調する気持ちがあって、しかも優しい。本当に優しいと感じたわ。この人だ、と私は思ったの」
初めて聞く彼女の告白に胸が熱くなった。
「私はね、あなたと一緒になって貧乏で辛いと思ったことなどないわ。質素だったけれど十分幸せだった。子供たちも期待通りに成長した。これ以上何を望むというの」
正座した頭がますます下がった。彼女が神々しく思えた。
「多分、人生の終盤にさしかかって、あなたはお金の心配から私を解放しようとしたのね。きっとそれに違いないわ。でもそんな必要はまったくなかったの」
確かにそうだった。山中は金銭面で井本に少しでも近づきたいと思ったし、慶子が井本と結婚したとして、同じ経済的余裕を彼女に

感じてもらいたかった。あわよくば、資産を積み上げたであろう井本を逆転だって出来ると思ったのだ。

「ねぇ、人生って何だと思う？」

改めて慶子が訊いた。山中には考えてもみないことだった。

「私はね、こう思うのよ。一億の人がいたら一億通りの人生がある。そしてその人生は神様から与えられている。運なり、才能なり、適性というものがあるじゃない、それが与えられているものなのよ。どうにもならない壁のようなものよ。だからこそ、その中で努力すればいい。他人と比較して悔しがる必要もないし、優越感に浸ることもない。この世で与えられた人生を正しく全うして終える。このことが大切だと思うのよ」

山中はここまで彼女の言うことを聞いて、少しはわかったような気がした。井本のことばかり考えてきたこれまでの人生とは一体何だったのか、井本に左右された人生ではなかったのか。

「慶子さん、わかったような気がする。井本は井本の道、自分は自分の道があるってことだね？」

修羅場の状態から脱け出て、二人はやっと落ち着きを取り戻した。

しかし身近に厳しい現実があることも事実だった。

「俺が招いた苦境。これを乗り越えるためにどうしたらいい？」

山中が訊くと、慶子がはっきりと答えた。

「できる範囲で頑張るのよ。二人で働けばいいじゃないの。死んだらダメなの。寿命がやってくる、その瞬間までベストを尽くす。それだけのことじゃない？」

「そうだよな。金のことぐらいで死んだら天罰が下るよな」

山中はそう言って、やっと笑顔になった。

〈了〉

リプレイス

いんば華子

カプセルベッドから起き上がる時にはコツがいる。勢いがよすぎると、ふちに乗ったままベッドが傾いて尻もちをつくことになる。底が起き上り人形のように安定しないのでこういうことが起きるのだ。

質の良い睡眠のために、高級韓国製一人用カプセルベッドを購入したのにひどい仕打ちだ。目覚め方は日本製の高層布団の方がはるかに素晴らしい。

星名(ほしな)はゆっくりと片足を床につけ、体重を移動させてカプセルベッドを傾ける。身体がスロープを下るかのように、滑らかに移動する。

印西(いんざい)市在住の営業マン星名の一日はこうして始まる。

よし、成功だ。

立ち上がると真っ先に、壁掛け時計で出社までの残り時間をチェックする。

「マジかよ……」

一人暮らしで困ることは、独り言が余計に増えることだ。

星名は独り言が多い。自分で気づいたわけでなく、隣のデスクの後輩、福水(ふくみず)から指摘されて気が付いた。独り言というからには、そ

の言葉は自分自身に向けられていて、言葉を発していたとしても、すべて自分の思考が音声となって外界へ飛び出すということだ。福水にとって星名の思考を聞くことは苦ではないが、思考の言語化をＢＧＭに仕事が捗(はかど)るというわけでもない。場合によっては、集中を大いに乱される。

せめて会社では気をつけねばと意識するものの、星名に限らず独り言を減らすことは至難だ。

星名は時計を横目に見つつ、上の寝巻を脱ぎ捨てる。中途半端にズボンを足首に引っかけたまま、洗面台へ向かい、勢いよく出し過ぎた歯磨き粉がこんもりと乗った歯ブラシを口に咥える。甘ったるい香りと風味を、鼻孔と味蕾が感知する。間違えてわたあめ味の歯磨き粉を買った先週の自分に、忸怩(じくじ)たる思いがわく。

シャツに腕を通しながら、スラックスと同じ色の上着を探す。営業職は身だしなみが第一なので、昨日と同じスーツとはいかない。昨夜帰ってリビングの椅子に引っかけたままのものは選べない。下手に昨日打ち合わせた客と顔を合わせた時の気まずさといったらなかった。

「時間がないんだ。上着！」

寝室のクローゼットが音声に反応し、自動で開く。

「手元に飛んでくるまで俺は生きているかな……。技術の進歩途上は、いつもこうだ」

聞きいれられないクレームを発しつつ上着を取り、小走りの状態で玄関へ向かう。手のひらに収まるほどのボタン付きのキーはここが定位置だ。三つあるキーのボタンから、中央についた大きなボタンを、念を込めて力強く押す。

「頼む、頼む、早く」

草深にある第五印西市共同駐車場から、ネジマキ式公共車を呼び出す。力強く押したり連打したりしたからといって、車が素早く着くわけではない。五分、いや十分早ければ、毎朝こんなふうに慌てる必要もないのだ。気が付けばこれが変わらぬ朝の風景だ。

十五年前、通称エコ法と呼ばれる法律が施行された。過去のような、石油をエネルギー源とする車の所有が認められなくなった。代わりに電動ネジマキ式の公共車、最近では温感式公共車が採用され、各自治体が管理する公共車の共同駐車場に常駐されることになった。大型車は物流関係の会社・バス会社等が所有し、特別な事情がない限り、公共車や会社所有の車は軽自動車だ。

車で通勤・通学、休日のドライブも含め、移動手段として使用したい者は役所に申請し、専用のキーを使って毎回駐車場から車を手

配する。一昔前に流行った車のリースが、完全にお役所管理に変わった形式だ。

車通勤者の数以上車数は確保されているとはいえ、呼び出しが遅くなると、駐車場に残っている車も旧式ばかりになる。馬力の弱い電動ネジマキ式ということだ。

玄関先で車の到着を待っていると、毎回安定の温感式を確保した玉置(たまち)が車を運転して颯爽と現れた。

「先輩、お先っす」

わざわざ窓を開けて人懐っこい笑みを光線のように押し出し、テールランプの残像の如く去ってゆく。目障りなこと極まりない。

「この前の昼飯代返せ！　覚えているぞ、税込九五〇円！」

渾身の大声が届いたとしても、玉置に聞く耳など持たないことぐらいわかっている。

玉置は星名の会社の地下のテナントで、高級喫茶店だかイメージクラブだかのギャルソンとして働いている。何度か転職を繰り返して、五年くらい前にオープニングスタッフとしてひょろっとやってきた。偶然であることを星名は祈ったが、同時オープンの店舗成田(なりた)市佐倉(さくら)だったので、半ば玉置の狙い通りだったのかもしれない。

玉置は高校時代からの後輩で、家も車で十分ほどなので近隣といえる地域だ。星名が大学卒業以来、転職していないことも知っていたし、会社近くで飲んだこともある。

しかし毎日こうバカにされながらの出勤となると一度は締め上げたくなる。自分があと十分早く出勤すればいいとわかっていても、それができないのが朝という時間帯なのだからと臍を噛む。

何台も近所の通勤車を見送っていると、通りの角を曲がる一台の旧型車がやってきた。呼び出し者の元までは自動運転でやってくる。しかしその後の運転は手動だ。星名は走り出したバスに跳び移るかのようにドアに手をかけた。

到着を知らせる機械音声を無視して車に乗り込む。

電動ネジマキ式は、ブレーキの左側にあるサイドブレーキを踏む込む時と、走行時に車輪を回す力動として車自身がネジを巻くことから称される。もちろん原動力は電気だ。それは温感式も一緒で、こちらは座席についた人間の僅かな体温を燃料電池の化学反応に利用している。

ここ百年でさらなる進化を遂げた文明の利器に感心しつつも、星名の目指す所は成田市の中心を貫く国道沿いにある会社だ。駅から徒歩十分と街の中心部にある。国道沿いといっても田舎なので、ビル群はせいぜい七階建てがほとんどで、昔からの個人商店も一緒に

並んでいる。所々に廃墟ビルや建設中のビルも並ぶ。開発はまだやりたい放題だが、それに見合うビジネスがないというのが現状だ。そんな中、星名の会社は零細企業といえどもビジネスチャンスを掴み何とか続いている。

今日はアポイントが十時半から入っている。事務作業をして机の書類を片付けたあと、クライエントの所に向かわなければならない。定刻の九時前にはデスクについて、メールの確認は済ませたい。

大抵の営業職に余裕なんてものはない。馬車馬のように、シャカリキ働くだけだ。朝の一連の作業は、そんな一日が今日も始まる事を告げている。

星名の恋人は、三年前に別れた女が最後だった。少々ヒステリックでうるさくはあったが、落ち込んだ時の支えでもあった。三十七歳にもなると同年代はほとんど結婚している。心の虚しさを感じつつも、星名は一人でいる気楽さを手放すことができない。言い訳になるが、日々の仕事は忙しく、誰かと生活を共にすることを見据えて、腰を落ち着けて考慮する時間を作れなかったのだ。

これが人生。印西市と成田市を行き来しながら、北総地域を営業車で走り回る。忙しくも、何も変わらない毎日。目の前の事をこなせばそれでいい。あとは風の吹くまま行き着くところまで流れてゆく。しかし、これといって流れる先もないのでここにいる。

これが星名の人生観だ。

星名の勤める会社は『成田グリーンクラブ』という。グリーンカーテン法施行以来二十年、人々に希望の種を、一年を無事に乗り切る苗を提供している。人の世代としては長く、宇宙全体の歴史から見れば豆粒ほどの時間と空間を、星名を始めとする五人の営業マンが箒星の閃光のように走りまわっている。

会社の業績は長年の不景気で緩やかな右肩下がりだ。この不景気は星名の祖父母の代から続いている。二〇一〇年代の影響が孫の世代までとは恐ろしい。

星名は本日メインのクライエントが八街にいることを考えながら、商戦に思案を巡らす。初夏を前にして、繁忙期が近づいている。

二〇五〇年の日本は、ゴールデンウィーク前になると住宅のほとんどが緑の蔓状植物に包まれる。エコ法と同時に施行された、グリーンカーテン法による夏季の習慣だ。生活空間を蔓状の植物で覆うことで、室内の温度を下げ、さらに真夏の狂ったような太陽光を遮断できる。冷房の効果も高められ、窓を開ければ風も通る。グリーンカーテンの歴史は古く、多くのメリットが認められてきた。義務ではないが、生命に関わる問題なので、老若男女、貧富貴賤、東西

南北に関係なく、国民は建造物のほとんどを緑のボール状にしようと鋭意努力する。

日本の過酷な夏の気候は、さらに勢いを増して人々を苦しめるようになっている。夏季における経済活動は滞り、日本のＧＤＰ、さらには世界経済への影響も否めなくなった。

ゲリラ豪雨による自然災害、巨大台風など他にも対処しなければならない問題が山積みで、たかだか暑いからという理由で日本国民を海外の避暑地へ避難させることはできない。実行に移せば、数年のうちに国家予算が食いつぶされ、国が崩壊してしまう。

取りあえずの過酷な暑さ対策として生み出されたのがグリーンカーテン法だったのだ。その場しのぎの中央政府が考えだしそうなことだ。気候のコントロールや局所的な高温気候予測などは、気象庁や各大学の研究者の今後の研究成果に期待するとして、国民は今年の夏を、暑さから身を守り乗り切るしかない。もうグリーンカーテンという言葉では収まりきらないだろう。その光景は、グリーンボールと呼ぶ方が相応しい。巨大なまりもの展覧会を撮影しようと、海外から多くの写真家が訪れる。相変わらず日本の夏はうだるような暑さだが、海外の日本ブームはしばらく続きそうだ。

「おはようございます」

「おはよう」

会社裏の駐車帯に車を止め、滑り込むように会社のビルに入ると福水がエントランスでエレベーターを待っていた。福水は紺色のハンカチで額の汗を拭った。水分を吸収しシミがまだらに広がっている。

「先輩暑くないですか？　俺はもうハンカチなしじゃやってけないですよ」

福水の体型からは、八割の人が“汗っかき”という体質を思い浮かべること確実だ。三十代前半というが、四十過ぎにも見える。腹は下腹がベルトの上に乗り、貫禄がある。二人で営業に行った日など、星名の方が若く見られる。

「俺も忍耐力はぎりぎりだ。今年も暑くなりそうだな」

日本の四季は、どこに消え去ったのだろうか。この十年、ほとんど二季しかなかった。春と秋は少しも顔を出さずに、日本の上空を駆け抜けた。

ゴールデンウィークを過ぎると、気温は三〇度越えが続く。大抵の人は、やっと衣替えに蹴りをつけられる十一月までの間に、一度

は身体を壊して床に臥(ふ)す。手当の厚い大企業では、猛暑休暇や猛暑手当が設けられているほどだ。

「あれ、玉置さん……じゃないですか？」

福水が地下階段から姿を見せた玉置に気が付いた。エレベーター横には小さな五階建てオフィスビルのすべての階をつなぐ階段がある。床には赤い絨毯が敷かれ、月の裏から流れてきた様な異質な空気が垂れこんでくる。玉置の肌にはあっているが、星名には馴染まない。

星名の二つ下といえばいい歳なのに、玉置は天性の軽快な性格の持ち主で、整った容姿から二十代後半に見える。しかし今は、その表情は暗く曇り生気が抜け、出勤時とは対照的だった。

「玉置？」

呼びかけても返事がない。星名の声は届いている距離だ。玉置は壁に額を当て、空中を仰ぎ見ている。足はふらついて今にも転倒しそうだ。

「福水、先行っていいよ。ちょっと様子を見てくる」

「あ、はい」

エレベーターが着くと福水はそれに乗り込み、星名は階段を降りた。多少引きとめられても始業時間には間に合うだろう。遅れても、課長には福水が適当に言ってくれるはずだ。

「玉置、どうした？　腹痛か？」

朦朧とした表情をこちらに向け、全身を壁へと預けた。バランスを崩して頭を打ってはいけないと、玉置を支えた。緊張から星名は仕事鞄を握り直す。

玉置は額にうっすらと汗をかいていた。福水のような気候と体型によるものではない。身体を支えた手のひらがひやりとした。シャツは冷や汗を吸い取り、残業後のように草臥(くたび)れている。

「おい、玉置」

肩をゆすると、縋(すが)りつくような様子で顔をあげた。

青ざめて生気がない。こんな表情をした玉置を見るのは初めてだった。星名は床の底が抜けたような恐怖を感じた。何か店内で不穏なものでも見たようだ。玉置越しに見える店の防音扉が物々しさを語る。

玉置を座らせて入口に近づこうとすると、星名の手に一枚の紙切れが押しこまれた。

「先輩、再見！」

「おい！」

絞り出したような声を出した後、玉置は風よりも早く階段を駆け

上がりビルの外へ飛び出した。
一体何が起きたのかわからない。動くのもやっとというほど鈍い動きしかできなかったはずなのに、もう視界にいないのだ。
事態を把握できなくても、今できるのは追いかけることだ。星名もビルの外に出ると、出勤ラッシュの人々をかき分け、会社前の国道の横断歩道を走り抜ける玉置が見えた。向かいにある弁当屋に突っ込んで行きそうな勢いだ。
星名も通りに出たが、歩行者信号は無残にも目の前で赤に切り替わった。止まった時間の流れを取り戻すかのようにたくさんのトラックや乗用車が、会社前の国道五十一号を轟音を立てながら流れてゆく。街の大動脈がどうどうと地面を揺らす。周囲の背の低い建物も一緒になって振動する。
どうしろってんだ？　これ？
星名は呆然と立ち尽くした。
通りの彼岸にいるはずの玉置は、国道を走る車と通勤ラッシュの人々の影ですっかり見えなくなってしまった。
無理矢理握らされた紙切れには、七桁の数列が二つとパスワードらしき英数字が十一文字、その下には一二桁の数字が書かれていた。
玉置は逃げるようにいなくなった。嫌な予感以外に何があるだろう？
全身が毛羽立って悪寒が走った。何かの始まりを告げるように、けたたましい始業のチャイムが会社のビルから聞こえた。
びくりとして星名が振り返ると、背後には男が立っていた。半歩下がり人を確認する。背後にぴたりと立っていたのは、地下のバーのマスターだった。

「星名さん、飯山（いいやま）社長からお電話入っています」
「あ、すいません。携帯の番号教えているのに、いつも事務所かけてくるんですよね」
会社の扉を開けると、星名は真っ先に事務の吉田（よしだ）から内線を受け取った。自分のデスクの上の電話で受ける。
吉田は昨年入ったばかりで子育てがひと段落した頃合いの再就職組だ。全職は異業種であったが事務の経験が長く、ここでも十年は働いていたのではないかという様子で仕事をこなし、気も利く。外周りの多い身分としては、留守を安心して任せられる。
「お待たせしました。星名です」
受話器を取ると、飯山はおどおどした口調で答えた。飯山の話し

方はいつもこうだ。電話対応が苦手なタイプなのか、顔を合わせて話す時より声が震えている。
飯山商事は、星名が営業をかけた会社だ。一年前に声をかけたが昨年は契約には至らなかった。めげずにアプローチをかけ続けると、今年は会社のビル全体を覆う苗七十本と蔓に覆われた後の社名プレートの発注を受けた。植物で覆われると、社名も見えなくなるビルがほとんどだ。そのため、蔓につけられる軽量型プレートの商品化に強い要望があった。自社で開発した社名プレートの売れ行きは好調で、苗の注文はなくともこちらで十分な結果を出していた。
「飯山社長、私はこれから外に出てしまいますので、今日は携帯電話の方に。はい。午後一時に参ります。よろしくお願いします」
星名は電話を切ると、営業車の鍵置き場から自分の車のキーを取った。
中小企業の経営は厳しい。無論これから乗り込む営業車は、電動ネジマキ式だ。
「星名、外周り行ってきます」
事務所に残っている吉田と福水に告げて事務室のドアに手をかけた。
「先輩、朝大丈夫でしたか？」
福水が呼びとめる。玉置の事が心配だったのだろう。
「ああ、マスターも今日は早番だったみたいで、あのあと会えたんだよ。真後ろにいてびっくりしたけどな」
「あの気配のないマスターですか」
福水は破顔し、かっかと声を立てて笑った。
玉置が飛び出して行ったことは伏せた。星名ですら、玉置がどこへ行ったのかわからないのだ。心配するな、との意味も込めて福水の肩を叩いた。
「人のこともいいですけど、先輩も色々と心配しすぎないでくださいね」
「お前の営業成績の方が心配だよ」
星名は壁に張り出している成績表を指した。福水は広く丸い肩をしゅんとさせた。
「そうねえ。でも、星名さんは働き過ぎだと思いますよ」
吉田は矛先を星名に向けた。
「今はよくても、これからが大変よ」
「二人揃ってご心配ありがとうございます。では、行ってきます」
星名は二人に見送られて事務所を出た。

「なんだよ。消臭剤切れてんじゃねーか」

朝と同じメーカー、同車種に乗り込みながら、星名は営業車の臭いに悪態を吐く。会社所有の車は、自動で迎えに来てはくれない。惰性でキーを回すと、こちらの気持ちを察したかのように、車のエンジンはかからなかった。もう一度と手をかけると、スピードメーター横の液晶に表示された、ネジマキ数が足りていない。エンジンをかけるときに、ある一定のネジマキ数が必要になる。時々、走行中やサイドブレーキだけでは足りなくなることがある。これが最大の欠点だと星名は思うのだが、新型車も開発され電動ネジマキ式の改良は行われない。

車が動き出すと窓を開けて換気を促す。

晴れた空は、雲と青空のコントラストが清明としている。吸い込まれそうなほどの青だ。何もかも放棄して、その辺の公園のベンチに寝転がりたいくらいだ。木漏れ日の下、皐月のさわやかな風に吹かれていたい。狭い営業車で、背の高い星名の両脚は窮屈そうにしている。この足を伸ばせたら、頭の上でもやもやと渦巻いている憂鬱も少しは晴れそうだ。

シガーソケットに接続したiPodからは、「Time of the Assassins」が流れる。昔のロックグループPrimal screamのインスト曲だ。ベースドラムとギターの疾走感に背中を押され、誘惑に負けそうな自分を励まし、今日の営業先へ車を走らせる。

「社長の立案ももっともですが、始めから華やかにしましょう。XIV（バリエーション14）ですよ。バッハのゴルトベルク変奏曲。中でも私の好きな一曲です。私の仕事は、毎回イメージがあるんです。今回は鍵盤場を軽快に飛び、流れるように、スマートな仕事。私のプランです」

男は暗闇の中でステップを踏んだ。静まり返った日吉台の廃ビルの薄暗い階段に、タンタンとフラットな音が反響する。

男は器用に長い足をさばく。昼間だというのに、ここには陽の光一つ入らない。窓にはベニヤ板が打ちつけられ、不法侵入防止にしているようだ。しかし、ビル入り口の鍵が老朽化して壊れていれば用をなさない。ゴーストタウンは絶好の密会場所となっている。

「十四回目か。君のイメージ通りに事は運んでいるのか？」

一緒にいるのは、背の低い男だ。貫禄があり、がっしりとした出で立ちだ。声は低く、嗄（しわが）れている。

「始めと比べれば、理想的なフィナーレを迎えられることも増えましたよ」
「……わかった。君のプランに任せよう」
暫し沈黙の後、枯れ声が言った。
「私達の付き合いも長くなったな。……彼の件は残念だ。回数が増えると、感づかれて動けなくなるからな。警察はもちろん、地主、市議会議員、君も長く続けたいのなら、これからは少し頻度を考えるべきだ」
「忠告ありがとうございます。しかし年齢もありますからね。動けるうちに動いておきたいんですよ」
「それでもこの街にはいられなくなるぞ?」
「それなら私も再見と言って去りましょう。資金さえあれば、行き先は自由ですから。今だってここを離れて一生苦労なく暮らせる貯蓄はあります。けれども、もっと手の届かない所にいきたいのですよ」
「これじゃあ、本業がどちらかわからないな。裏側の方が君にはあっている」
「ありがたいことにどちらも忙しいですよ。でも自分の仕事を続けるには、表の顔も必要になるんです」
「タフだね」
暗闇の中で男がつぶやく。自分には到底できないと諦めもこもっている。お互いの顔は見えないが、付き合いは長い。声色から些細な思考まで読みとれる。
「その行方を晦ませた、玉置という男には私も会えるのか？　最後くらい顔を見てやりたい」
「ええ。伝手がありますから」
背の高い男が、ジャケットのポケットから皺の寄った紙を見せた。駅近くにあるバーの紙ナプキンに文字が殴り書きされている。背の高い男は丁寧にたたみ、ポケットにしまい込んだ。
「……彼を消すのは気の進まない仕事か？」
「彼は私のことを信頼していたんですよ。だからいつもの方法で、場所を伝えてきた」
ポケットを叩いて、メモを示した。
「場所はセブンスヘブンという、十年前に廃業した空港近くのバーです。歓楽街の奥、あの辺りは殆ど閉店してしまって、空きビルはギャングのたまり場です。メモに書かれた数字は、北緯と東経の数値、それと緊急用に携帯電話の番号。彼は相当焦っている」
通信は傍受される危険もあるからな、と枯れ声が頷いた。

「今夜一緒にいきましょう。これが最後とわかると玉置はきっと驚きますよ。彼は引き際を誤りましたね。いずれにしろ、本番は明日です」

「講演は午後二時からだ。終わるのは三時。それまでにやってくれ」

背の低い男は、階段を下り陽のあたる入り口へ向かった。残った男はその背中に向かって言う。

「大臣は聴衆の前で一言も話せませんよ」

今日のメインであった八街(やちまた)市の不動産屋を訪問した後、富里(とみさと)市御料(ごりょう)の和食料理屋で遅めの昼食を取った。八街昔は千葉県の中央部に位置する農業の盛んな田舎町だ。訪問先は行きつけの和食店からほど近かったので、いつものこととなりつつも、のれんをくぐった。

若い頃はイタリアンでないと午後が持たなかった。今では高カロリーものを取ると胃もたれで仕事にならない。身体の中から感じる老いの兆候に、もう若くはないと感じざるを得ない。

その癖、仕事の負担は増えるばかりだ。午後のスケジュールは、得意先に今夏の発注数の確認と打ち合わせで埋められていた。

十五分ほど車を走らせ猫島(ねこじま)不動産に急いだ。

猫島社長は、とにかく時間に細かく、そのくせ引きとめはしつこい。ほとんどが世間話で、仕事に関わる話は最後の一言二言、ごく僅かだ。聞き逃しにも注意が必要だ。

猫島不動産は、成田山新勝寺の表参道沿い、上町に三階建てビルを所有している。一階にはテナントでイタリアンレストランが入っている。レストランの横には、上階へ続く階段がある。三階の入り口のドアを叩くと、いつものように秘書が社長室に通してくれた。

「お世話になっています。星名です」

猫島社長は、窓を背にして社長席に座っていた。ドアの所で鞄を片手に立つ星名を見ると、前へ出て来てソファーに座るよう促した。

「コーヒー二つ」

内線で秘書に伝えると、猫島社長もテーブルをはさんで向かいへ座った。ここまでは他の取引先と変わらない。問題はこの後なのだ。猫島社長はなかなか仕事の話をさせてくれない。天気の話位で本題に入りたいが、そこから世間話が始まるのだ。

「最近、この界隈で流行っている副業があるんだよ。サラリーマンの裏社会ってやつさ。その辺のバーやキャバクラででも聞く話だよ。知らないのか？」

「そうなんですか。私は知らないですね」

早く終わってくれないか、という考えを読みとられないよう、態度の中庸を心がける。そわそわした指先が動かないよう膝の上で交差させた。

「星名君の所みたいな健全な会社は、裏社会も倦厭(けんえん)しているからなぁ。クリーンな所にはクリーンな人が集まる。悪いことができない潔癖症。この類の話は無縁なのも納得がゆく」

たとえ目の前の利根川を大量のラッコが泳いでいたとしても、見なかったことにするが猫島社長相手の基本だ。ここで少しでも大げさに反応して見せたり、少しでも興味のある返答をしたりすると、さらに五つほどのトピックを聞かされ、外周りの貴重な時間をそれこそ奪われることになる。

しかし、星名は逆の覚悟を決めた。その噂されている“副業”の内容が妙に気がかりなのだ。鞄の中から蔓植物のカタログを出しながら、興味を示すように上目遣いをした。

「暗黙の了解として会社のグレーゾーンはどこにでもあるでしょう。そうでないと何も回りません。ここは自分の商圏ですからね、そういう“無縁の噂”も聞いてみたいです」

あくまで仕事の一環としてとの態度は崩さない。これは、個人的に興味があることではないのだ。

「暗殺」

「……なんですって？」

解せない顔をした星名を銃の形にした指で差し、猫島社長は言った。

「暗殺を請け負うんだよ。君のようなサラリーマンが」

星名は何度も見てきた、街を行き交う人々を思い浮かべた。今日、会社前の国道の通勤ラッシュの様子。下のイタリアンレストランで食事を取っていた客。店前の通りにも自分と同じように営業で歩いているサラリーマンらしき通行人がいた。グレーの背広を着た中年の男。それとすれ違った、ストライプスーツを着たフレッシュマンの若者。その男に、二十代後半くらいのグレースーツの女が色っぽい視線を送りながらすれ違った。

サラリーマン。

星名はその定義に思案を巡らす。会社に雇われ働く者たち。労働を提供し、その価値を会社から月給という形で受け取り生計を成り立たせる。その金銭に見合った衣・食・住で生活する、気が付けば最もメジャーとなった現代人の生き方。

ガチャリと入口のドアが開いた。タイミングを見計らったように秘書がコーヒーを二つ置いて出て行った。

星名は乾いたくちびるを舐めてから話し始めた。
「副業にしては、規模が…。それは副業と呼んでいいのですかね？」
「手軽にネットでの時代じゃないんだな」
猫島は気色を含んだ笑みを浮かべる。
「実際、いい金が入るらしい。競合会社の社長を消すんだ。ハイリスク、ハイリターンでいい生活するためには、いい手段ということなのかもしれない」
「背負いこむことの大きさが異常ですよ。僕だったら、いくら高額の報奨があるとしてもやりませんね」
「はは。あくまで噂だ。私に堂々と副業は暗殺ですと丁寧に教えてくれた奴もいない。ある日いきなり、勤怠に問題のなかった社員と連絡が取れなくなった。そんな不幸な会社も知らん」
「では、それは裏付けのない、都市伝説なのですね」
星名は口角をあげてニコリとした。冗談はこれでおしまいだ。
「そうだ。ここ数回では、どの現場でも黒服の若い男が目撃されているらしい。これも、友人達の情報だが。しかしサラリーマンの男性といえば、この街だけでもごまんといる。こんな街じゃ何の面白い話もないからなぁ。やだね、昔ながらの鄙びた国際都市っていうのは。空港周りは経済特区で多くの企業が誘致されたけれど、少し離れるとさっぱりだからね。つまらない噂をでっちあげて暇つぶしするしかないんだ」
「暗殺犯が普通のサラリーマンってことはないでしょう。暗殺はプロの仕事ですよ。それに成田の住民は、暗殺・犯罪率の高さには慣れていますからね。どこかの社長が命を落とすことも生活の一部です。きっとこんな噂はすぐに下火になりますよ。人の噂も七十五日。千里走った所で、異常な要人殺人と犯罪率とは無縁の街」
「うまいな」
猫島社長は、星名が取り出したカタログを手に取った。ページをめくりながら、付箋を手に取る。
「発注数が前後するかもしれん。また連絡するよ」
「いつもありがとうございます。それではまた」
すぐに来客があるのかもしれない。星名は、出されたコーヒーを少しだけ飲んだ。せっかく出されたのに飲まれないコーヒーも可哀そうだ。退室のタイミングを逃がさないよう、早足に退室した。
成田で犯罪率が上昇したのは、二十年前からだ。安全と言われていた日本も、成田から様子が変わりはじめた。
ことは来日した経済大国の大臣が、成田で開いた講演会中に暗殺されたことに遡る。国際空港を擁する成田は、東京オリンピック開

催に合わせて経済特区に指定された。空港周辺には、外資系企業の支部や日本本社が置かれるようになり、地域経済の競争が加速された。空港以外にこれといった経済拠点がなかった成田では誰もが喜ぶはずだったが、企業同士の潰し合いも同時に始まった。

当たり前にやり取りされる賄賂、公正取引委員会の監視の目に余る、異常な数のカルテル、コンプライアンス違反、繰り返される内部告発。成田グリーンクラブのような、ごく一般的な会社がほとんどであることを信じたいが、実際、クライエントの会社がどのくらい裏社会に入りこみ黒く染まっているのか第三者は分からない。出入りのある営業は多少なりとも知っているだろうが、その営業社員が買収されているとなれば話は別だ。どこの会社も尻尾を出そうとしなかった。猫島の会社もしかり、裏でどのくらい権力を持っているのか知る由はない。猫島は、星名との業務に紐づかないことには口が堅かった。星名はあくまで、公正な方法で蔓植物の苗を売るまでだ。不正は必要ない。夏の暑さと建物の数だけ、苗の需要はいくらでもあった。

星名は営業車に乗り込んで煙草を燻(くゆ)らせた。車内は禁煙だが、他に同乗者はいない。煙草臭くても誰も構わないだろう。

フロントガラスに煙を吹きつけ、跳ね返ったそれを浴びる。

星名はサラリーマンと言う匿名性について考え始めた。その匿名性の中で窮屈そうにしている自分を時々見つける。狭い営業車に閉じ込められ、ここから出してくれと言わんばかりの掻痒感(そうようかん)が背中で暴れまわっている。

成田に蔓延する都市伝説によると、溢れんばかりに街を歩く人々の中に、サラリーマンを盾にして暗殺者というもう一つの顔を持つ者がいるらしい。もしその様な人物がいるなら、暗殺者のほうが、主たる顔なのかもしれない。それに食われて大事にしている仮の姿が剥がれ落ちることはないのだろうか。その人物は、寄生虫に内蔵をすべて喰い尽された後でも、皮の身一つでサラリーマン社会を生き抜けるのか。入れ替え可能な社会システムの中の歯車でいることが、容易でないことは誰もが身に染みている。それは大臣、社長もしかり。

例え大臣が暗殺されポストに空きができても、社長が亡くなり会社が倒れたりしても、また次の同じ顔をした様な誰かが同じ位置に立つ。次の大臣、次の社長が現れるか、ポジションが会社ごと入れ替わる。

我々サラリーマンの自由は、心の中にこそあり。中身を喰われてはいけない。

そんな言葉が、ぼんやりと星名の頭に浮かんだ。
星名は腕時計で時間を確認した。少し休憩を取った後、事務所に戻って事務処理をしよう。
星名はスピードメーター横にあるネジマキ数を確認した。カウントはそれなりにあったが、エンジンがかかるかぎりぎりだった。星名はハンドルと送風口の間にある手動ネジを三回巻いた。リセットボタンを押したかのように、全身の掻痒感がひいてゆく。不思議な安堵を覚え、一息ついた。生産工場への注文書がたくさんたまっているので、今夜は残業だ。

建物の所々が朽ち、全体にくもの巣が張り巡らされている。数年も前に辿りついただろう枯れ葉が、今日の風に吹かれてかさかさと音を立てる。玉置は、ゴーストタウンと化した空港エリアの場末にある、セブンスヘブンの跡地に身を潜めていた。雨風は凌げるが、そう長くはいられる様な場所ではない。人目につかない事をいいことに、日吉台の廃ビル並に闇取引や違法集会の場となる。姿を見られれば、追手を増やすだけだ。下手に公共の車を使えば、足が付いてしまう。託したメモを頼りに、玉置は人を待った。

夜半に近い頃カウンターの中で耳を欹(そばだ)てていると、微かに店前の小道の砂利がはじける音が聞こえた。調子の悪い蝶番が音を立てる。
「玉置、いるのか」
「やっと来た。今日はもう何も食べられないかと……」
カウンターを出て、僅かばかりの光の中に佇む影を見て玉置は言葉を失った。
「おい……どうして二人もいるんだ」
驚愕して状況が飲み込めない。
「顔を合わせるのははじめてだな。私は飯山だ。君には、いくつかお世話になったよ」
後から店に入ってきた飯山は、恭しく握手を求めた。玉置は後ずさってカウンターの中に戻ろうとした。
「玉置、落ち着けよ」
先に入ってきた背の高い男は、玉置の腕を引っ掴み、壁に向かって叩きつけた。動きの予測をできなかった玉置は、人形のように叩きつけられた。頭部と左肩を激しく打ち付け、痛みに表情を歪めてそのまま座りこんでしまう。
「やっと顔が見られたよ」
飯山はしゃがみこんで玉置の顔を確認する。

「私は先に戻っていてもいいかな」
「ええ。五分で終わります」
飯山はぎしぎしと唸る扉をしっかりと閉めて外へ出た。
「さあ、お望み通り二人だ」
背の高い男は、玉置に寄った。光源が少なく、座りこんだ玉置からは、男の表情が見えない。
「望み通り？　一人で来ると思った。助けが来ると思った。こんなことって……」
「お前のやったことは理性のない荒らし行為だ。忠告は何度もした」
玉置は躍起になって噛みついた。
「俺達は同じことをやっている！　これからも一緒にやっていく仲間だろう？　俺達の仕事は刷新だ。世界のシステムを更新する作業だ」
「お前には敬意がないんだ」
「敬意？　この世界のどこに払えばいいんだそんなもの」
玉置は吐き捨てた。
「……みんな緑色になる。風と葉が奏でる音楽が聞こえる。夏には自然へ還るんだ」
「そんな美しい光景が、その目に映るんですか。金儲けをしたい奴の依頼を受けて、障害になる人物を暗殺。相手が社長でも、大臣でも。土地勘と人脈を活かして完璧な仕事ができるのは、このエリアを常に移動し最新の情報を持っている人間でなければ分からない。俺達のような。そうだよなぁ。成功すれば報酬はすべて自身のもの。……くだらない詭弁（きべん）を弄（ろう）するのはやめろ。多額の報酬金の出所は、美しいんですか？」
「金に美しいも何もない。報酬は仕事に対する価値だ。私の仕事にはこの街、フィールドが必要なんだ。それを破壊する者と、共存はできない」
玉置に男の表情は見えないが、醸し出す空気が変わった。玉置はいよいよ震えだした。語気の強かった声は震え上がった。立ち上がり後ずさろうとしても足に力が入らない。靴は土を引っ掻き、乾燥した砂の下から固い地面を覗かせた。
銃を持った男がさらに詰め寄る。玉置の胸ぐらを掴んで壁に固定する。
「もう同業者は終わりにしよう。二人は多すぎる」
男は激鉄をあげた。銃口はぴたりと玉置のこめかみに当てられる。玉置は歯をガタガタと震わせながら、必死に声をあげた。
「っとにふざけんな。この野郎！」

「ヒステリックになるなよ。昔別れた女みたいだな」

「終わったのか？」

小道に停めた車の横の人影が尋ねた。

男はまだ温かい銃を上着のポケットにしまい、運転席のドアを開けた。

ハンドルを握る手が震えている。手のひらは思いきり打ちつけたようにびりびりと痛んだ。撃った時の反動がまだ骨を振動させている。何度も繰り返している行為だが、その後暫らくは、自我が空中分解した様な感覚に陥る。ゆっくりと口を開くと、息に膜が付いた様な声しか出せなかった。

「冷静さを欠いた無鉄砲な奴や、玉置みたいに下手にハマると……時々勘違いするんですよね。裏の仕事が、実際以上に影響力があると、他の物よりも重要で尊い物と思うんですよ。しかし、所詮ポストに過ぎないのです。そこにいた駒が消えると、滞りをなくすために後から似たような駒が補充されるんです。同じことをできる者を、より効率的にできる者が当てはめられるのです。ただそうやって回ってゆくだけの物です。……それでも、私が夏に見る街の姿は美しいんです」

飯山は座席に深く座りなおした。憐みを帯びた目で、顔を青くしたまま動かない運転席の男を見た。

「この街に深く潜り過ぎたんだな。本人が気付いた時にはもう遅い。二度と浮かび上がれはしないんだ。清濁併せ呑んだつもりでも、汚れってのは溜まってゆくものさ。それでも君と同じように、この街は美しいと思うよ。そうだ、狂気が美しさを際立たせるのだ。本当に素晴らしいよ。街は一つの有機体だ。毎日姿を変え続ける。私たちは皆、この街の光でありまた陰でありながら、街を生かし続ける細胞の一つに過ぎないのだ。そのためにたった一つの命を賭(と)すのだ。……ああ、素晴らしいよ」

飯山は恍惚とした表情を浮かべて、身体を背もたれに預けた。

車は静かに発進し、車のライトが交差する通りへ向かった。大型トラックの強力なライトが、小道から出て来た車の運転席を満たす。男は未だに震える右手を、目が眩むような大量の光の帯に翳(かざ)した。

星名が営業車で公津の杜エリアを通りかかると、先日来日した大臣のスピーチの準備が整った所だった。公津の杜は、成田市内でも

比較的新しい街だ。昔から若いファミリー層に人気があり、ショッピングセンターや品のいいカフェで溢れている。

スピーチの会場は公津の杜駅に併設された、屋外イベント会場だ。五千人は収容できるスペースがある。イベントが開かれていることは多いが、今日は街全体に妙に緊張感が漂っている。

昨日の残業は深夜まで続いた。日付が変わるより前に家に着くはずだった。事務所に戻ると緊急のクレーム処理に追われ、福水の手助けをしているうちに、福水に移した方が円滑になる業務を発見してしまった。福水の同意も得て引き継ぎ作業に移り、気が付けば会社に残った最後の一人だった。残業は控えていたが、昨夜ばかりは仕方がない。

農作業のような重労働をしたわけでもなく、身体の節々に痛みがある。所々、筋が張っている。大きく伸びをして、眠気を追い出そうとするが、どうも完全には抜け出してくれない。残業とは何とも言えない魔物である。

次の約束まで余裕があるので、休憩も兼ねて外野から喧騒音だけでも聞こうと窓を開けた。会場の司会者が、大臣の経歴を紹介している。エコーで時々聞きとりにくい単語もあった。星名は駐車スペースを探し周辺を回った。やっとイベント会場にも近い住宅街の路地に車を寄せた。

「〇〇大臣のスピーチです。前回来日の際は、公式な場でスピーチの場を設けられなかったことから、今回〇〇大臣と日本政府との協力により実現することができました。厳戒な警備体制のなか、皆さまには大変ご迷惑おかけします。ご協力のおかげで、予定通りスピーチが行えます。……すみません。ご準備が遅れているようです。少々お待ち下さい」

ステージ上の演台の前には、防弾ガラスも備えられている。ＳＰは会場内に百人以上揃えられ、厳重な警備体制が敷かれていた。成田を知る星名も驚きを隠せなかった。これほどの警備員や警察官を見るのは初めてだった。

二千人近い聴衆は、首を長くして大臣の登場を待っている。

車を止めた所からも、会場の賑わいの状況が確認できる。誰よりも早く大臣の姿を見ようと、後方では人の頭の間から覗きこもうと背伸びをする人もいた。

多数の要人、地元有力者等の暗殺事件にも懲りず、成田で開催するとは向う見ずだ。

この大臣の場合、帰国前、日本国民へのスピーチを計画したのがまさに命取りだった。来日の成果として何かのパフォーマンスが必

要だったのだろう。しかし、この機会を狙った、暗殺依頼があったのだ。

星名は暗殺を知っていた。そして、この後会場の聴衆自らが混乱となり渦巻いて街へと波及してゆくはずだ。『大臣が撃たれた』と司会が発表しさえすれば、誰も指示は聞かないだろう。一目散に、人々は出口に殺到する。その姿を何度も見てきた。

星名の携帯が震えた。

「はい星名……。吉田さんですか。疲れ様です」

吉田からの電話だった。会場の音声が入らないよう車の窓を閉めた。飯山社長への折り返し依頼だろうか。直接携帯にかけてくれれば助かるが、事務所にかける癖が抜けないようだ。

今日は疲れているから、クレーム処理は勘弁してくれと思いながら吉田の言葉を待った。

「星名さん、また今日もスケジュールいっぱいにして周っていませんか？　まったく、働き過ぎですよ。飯山社長からお電話ありました。折り返ししてください」

予想通りの内容に、胸を撫で下ろす。折り返せば、またいつものびくつくような声で電話を受けるのだろう。顔を合わせれば鼻もちならない裏社会の覇者であるのに、表向きは気の弱い意気地のない社長だ。いや、本当に弱いからこそ、正攻法を使えないのかもしれない。

そこまで考えてから、吉田に礼を言う。気にかけてくれる同僚がいるというのは心強い。周りのサポートがなければ、仕事は成り立たないのだと実感する。疲れている日は尚更だ。

「はい。連絡ありがとうございます。仕事の方は大丈夫ですよ。むしろ暇な方がまずいですよ。それに息抜きしながらやっていますから、どうぞ心配せず」

「本当ですか？　星名さんはまるで……そうねえ、二人分働いているみたい。気をつけてくださいよ。玉置さんみたいにどこかへ消えちゃったりしたら、皆、驚きますからね」

吉田の声はどこか冷ややかだった。

星名は背筋を震わせた。脳髄まですべて凍ったように固まった。

この沈黙の間に、電話の向こうの吉田は笑っているに違いない。

「ああ、本当に素晴らしいよ」

〈了〉

【編集後記】

文芸『草の丘』が産声を上げてから丁度三年が経つ。そのあいだ、春秋二回のペースを守って上梓してきたが、原稿集めに苦心したことは一度もない。時期が近づくと誰かが掲載予定作をメールで送ってくる。その原稿に、他の会員からの批評やアドバイスが加わり、推敲に推敲を重ねて発行の日を迎える。それほどに会員の創作意欲は旺盛であり、掲載作もバラエティに富んでいる。

◆第七号で特筆することは、新人の堀本ひろしの加入である。堀本は七〇歳を超える高齢であるが、ウェブ文芸誌に自作を掲載するためパソコン教室に通ったという。常滑市から宅急便で送られてきたワードの原稿は誤植や変換ミスなどがいっぱい。それでも数回の校正で見違えるほど立派な短編小説に仕上がった。その作が『廃屋の人形』であるが、創作に対する並々ならぬ情熱と読者をひきつける強烈なインパクトには敬服する。

◆今回は、七人の会員がほぼ同じ枚数の創作を発表している。

土方 杳の『そばにいるよ』は、十六夜という妖精を登場させて、軽妙にストーリーを展開させた。児童文学によく用いられる手法かも知れないが、すっきりした出来栄えである。

中川とらの掲載作は、連載の第二回目であるが、少女の瑞々しい感性が心憎いほどに描かれている。香取 淳の連載は六回目を迎え、原稿用紙で三五〇枚を超えた。二度と核戦争で人類が滅びないようにと新世界における経典づくりに主人公たちが知恵を絞る。唐瀬 光の『青いみのり』も第三話。登場する人物は爽やかな美少女ばかりだが、性同一性障害に悩む暗い若者ではなく、それを乗り越えて伸び伸びと生きる少女たちを描くライトノベル。

畑中康郎の『一発逆転の夢』は短編小説の構成について参考になる作と思われる。短編で多くを描くことには無理があり、時間と空間を絞る、あるいは描くシーンを絞り込むことが必要か。

いんば華子の『リプレイス』は、百年後くらいを想定したＳＦ仕立ての短編であるが、モチーフや場面設定に物足りなさを感じる。力のある作家なので、次作を期待したい。

以上、第七号の掲載作を紹介して、短い批評を加えた。新たな会員が加入してくれることを熱望して止まない。

〈香取 記〉

草の丘 第七号

発 行　二〇一四年十二月二十三日

編集兼発行人　印旛文学の会 香取 淳

連絡先メール　katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ http://bungeikusano-oka.raindrop.jp